

# ジョジョの奇妙な冒険 一泣血の独唱曲一

うーゆ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある街を、スピードワゴン財団に所属する一人の青年が訪れる。彼の目的は一人の少女を説得し、財団本部へと連れて行く事。

だが、街ではスタンド使い達による事件が多発していた。

街で起こる奇妙な事件を追う内に、二人は壮絶な闘いへと巻き込まれていく。

架空の街『エベール』を舞台にした、少しの恋愛とバトル要素多めな仕様。

※オリジナルのスタンドも登場しますが、一巡後のパラレルワールドで有る為、既存スタンドをオリキャラが使うカオスな展開になります。

# 目次

邂逅	1
アリア・ヴァリフレード	5
侵入者	12
銀の戦車	23
罪	31
居場所	38
『リング・ア・ベル』	44
『リング・ア・ベル』②	52
『ハーティ・レグナ』	59
命令	65
名前	72
『アルク・ブラック』	78
『アルク・ブラック』②	84
『アルク・ブラック』③	91
『ブラッシュ・リーパー』と『コバルト・ベルセ』	100
『ブラッシュ・リーパー』と『コバルト・ベルセ』②	110
『ブラッシュ・リーパー』と『コバルト・ベルセ』③	124
命令②	139
『グリーン・チップス・ベルト』	152
『グリーン・チップス・ベルト』②	165
波紋疾走	180

## 邂逅

飛行場からバスと何度か電車を乗り継ぎ。

右手に旅行用カバンを引つ提げた金髪碧眼のルーク・アルニーニヨは、とある街の駅前に辿り着いた。

『ようこそ、エベールへ』と書かれた巨大な看板の前で、ルークは懐から携帯電話を取り出し、連絡を入れる。

「……俺です。ええ、たった今着きましたよ。これからホテルに荷物を預けて、その後で彼女の所へ向かいます」

会話をしながら旅行用カバンを一旦近くのベンチへと置き、ルークは右手の腕時計で時間を確認した。

「しかし、自分で了承しておいて言うのもアレなんですが。本当に俺で大丈夫ですか？ 高校生の女の子と会話した事、数えるぐらいしか無いんですけど。スーツが皿に乗って回っている店とかの話振られたりするんですかね？ あるいは最近流行っている石鹸の事とか？」

『……彼女の元へは、スピードワゴン財団の優秀な使用人達を配置している。何か有れば彼女達に訊ねてくれ。もつとも、君なら上手くやれるだろうが。彼女と歳も近い事だしな』

電話口の相手は、少し枯れた男の声で返した。

「まあ、彼女……：アリア・ヴァリフレードが気難しい人間じゃあない事を祈りますよ」

ルークは周囲を見回し、荷物を持ってタクシー乗り場へと歩を向ける。

『……分かっていると思うが、くれぐれも無茶はするな。奴等はスピードワゴン財団の人間を直接狙い始めてもいる。厄介払いみたいにな。だがそれは、我々が奴等の目的に近付いている証拠でもある。

奴等が、この街で何かをやるつもりでいる事は確かな事なのだ。現に街の近辺では、数年前から奇妙な事故や事件が多発している。

ヴァリフレード家から石仮面と弓と矢を盗んだスタンド使いの作業とみて間違いないだろう』

「吸血鬼と凶悪なスタンド使いを増やして、やりたい放題ですか。盗んだ奴が何処の糞野郎かは知りませんが、見つけたらアメフトでインターセプト取るみたいに最優先で奪い返しますよ」

『生まれつきスタンド使いである君なら、それも可能なのかも知れない。だが、先ずは彼女だ』

「分かっています。そろそろタクシーに乗るので、では」

ルークは電話を着るとタクシーに乗り込み、行き先を告げる。

タクシーがホテルに向かう車内で、ルークは鞆の中からファイルを一冊取り出して目を通し始めた。

スピードワゴン財団が集めた、この街に関する情報と。

これから会う事になる、アリアについての資料である。

もう飛行機や電車の中で何度も読み返しているが、再度読み返して自分の目的を確認するのが、彼のやり方だった。

(……俺がこの街でやる事は三つ。アリアを説得し、財団本部に連れて行く事。彼女にヴァリフレード家の『真実』を代表に代わって伝える事。そして、強奪された弓と矢の行方を調査する事)

しかしながら、何度資料を読み返してみても腑に落ちない点がある。アリアについてだ。

(アリア・ヴァリフレード、エベール女学院高等学校在学。成績は優秀で、現在生徒会長を務めている。

十年前に父親の運転する車が山道を走行中に事故に会うも、彼女だけは奇跡的に生還する。しかし、その影響で右眼の視力を失い、現在も車椅子生活を強いられている、か……)

ルークは頭の後ろを掻いた。

(資料には。スピードワゴン財団の最新医療ならば、彼女の脚の具合も回復に向かう可能性が高く、また損傷した右眼に関しても僅かにだが視力を取り戻せるかも知れないとある。

その為に、彼女を本部へと連れて行く必要があるのだが。……何

故、彼女は財団からのその申し出を断り続けているんだ？)

事故の後、彼女は懸命にリハビリを行い、奇跡的とも言える回復力を見せたらしい。

日常生活を送れるまで身体が動くようになったのは、彼女の血の滲むような努力の成果である。

しかし、努力だけでは越えられない壁というのも有る。

今ならばまだ、アリアは大幅な身体の回復が見込める年齢だ。

スピードワゴン財団の治療を受けるのは、今を置いては無い筈なのだ。

(もしかすると彼女は、自分だけ助かった事に負い目を感じているのか？ —— 俺の願望としては、この街の住人として今の生活を幸せだと感じているから、離れたくない。なんだが)

事故後、アリアはエベールの総合病院に運び込まれて治療を受け、一命を取り留めるのだが。

彼女の生存は事が落ち着くまで当然のように伏せられ、街から連れ出す事もしなかった。

敵の正体が分からない上、身体が回復して間も無い、まだ幼い彼女を本部へと運ぶのは医学的にもリスクが大きかったからだ。

そして何より。

父親を失ったという現実と向き合う為の、心の整理が必要だとスピードワゴン財団の代表が判断したので有る。

それから十年間、現在に至るまで。

アリアは通院を続けながら、この街で暮らしている。

(もしそれが彼女の望む幸せなら、これ以上無理強いするのは野暮っでもんだ。しかし……)

ルークは最後に。

この街で過去に起きた事件の資料を流し見て、終わりの方で手を止める。

弓と矢の行方を追っていたスピードワゴン財団の職員が、この街でスタンド使いに襲われ、消息を経った事件である。

三人の内、一人は斬殺死体となって発見されたが。

残りの二人は、その後無事に救出されている、といった内容だった。問題なのは。

その二人を救出した、資料に記されている人物の名前である。アリア・ヴァリフレード。

確かに、そう記されていた。

(これが事実であるのなら、彼女もスタンド使いという事になる。何者なんだ、彼女は。この街で、一体彼女は何をやっているんだ?)  
浮かぶ疑問。

小さな好奇心。

しかし全て、一旦ファイルと共に鞆の中へと仕舞う。

ルークが次に開いたのは、スイーツ特集の雑誌であった。



## アリア・ヴァリフレード

穏やかな陽射しに包まれた校舎の、昼下がり。

整った顔立ちの銀髪の女子生徒が一人、車椅子を自走して三階の廊下を進んでいた。

すると、彼女に気が付いた二人の女生徒達が教室から飛び出し、声を掛ける。

「アリア会長、私達がお手伝い致します」

「生徒会室まで一緒に」

女生徒達からの申し出に、銀髪の少女……アリアは車椅子を止め、フンワリと彼女達へと微笑んだ。

右目を覆う眼帯を差し引いても、その優れて美しい容姿は同性ですら惚けるだろう。

「ご親切に、どうも。シャーリーさん、メルサさん。ですが、これも訓練だとお医者様から言われてしまっているので。ごめんなさいね」

恭しく頭を下げたアリアに、二人も慌てて頭を下げる。

内心は自分達の名前を知っていた事実に歓喜しているのだが、あくまでも淑やかに努める。

「では、私はこれで」

再度軽く会釈をしたアリアは、二人の前を通り過ぎ。

しかし少し進んだ所で車椅子を止めて首だけ振り返った。

「そうそう。美味しい紅茶が手に入りましたから、明日の放課後。一緒にいかがですか？」

「え、私達が……良いんですか!?!」

「ええ、他のお友達も連れて来て下さい。部屋のドアは開けておきますので、どうぞ良しなに」

アリアは優雅に銀髪を耳に掛けながら、二人に向けてもう一度笑顔を見せる。

そして、押し殺したような彼女達の黄色い声に気付かないフリをし



て、廊下を曲がって行った。

「あ、でも待って。あつちは確か、階段だったわ」

「アリア会長、エレベーターとは真逆の方向へ。いくら成績優秀で容姿端麗なアリア会長でも、あのお身体では階段は上れないわよ」

二人は急いで廊下を曲がり、階段へと走ったが。

「あれ……？ え？」

そこで立ち往生している筈のアリアの姿は、奇妙な事に忽然と消えてしまっていたのだ。



四階の生徒会室前。

アリアは上着のポケットから鍵を取り出す前に、異変に気が付いた。

鍵をポケットへと戻し込むと、白く細い指先でドアノブを捻ってみる。

鍵は開いていた。

「あらあら」

微笑してドアを開き、中に入るアリア。

革張りの長椅子がコの字に置かれ、その中心には薔薇の装飾が施された硝子のテーブル。

壁には予備の椅子が二脚と、アンティーク調の食器棚や本棚が置かれている。

その内、予備の椅子の一脚に二十代前半と思われる男が座っていた。

上着を左肩に担ぎ、手帳を開いている。

「不法侵入ですよ？」

「学院長からちゃんと鍵を借りてる。まあ、電話口では君を訪ねる事しか伝えていなかったが」

男はアリアに見えるように鍵を持ち上げた。

アリアは車椅子を器用に操って部屋の奥に併設されている給湯室

に入り、ヤカンを火に掛けた。

「電話での急なお話でしたが。貴方は、スピードワゴン財団の……？」  
「ルークだ。財団内部では特殊研究班に所属している」

「……。今、お茶をお出しするので。そちらの椅子に腰掛けてはいかがですか、ルークさん？」

ルークは椅子から立ち上がると、革張りの長椅子に腰掛けた。

そして持っていた封筒を逆さまにして、中の写真をテーブルに広げた。

「君を待っている間、暇だったからな」

その中からルークが数枚の写真を持ち上げる。

写っていたのは、少女だ。

キャンプで撮った写真や、海辺で撮った写真も混ざっている。

眼帯に覆われていない左眼で、アリアは軽蔑の眼差しを送った。

「あらあら。乙女の机の引き出しを探るだなんて。どうしましょう、ハラズメントですよ？ いえ、犯罪ですよ？」

アリアはにっこりと微笑んだ後、写真を丁寧に揃えてテーブルに置いた。

そうしてテーブルを離れ、給湯室へと向かう。

「これは、この写真に写っているのは。近頃この街を騒がせている集団失踪事件の被害者達だな？ 君は独自に事件を調べて、勝手に首を突っ込んでいるのか？」

「紅茶のお菓子は、マカロンですか？ それともシュークリームかしら？」

「質問を質問で返さないでくれないか……!!？」

少し苛立った様子でルークが言う。

それでもアリアは悠長にポットにお湯を入れ、紅茶の準備をしている。

「報道では確か、昨日で八人でした。ここ数ヶ月の間に行方不明者になっている女性は。メディアは集団失踪事件や、神隠し事件として取り上げているようです」

「表向きはな。だが実際は違うんだろう？」

ルークは上着のポケットに右手を突っ込んで探った後、何かを握っている右手を机の上に近付けた。

と、手を開くとその場に突然ノートパソコンが出現する。

アリアが目丸くした。

「今のは……。ルークさんも、スタンドを？」

「君だから見せた。君も俺と同じように。生まれつきのスタンド使いなんだろう？」

ルークはパソコンを立ち上げ、幾つかあるデスクトップ上のファイルを開く。

「行方不明になっている彼女達の周囲の人間関係やSNSからは、失踪を仄めかすような繋がりはない。住んでいる場所もバラバラだ。

友人との電話中に突然会話が途切れ、そのまま行方が分からなくなったり。同居人や家族らが部屋を訪れて事件が発覚している。

そして、その証言から夜九時から十一時の間に一連の事件が起こっていたという説が有力だ。

部屋の中には飲み掛けのコーヒーカーップ等もそのまま、財布や携帯電話も机に置かれたままだったらしい。勿論、目撃者なんていないし、街中の監視カメラにも彼女達は一人として映っていなかった」

「——流石は財団の情報網ですね。穏やかな街で起こる事件にも、目を光らせているという事ですか」

「まあな。特に、君に関する事は」

「私、ですか？」

アリアは小首を傾げた。

絹の様に流れた銀髪が、フワリと彼女の膝に掛かる。

「亡くなった君のお父さんはスピードワゴン財団の著しい発展を支えた幹部で、財団職員からの人望が厚く、現代表とも親しい間柄だった。

その娘である君の身体を心配した代表は、本部で最新の治療を受けさせたいと考え、何年も前から文書を送っている。が、君の了承は中々得られない」

「私にはまだ、この街でやる事が有りますので」

「そうだ。君の返事はいつもそうだったらしい。だから今回は、手紙

の代わりに俺が来たんだ。君が何故応じないのかを調べる為にな。そして今回は、連れて行くのに手段は問わないと言われてもいる」

少し嘘と睨みを利かせたが、アリアは意に介さずカップに紅茶を注いでいる。

てつきり突っ掛かるかと思つたルークは、内心拍子抜けだった。

「——どうぞ」

紅茶を淹れたカップを皿に乗せ、アリアはルークの前に差し出した。

彼女は所作一つ取つても美しく、気品に溢れた振る舞いをする。

また然り気無く角砂糖の入った瓶を隣に用意し、茶菓子のマカロンも丁寧に薔薇の装飾が入った皿に乗せての提供だ。

アリアが紅茶を片手に優雅に微笑むと、ルークは両腕を組んで一度深呼吸した。

「……君は。こういう事なのか？ 君のやる事というのは、この手の事件を解決する事か？ 学生の君が」

ルークは写真の束に視線を落とした。

「今回の失踪事件。たったの数時間の間に痕跡を残さずに人間が居なくなる、という大変不可解な事件です。

警察は多方面に捜査を展開していますが、意図的なスタンド攻撃の可能性は大いに有り得ます。このまま放っておけば、また被害者が出てしまう」

すると少しだけ声を低くして、アリアが紅茶を一口齧りカップを皿に置く。

「——今回だけでは有りません。この街では数年前からスタンド使用による事件が度々起こるようになっていきます」

「ああ、それも調べたよ。だが君はその身体だ。スタンド使いとしてはもう、再起不能だろうか？」

「私の身体の事は、余りお気になさらず」

「いいや、言わせて貰う。スタンドが見えるから解決出来ていた今までの事件なんかとは、今回は明らかに性質が違う。君はこの辺りが引き際だ」

手紙とは違う、諭すような口調の生声。

ルークのその言葉を聞いて、アリアは少し心が痛んだ。

文書の送り主で父の親友でもある現代表には、だいぶ気苦労を掛けてしまっているようだった。

多少強引な方法になろうと、安全な場所に財団は匿いたいのだろう。

しかし。

それでも自分がやらなくてはならない理由が、事実存在する。

この場で口にするのは怖い。

それを語る事で、自分が責められているような感覚に陥るから。

「……………」

「それに、まあ……………」  
すると。

沈黙したアリアに代わって、紅茶で口を潤したルークが口を開いた。

「——お父さんの件で。君一人が責任を感じて、全部解決する必要なんてないんだ。君の成すべき事はきつと、そういった過去の柵から抜け出して。幸せに成る事だ。本部で最新の治療を受ければ、君の身体は今よりずっと良くなる」

「…………代表は、私が責任を感じている事までご存じなのですか？」

「そりゃあ無い。君に直接会った俺がそう思ったってだけだ」

ルークはマカロンを一つ手に取り、一口で食べた。

「そう、ですか。少しだけ安心しました」

アリアもマカロンを一口だけ齧り、その魅惑の美味しさに瞳を輝かせ、思わず頬に手をあてがう。

「安心？」

「ええ。私がお話を断っていたのは、財団の雰囲気というか。そういうのが苦手だと感じていた事も有るんです。でも…………ルークさんが優しい人だったので、一先ず安心しました」

そして上機嫌な口をそのままに、アリアは微笑む。

それを受け、反射的にルークは咳払いを挟んだ。

「だが、今回の事件は確かにスタンド使いでなければ解決出来そうもない。そこで、だ。俺も一つ手を貸そう」

「え？」

「手段は問わないと言われていたからな。命令違反じゃあないだろう」

我ながら、情に流され易いと思うルーク。

それでも一番手っ取り早い方法だと思った。

暫くは街に滞在する事になるので、長丁場は覚悟の上だ。

「つまり。事件を解決させてから、私を本部へ？」

「そうなる。君の身の安全は、俺が保証するよ」

「は、はあ……。えっと、助かり……ます」

アリアは苦笑いを浮かべ、その申し出を受ける事にした。

特に断る理由が無いのが、理由である。

「うん、宜しく頼むよアリア君。早速だけど、情報共有といこうか」

ルークはパソコンを操作し、別のファイルを開いた。

## 侵入者

パソコンの画面にはこの街の地図が映し出されており、所々に印が付いている。

ルークはキーを叩いて更に詳細な情報を上乗せした。

「これは……被害者の家と名前が記載された地図ですか？」

アリアが画面に顔を近付ける。

「ああ、情報を整理する時に俺が作ったんだ」

「まあ、便利なスタンド能力ですね」

「いや。これはパソコン使える奴なら誰でも出来るよ」

「そ、そうなんですか……!? こんな凄い事を、皆さんは平然と？」

「何だ、アリア君はパソコン苦手なのか」

「は、恥ずかしながら」

アリアは若干赤面しながら恐る恐るキーボードを指差す。

「これだけボタンが沢山有ると、どれが電源なのか分からないです」

「立ち上げる前の段階か……!? おい、まさか携帯電話も持ってないのか？」

「ば、馬鹿にしないで下さい！」

アリアは少し膨れた表情で鞆から小さな長方形の物体を取り出した。

それが彼女の掌に乗ってゆつくりと姿を現した瞬間、ルークは恐ろしいモノでも見たかのように。

一人、戦慄を覚えた。

(な、何iiiiiiii……!? こ、これは……まさか。まさか、ポケベルじゃあないか!?)

思わず、パソコンを叩く手が止まるルーク。

現在は既にサービスそのものが終了しており、医療従事者や消防局といった携帯災害無線が必要な事業者のみが使っている。

現在での使用率は二%を下回り、一般人が使うメリットが全く無いに等しい。

そのポケベルをアリアが持っている事よりも、彼女がこれを携帯電話の機種だと思い込んでいる方が問題だった。

「その……あくまで個人的な好奇心で聞くんだが、アリア君  
「はい」

「それは、その……使えるのか？　もしもし、とか街中でやったりしているのか？」

「いいえ？　電話の掛け方が分からないので」

「そうか、それは良かった」

理解した。

ルークは色々と、理解をした。

何故スピードワゴン財団が、手紙に拘っていたのかを。

真心を込めるだとか、丁寧だとか。

そうではなかった。

アリアはパソコンも携帯電話も使えないのだ。

だから、彼女に足りない能力を補える自分の適性が高かった。

スピードワゴン財団の職員を救出した、というのは何かの間違いなのではないか。

ここまで凄まじい天然思考には出会った事がない。

おっとりとした口調やマイペースな仕草からも、今の所は世間知らずのお嬢様といった印象だ。

「そろそろ話を戻そう。この地図から見ても、俺達だけで搜索すると  
なると範囲はかなり広い。行方不明者がもうこの街にいない可能性  
だつてある。」

兎に角、先ずは情報だ。スピードワゴン財団を通して、警察からの  
情報が入って来るのを待つ。後は被害者宅を一件づつ訪問して、スタ  
ンドの痕跡のようなモノを見付ける。君も、それで良いな」

それで自分に今出来る事は全部だ。

彼女も搜索に加わっているから満足だろう。

このまま警察と連携してスピードワゴン財団が本腰を入れて搜索  
すれば、事件はいずれ解決する筈だ。

目的の一つであるアリアの説得も達成し易くなる。



「そう、ですね……」

アリアは自らの唇に人差し指を当てながら、パソコンを物珍しそうに眺めている。

そろそろ片付けて本題に移ろう。

ルークがパソコンの縁に手を掛けた時、しかしアリアは言うのだ。「被害者の方々は、まだこの街の中に居ます。監禁されているんです。私の予想では、恐らくこの辺りに」

「は……？」

アリアの人差し指は、駅の有る北側から離れた。

それも、港が有る西南方向を避けた位置、街のほぼ中央を指差している。

「詳しい場所まではまだ分かりませんが、この場所を中心とした半径十キロ圏内。それもマンションやアパートといった、隣人との関係性が比較的希薄な場所だと思います」

「君は、何を言っているんだ？ どうしてそんな事が分かる？」

「被害者が女性とはいえ、人一人を連れ去る事が出来るだけのパワーを持ったスタンド。恐らく、敵スタンドは近距離パワー型のスタンドです」

「近距離パワー型？」

「スタンドが本体から余り離れられない代わりに、パワーやスピードが優れているタイプです。射程距離はスタンドの基本性能によって多少の誤差はありますが、二メートルから五メートル、といった所でしょうか」

アリアは地図の上を指先でなぞった。

「スタンドの射程距離を計算に入れた場合、短時間の内に連れ去って逃亡する為には、安全なルートが必要です。監視カメラの多い駅前や人通りを避けて行くとなると、経路はこのように限定的。

一人ならばともかく、八人を同じ手口で連日のように連れ去っている事から、ある程度の計画性に基づいた行動であると推測出来ます」

「……………」

「そして計画を成立させるには、拠点の存在は必須。人目を避けるに

は細い小路しか無く、何より車等を使えば目立ちますから、徒歩で連れ去っている可能性が高いです。

故に、連れ去った被害者を一時的に閉じ込めておける場所が必要となります。被害者の方々のお住まい全てが徒歩圏内。それが、丁度この辺りなんです」

(な、何なんだ？ この子は……!?)

「——以上の条件から考察すると。敵スタンドの能力は対象の姿を隠す、もしくは小さくする、といった連れ去るのに適したスタンド能力なのかも知れません。……このパソコンの地図情報を見て思った事は、そんな所でしようか」

鋭い視線から一転して、アリアはやんわりと微笑んだ。

それから半分残してあったマカロンを小動物のようにモグモグと食べ、紅茶を飲み干した。

「あ、そういえばルークさん。パソコンが使えるなら、一つお願いしたい事があります」

「あ、ああ。それは別に構わないが」

「パソコンで被害者の方々の写真が見たいんです。私が集めた写真とは違うモノを」

アリアはそう言うと、目頭を押さえながら瞑想でもするかのよう目目を閉じて唸った。

「少し待って下さい、今思い出しますので。えくくつと……何でしたっけ。名前。三文字の……この前教えて貰ったんですけど。専用のアップル？ がどうかの、写真等を投稿出来るサービスらしいのですが……」

「ん？ ああ、それは多分写真投稿型のSNSの事だろうな」

ルークはクスツと笑い、パソコンを操作して必要情報を打ち込み、少女達がプールで撮ったで有ろう一枚の写真を表示した。

少女達四人が横に並んで、笑顔を見せている。

「こ、これですこれです。凄いですね、ルークさん。あつという間に」

アリアは玩具を貰った子供のよう喜び、再びパソコンの画面を食

い入るように見た。

「他の方々の写真もお願いします」

「……ん？ ちよつと待ってください」

ルークはそう言つてパソコンを預かると、カタカタとパソコンを十分程操作し、アリアに渡した。

その間に、アリアは新しい紅茶を自分とルークのカップに注いだ。「被害者達全員の写真だけを見れるようにしといた。更新状況にもよるが、過去二ヶ月以内のモノなら全て見れる」

「は、はい。ありがとうございます。……えつと……？ 次の写真を見るには……？」

アリアは両手の人差し指を立て、恐る恐るパソコンを数回突つついた。

すると写真が閉じられ、別のファイルが開いた。

「あ、間違えました。さっきの所に……」

と、顔を赤らめ狼狽した様子でパソコン突つづく。

すると本体横のイジェクトボタンに触れたのか。

CDドライブのトレイがカシャツと音を立てて飛び出し、アリアが

「きゃっ!？」と短く悲鳴を上げた。

「すいません、壊しました」

「いや、謝るのは俺の方だ」

そう言つてルークは。

トレイを元に戻しパソコンを操作した。

被害者達の画像を、二人で端から順に見て行く。

すると五人程を流し見た所で、アリアが口を開いた。

「ルークさん。最初の方の写真に戻って下さい。二週間以内で、一番新しいモノを」

「？ 分かった」

彼女は何か気が付いたのだろうか。

ルークは言われた通りにする。

水着姿の少女が四人、並んで映っている以外は何の変哲も無い写真だった。

左中央に映っているのが被害者、という事しか分からない。

「次の方の写真も同じ条件で」

次の写真を見せる。

今度は夜、被害者が一人だけで映っていた。

小綺麗な店が建ち並ぶ通りの前で撮られている。

最初は四人で今度は一人。

「次の方を」

ルークは指示に従う。

少女が二人で映っている以外は先程の写真同様、妙な所は無い。

するとアリアは一旦パソコンの前から離れ、適当な紙と定規を持って戻ってきた。

「ルークさん、もう一度先程と同じように最初から順にお願いします」

言う通りにしてみる。

すると今度は画像が切り替わる度に、パソコンの画面に直接定規を何回か当てて、その数字を紙に書き込んだ。

そして、何か計算している。

「……約百八十センチメートルですね」

「え？」

そんな事を囁いた。

「被害者の方々が映っているこの写真ですが。彼女達の身長や建物、影の長さ等から逆算すると、実は全て……同じ高さから撮影されているんです。

計算上、彼女達を撮影した高さは約百八十センチメートルです。撮影した人物のクセなのか、毎回同じ角度で、屈んでもいません」

「な、何を言っているんだ？」

「最初の写真、テーブルに置かれた彼女達の荷物は四人分です。二枚目の写真も、親しい友人と撮るには少し離れた位置から撮影されています。つまり、ルークさん。」

この写真は、友人や彼女達自身が撮った写真では無いんです。別の第三者にカメラを預け、撮影して貰ったモノでしょう。そしてそれは、全て二週間以内に撮影されています」

「お、おいおい。ちよつと待て。まさか、行方不明になった彼女達全員の写真が……」

「まだ確定では有りませんが。仮にもし。全て、同じ高さから撮影されていたとすれば。その撮影した人物というのは、一体誰でしょうか？」

「取り敢えず、全員見てみるか？」

ルークは写真をスクロールし、アリアと共に再び画像を見ていく。今度は、注意深く見ていく。

すると八人目の写真に差し掛かった所で、突然アリアがルークの首を掴んだ。

街中で撮られたであろう写真である。

「ルークさん。この写真。この、彼女の後ろを走る車の、助手席側の窓。見えますか？」

そう言われ、ルークは顔を近づけて目を凝らす。

すると、一瞬の反射の中に、小さいが映っていた。

スマートフォンのカメラを被害者の女性に向けている、金髪の男の顔が。

「コ、コイツは……!？」

「計算上では、この写真も百八十センチの高さから撮影されています。カメラの構えている位置を考慮すると、男性の身長は百八十九センチといった所でしょうか」

「印刷しちまおう。画質は荒くなるが」

ルークはそう言うのと懐を探り、何かを握る。

その手を机に近付けると、今度は突然プリンターが出現した。

手際よくルークは印刷し、男の顔が印刷されたコピー用紙を机に置く。

「助かります。本当に便利な能力ですね」

「人と同じで、世の中には物の幽霊ってのも存在しているんだ。俺はその幽霊になった道具を使う事が出来る。それが俺のスタンド能力だ」

「そ、そうなんですな……幽霊……」

するとアリアは苦笑いを浮かべながら、ゆっくりとパソコンとプリンターから離れた。

少し青冷めても見える。

知らない方が良かっただろうか。

話を切り換えるつもりで、ルークが男の顔を指差した。

「この男も、俺達と同じようにスタンド使いつて事か」

「——恐らくそうですね。ですが、彼女達を連れ去った犯人では無いと思います」

男の顔が印刷されたコピー用紙を持ったルークにアリアは言う。

「人目に付かないように連れ去っているのなら、彼女達の前に一度姿を見せているのは不自然です。多分、連れ去ったのは別のスタンド使いです。仮説ですが、写真の男性の役割は彼女達を選別し、居場所を特定する事だと思います」

「仲間がいるつて事か……!?!」

「はい。そして役割が有り、目的が有り、計画性が有るという事は、一つの集団。もしくは組織によって統率されている可能性が高いという事です」

「成る程。若い女を手当たり次第、というワケでは無さそうだな。やり口が回りくどい上に、効率が悪い。しかし、彼女達を連れ去る事が先ず第一の目的だとすれば、早々に殺しはしないか」

「それでも時間は余り有りません。私の考えではもう何人か、連れ去ると思います。そして、計画の段階が進めば、彼女達を連れて街を離れるかも知れません。そうなれば、搜索は不可能になってしまいます」

「しかしだな、監禁場所を搜索するとなると。いよいよ敵と遭遇する確率は高くなる」

「私がスピードワゴンの職員さんを救出した事、ご存知ですよ。どうぞ良しなに」

「……君は本当に学生か？」

目の前の少女を見て、ルークは思う。

スピードワゴンの職員を救出した所で終わり、では無かったら

う、アリアの場合。

そもそも何故、スピードワゴン財団の人間がこの街に来て。

そして何を調べていたのか。

恐らく彼女はスピードワゴン財団がこの街を極秘裏に調査していた事と、今回の事件との関連性について気が付き始めている。

「何処まで知っている？ いや、分かっている？」

直球を投げてみた。

アリアなら、この質問だけで十分だろう。

彼女は顔を背けた。

「……あの、今はまだ」

「そう、か」

まだ分からない、ではなく。

言えない、という意味だろう。

穏やかに話をしてはいるが、要はこの街から離れて欲しいと訴えている現状。

もし財団以上に彼女が敵に接触していたとすれば。

そしてそれを代表が知れば。

今度は彼女をこれ以上関わらせないように、強制的に連れ出す可能性も有る。

全てがアリアを守る行為だとはいえ、出来れば互いに避けたい事態だ。

アリアもそれが分かっているのだろう。

これは信頼の問題だ。

「……搜索だったな。俺も行くよ」

兎に角、今は目の前の問題だ。

アリアが動く以上、彼女を守らなくては。

ルークは紅茶を一気に飲み干し、マカロンも早食いして上着を羽織った。

パソコンとプリンターも回収し、ついでに鞆の中に金髪の男が印刷されたコピー用紙を入れる。

「鍵を返してから、慎重に進めるとするか」

「あ、あの。ルークさん。……我が儘を聞いて貰って、すいません」  
「人助けだろう？ 気にするなよ。俺だつて助けたいんだ」

素っ気なく去つて行くルークの背中を見て、アリアは頬を掻いた。  
「危なくなつたら、逃げて下さいね」

「君も一緒にな。……下まで押してやる」

「あ、はい。お願いします」

アリアがそう言うと、ルークは彼女の背中に回り。

車椅子を押し始めた。

少し嬉しそうに、アリアは顔を綻ばせる。



その二人の様子を。

中庭を挟んで、反対側の校舎の屋根の上から一人の男が見ていた。  
頭の両側を刈り上げ、派手なピアス。

明らかに学校関係者ではない佇まいである。

二人の姿が窓に映らなくなつてから、男は双眼鏡を顔から離す。

「スピードワゴン財団の人間がよお……」

男は屋根の上を移動して行き、二人の姿が見える位置で足を止める。

「こんなお嬢様学校に何の用かは知らねえが。テメエ等の動きは逐一見張つておけて言われてんだよお」

二人は専用のエレベーターに乗った。

一階だ。

一階に降りて中庭を通つて此方の校舎に入る。

どうやら、あの車椅子の少女と行動を共にするらしい。

「病院にでも連れて行くつもりか？ それとも、あの女は重要人物なのか？ ——まあ、俺にはどっちだろうと関係ねえがよお」





## 銀の戦車



一階に降りたアリアとルークは、たつぷりと陽射しが降り注ぐ、整備された中庭へと差し掛かった。

他の生徒の姿は無いようだ。

瑞々しい緑の葉を蓄えた木々が、木漏れ日を作ってゆらゆらと風に揺れている。

二人が木の側を通ると、その木の枝葉から小鳥が二羽、羽ばたいていった。

「凄い庭だな。ベンチまであつて、ちよつとした公園じゃあないか？」

「学院長様の御趣味だとか。一応、一般の方にも開放されてはいます」

「自慢したいだけだな、そりゃあ」

「そ、そうかも知れませんね」

笑いを堪えながら、アリアが相槌を打つ。

足元は石畳が模様のように敷き詰められており、車椅子のアリアでも難なく走行出来た。

「そう言えば、ルークさん。車の運転って出来ますか？　ここからは結構離れているので……」

アリアが訊ねると、不意に車椅子を押す力は弱まった。

返事も無い。

「……ルークさん？」

不思議に思い、アリアが振り返るが。

後ろにいる筈のルークの姿は無い。

アリアは直ぐに車椅子を操り、百八十度ターンする。

「ルークさん？　何処、ですか？　もしかして木陰で休憩してますか

？」

見回すが、誰も居ない。

中庭は不気味な程に静かだ。

と、左目の視界の端。

少し離れた位置に有る、階段状になった煉瓦花壇の裏側に。

芝生の上に仰向けで倒れているのだろうか、ルークの両足だけが見えた。

「っ!？」

アリアが漕ぎ出すと、両足は凄まじい速さで裏側へと引き擦られ、姿を消した。

遅れて到着したアリアが花壇の裏側へと回り込むが、芝生と木以外は何も無い。

隣接する校舎の廊下に並ぶ窓ガラスは全て閉じられており、しかも内側からしか開かない仕様だ。

「ルークさん!? 返事をして下さい! ルークさん!」

アリアは周囲を見回すが、ルークの姿は忽然と消えている。

「まさか、そんな…?!? これは、既に!」

余りに速く。

ついさつき、情報を得たばかりのルークが狙われ、連れ去られたという事実。

(スタンド攻撃……! 似ている。行方不明になった方々と。今起きた、この状況)

途端にアリアの左目は細められ、警戒体勢となる。

(このまま敵が、私を見逃すとは思えない。……しかしそれは、とても好都合です)

いつでも車椅子を動かせるように、車輪に両手を乗せた。

(この敵を倒し、ルークさんを救出する!)

呼吸を整え、アリアは集中する。

強く、深く――。

(何だあ？ この女、逃げねえぞ？)

アリアの背後。

花壇の煉瓦の隙間から、空気の抜けた風船の様に薄っぺらな物体が音も無く出て来たかと思うと。

一瞬で膨らんで男の姿になる。

校舎の屋根の上から二人を観察し、この中庭でルークを襲った男である。

(てっきり逃げてよお。こっちの射程距離に勝手に入って来るかと思っただぜ？)

男は自らの唇を舐め、数歩アリアに近付くとスタンドを出現させた。

右手に四、五十センチ程の針状の剣を持った人型のスタンドで、腕や足の表面は凹凸状の装飾に覆われている。

(だったら、このまま。さっきの男や女共を拉致つたみてえに。俺の『ソフト・マシーン』。その綺麗な首筋にポツカリ風穴開けて、この女もよお)

目の前には。

此方に背を向けた状態の。

車椅子に乗った隙だらけの少女が一人だけ。

(行くぜ！ 射程距離に入った！)

男のスタンド、『ソフト・マシーン』はアリアの首筋目掛け、その右手に持つ針状の剣を繰り出す。

スタンドすら見る事が叶わない相手だと。

致命的な油断を抱えたまま。

攻撃は。

突如としてアリアの背後に出現した、彼女のスタンドによって防がれる。

白銀に、そして一部が金色に輝く甲冑を全身に纏った。

細身の中世騎士を彷彿とさせる人型スタンド。

その右手に持つカップヒルト・レイピアの根元で針先を受け止めた

アリアのスタンドは、守護霊であるが如く男へ睨みを利かせる。

「こ、この女！ スタンド使いか!？」

男が驚愕する中、アリアは素早く車椅子を操作して自身を反転。スタンドの剣が吐き出す金切り音と山吹色の火花もそのままに、重心を外して敵の針先を明後日の方向へと受け流す。

彼女の意思を寸分の狂いも無く再現する騎士のスタンドは、透かさずレイピアを返して反撃に転じる。

『『シルバー・チャリオッツ』!』

猛烈なまでの、突きの連打を嵐の如く瞬時に前方へと展開。

男の両手足をスタンドごと幾重にも貫き、制圧する。

背後へと吹っ飛ばされた男は校舎一階の壁に激突し、悲鳴を上げた。

(な、何い……?!? コイツ、ヤバイ……!! コイツのスタンド……!)  
「命までは頂きませんので、悪しからず。貴方には色々とお尋ねしたい事が有りますから」

アリアはスタンドを引つ込めると、両手足の傷口から血を流して倒れる男へ向かって自走する。

辛うじて、男は立つ事は出来た。

急所は外れており、致命傷ではない。

(ちくしょう、何て……!)

いや、違う。

正確には。

外して貰った、が正しいだろう。

アリアは、男の上着のポケットに丸められて入っているルークを一瞥した。

「成る程。攻撃した相手を、萎んだ風船の様に薄くする能力ですか。貴方のそのスタンド。人を沢山連れ去るには、最適任の能力ですね」  
少しずつ。

間合いと敵の攻撃の予兆を見計らう様に。

アリアは近付いて行く。

(何て事だ。この女、行方不明の女共を追ってやがる……!) 生意気

にも、学生なんて身分で。こんな、一人じゃストッキングも上げられねえような体で……!」

「この間合いから攻撃してきた事から、スタンドの射程距離は一メートルから二メートル。受けた剣圧の強さから考察する攻撃パワーは、私の『チャリオッツ』よりも上。以上の点から、貴方のスタンドを近距离パワー型と判断致しました」

アリアは男から一定の距離を置き、車椅子を止めた。

やや右斜めを向いて、左目の視界を広げる徹底ぶり。

中庭でルークと話していた時の、年頃の少女の面影は何処にも無い。

完全に戦士としての雰囲気を漂わせている彼女の声色は、実に冷ややかであった。

「お茶でもしながらお話を、と言いたい所ですが。先ず返して頂きたい人がいるので。——返答次第では、再起不能になって貰います」

(ス、スタンドの射程距離を確実に計算に入れてやがる……! 経験豊富な奴だ、闘い慣れているな……!)

男はポケットを探り、小さく丸めた物体を幾つか取り出した。

「俺の『ソフト・マシーン』が薄っぺらく出来るのは、人間だけじゃないんだぜ?」

その幾つかの物体を、男はアリアの頭上高くへと投げ放った。

アリアはハツとする。

中庭の煉瓦花壇の端の一部が、持ち去られている。

「能力を解除してやればよお。重さと質量は元に戻るんだぜえ?」

無数の黒い影が太陽の光を遮り、アリア目掛けて落下した。

これは煉瓦ブロックだ。

当たり所さえ気を付ければ大怪我にはならないし、ひよつとしたら当たらないかも知れない。

しかし車椅子のアリアにとっては、只でさえ走行し難い芝生の上で。

この後無造作に転がる事になる煉瓦ブロックを避けながら正しく走行出来るか、実際かなり怪しい。

最初から、倒す事を目的とした攻撃ではない。

これは退く為の時間稼ぎである。

『チャリオッツ』……!』

特に焦る様子も無くスタンドを出現させたアリア。

覆い被さるかのように降り注いだ煉瓦ブロックの雨を、『シルバー・チャリオッツ』は凄まじいまでの剣捌きで瞬時に切り伏せて弾き飛ばしていく。

しかも切断した煉瓦ブロックはモーゼが海を二つに割ったが如く、アリアの走行を妨げないように左右へと落下していき。

小綺麗に、芝生の道を形作った。

そのまま道の真ん中を走行したアリアは、男目掛けてスタンドを突進させる。

「っ!? 『ソフト・マシーン』!」

男がスタンドを出現させると、アリアの攻撃は文字通り空を斬った。

突然、男の姿が消えたのだ。

遅れて『シルバー・チャリオッツ』に追い付いたアリアは、周囲を見回す。

と、校舎一階の壁に取り付けられている、雨水排水用のパイプが目についた。

「あらあら」

左目を細め、詰めが甘いとばかりに短く息を吐く。

パイプの入口には、真新しい血が付着している。

アリアは車椅子を後退させ、屋根を見上げた。

パイプの中を移動し、屋根の上へと移動した男は。

息を荒くしながら隠しておいたりユツクの元へと移動した。

中には、双眼鏡と一緒に携帯電話が入っており。

その中に丸めたルークを振り込んだ。

そして男は迷う事無く、電話を掴む。

その時だった。

「こんにちは」

車椅子に乗ったアリアが、屋根の上に着地。

涼しい顔で現れたのである。

少し車椅子は傾いているが車輪を力強く押さえ、その場に止まっていた。

「お友達とお話中でしたか？ ……ああ、その様子ですと、これからのようですね」

「何い……!?!」

男は携帯電話を放すと、ルークを掴んで引き擦り出す。

スタンドを出現させて剣先をルークへと向けた。

薄っぺらになったルークは昏睡状態にあるのか、目を閉じたままである。

(コイツ、スタンドを使って車椅子ごと上がって来たのか……!?!  
さっきの剣捌きもそうだが、これは相当に訓練されたスタンド能力……!?)

「随分と、悠長な方なんですな」

アリアが、不気味に微笑した。

『シルバー・チャリオッツ』を出現させ、少しだけ車椅子を漕いだ。  
「私を動けなくしたいのなら、もっと早くに人質を使うべきでした。  
今のその一瞬の迷いが、貴方の敗北を決定的なモノにしたんです」

「おいつ、近付いてんじゃあねえっつ！ 誕生日ケーキに蠟燭立てる  
みてえに、コイツの顔面に針先ブチ込んで殺すぞっ！」

「はい、私はもう近付きません。攻撃は終わっていますから。貴方の  
負けなんです。既に私に倒されていて、御仕舞いなんです」

「な、何言って——」

気が付けばアリアのスタンドは、いつの間にか。

その場で、右手の剣を高速回転させていた。

直後、男の頭の上に鈍い衝撃が走る。

「ぶ……!?!」

意識を手放す直前に、男は理解した。



この感触と重さは間違い無い。

これはさつき自分が使った、煉瓦ブロックだと。

スタンドを引っ込めたアリアはうつ伏せに倒れた男の元へと、自走して来た。

「先程、貴方が使った煉瓦を一つ、拾って持ってきました。『チャリオッツ』が貴方の頭上に弾き飛ばしていた事に、気が付かなかったようですね。——御愁傷様」

ルークの身体が元に戻り、無事を確認出来た事に取り敢えず安堵したアリアは、男の荷物を一瞥した。

リュックの中には双眼鏡と、携帯電話が一つ入っている。

「これで何か、進展があれば良いのですが……」

## 罪



「男の名前はデイド。三十五歳。今回の失踪事件の被害者達は、やはり。この男が拉致していたらしい」

「あらあら。と、いう事は一気に解決ですね」

「それが、もう暫く掛かりそうだ。君の予想通り、何処かに彼女達を監禁しているのは間違いないらしいが。この男は金で雇われていただけで、拉致した人間はバックに入れて指定の場所に置いていたらしい。しかも置き場所は毎回変更になっている」

「つまり、引き渡す人間の顔は見えないし、彼女達を監禁している場所も知らない。敵の目的も不明。という事でしようか」

「ああ」

中庭でアリアとルークを襲ったスタンド使いを倒し、スピードワゴン財団に引き渡して二日後。

客室に通されたルークは丸テーブルを挟んでアリアと向かい合って座り、紅茶と苺のショートケーキを食べていた。

アリアが客人として、家にルークを招いたのである。

もし次に戦闘になりでもしたら、一般人を巻き込む危険があったからだ。

なので、放課後。

ルークはアリアを迎えに来た高級車に同乗し、屋敷に招かれた。

少しばかり気が引けたが、壁際に立つメイド達が見守る中。

二人はティータイムをしながら事件について話す事にした。

ちなみにケーキは、ルークが店に二時間並んで買ったモノである。

助けて貰ったお礼のつもりでアリアに食べたい物を訊ねると、駅前の人気洋菓子店『グラン・ボネ』の苺のショートケーキが食べたいとの、結構具体的な要望があった。

人気過ぎてお昼前には売り切れてしまいうらしく、何より自分が並ぶ

と他の客の迷惑になってしまうと、健気な悩みを打ち明けた事も手伝って。

意を決して、ルークは一人で女性比率九十八パーセントの列に朝から並んだのだ。

「状況は進展していない。だが、俺達に有利な点の一つある」

「……監禁場所を移動させる事が難しい、という事です。あの能力が使えなくなった今、全員を一度に移動させるのは不可能です。しかも、後々の事を考えると一ヶ所に集めている可能性が高い」

「念の為、昨日の内に警察には情報提供しておいた。搜索の包囲網は街の中心を囲うようになってきている筈だ。まず逃げられない」

ルークは苺にフォークを突き立てると、一口で食べる。

テーブルの側には、紅茶のポットや皿、レモンやミルク等が乗ったワゴンが用意されており。

紅茶の御代わりや菓子を取り替えるタイミングを図るかのように、メイド達は視線を送って来ている。

「しかし俺達のやる事には変わりはない。この前ので分かった。ありや一般人には無理だ。だから監禁場所を特定するなら、警察より早い方がよい」

アリアは話しに耳を傾けながらも、剥がしたショートケーキのフィ Lumに残った生クリームを名残惜しそうに一瞥した。

「取り敢えず、俺の方で夕方調べとくよ。君には明日手伝って貰う」  
そうやってカップを持ったルークだったが。

アリアが半眼で此方を睨んできたので、ばつが悪かった。

一先ず紅茶を啜る事にする。

「何故、デイドさんはルークさんを襲って来たんですか？ 幾らなんでも早過ぎます」

ルークは目を反らしてゴクゴクと、紅茶を飲んだ。

「スピードワゴン財団の人間だと知って、街に入った時から付けて来ていたのでしょうか？ それは、ルークさん達が敵の正体を知っているからではないですか？」

「……。」

本当に。

勘が鋭い娘だと、ルークは心の中で苦笑う。

そして彼女の強さは『信頼』出来る強さだと、ついこの前実感出来た。

出来れば巻き込みたくない、等という願望は結局の所。

彼女には侮辱的に映ってしまうだろう。

「——今から、六年前。この街から五十キロ程離れた海岸沿いに、奇妙な死体が流れ着いた。腐敗は進んでいたが、死体には首筋から全身の血を抜かれた形跡が有り、骨格と歯形から成人女性である事が判明した。そしてその後の調査で、その近海で同じような女性の死体が合計で四十三体見付かっている」

ルークはアリアの表情を盗み見ながら、慎重に言葉を選んだ。

「断定は出来ない、が。その死体の特徴から見て、吸血鬼化した人間達の餌になった可能性が高い。——君の言う通りだ。俺達は今回の敵の正体に、見当が付いている。そして類似的な事件はこの数年で拡大し、この街にまで及んだ」

「——矢がスタンド能力を引き出すように、石仮面は被った人間を吸血鬼化させる。以前、私が救出したスピードワゴン財団の方が、こっそり教えて下さいました。つまり、そういう事なんですよね?」

アリアの声色は、若干震えていた。

左眼も、潤ませていて。

「確信出来ました。やはり。私の父が保管していた石仮面と矢が、使われてしまっている。と、そういう事、なんですよね?」

「おい、言っておくが。俺が君に言わなかったのは、君が罪悪感を抱くからとか、そういう事じゃないぞ! 悪いのは全部、盗んで使っちゃまう奴等なんだからな!」

ルークはテーブルを叩いて立ち上がった。

「いいか! 君はもつと幸せに生きるべきなんだ! そうなる義務がある! 今まで辛い事が多かった分、こんな事件なんて俺達に任せ、昼間からスイーツ巡りでもすれば良いんだ!」

「……………」

呆気に取られ、目を丸くするアリア。  
客室全体に沈黙が流れ、壁際のメイドの一人から白い目で見られる。

車椅子の可憐な少女相手に、立ち上がって大声で叫ぶ大人。

この空気、どうしたモノかとルークは冷や汗を掻いた。

と、メイドの一人が、空になったアリアのカップに紅茶を注ぎにやって来た。

切り揃えられた前髪に、フワリとしたツインテールの黒髪の少女である。

「あ、レンさん。気を遣わせてしまいましたね」

「いえ、アリア様」

抑揚の無い声で、レンと呼ばれた少女は恭しく頭を垂らす。

それからついでに、ルークから見えないように身体でアリアのケーキの乗った皿を隠すと。

別の皿に置かれているクリームが付いたフィルムを手に取り、フォークを使って丁寧に素早くクリームを取り除いた。

そして、クリームの付いたフォークを使って、残っているアリアのケーキを三等分に切り分ける。

「失礼を致しました」

手際が良かったので、ケーキを切り分けた事をルークは不思議にも思わなかった。

「ルーク様も。お代わりを、どうぞ腰掛けてお待ち下さい」

そう言つてルークを自然に座るように促し、紅茶を注いだ後。リングを手にとって果物ナイフで手早く切り分けて皿に乗せた。

カットされたリングはウサギ型になっている。

「まあ、可愛らしい」とアリアが喜んだ。

それを見てルークも安堵する。

去り際に、アリアはレンに耳打ちで「ありがとうございます」と伝えました。

僅かにだが、レンが微笑んだ。

と、その時。

客室の扉が少しだけ開いて、運転手兼執事を勤める初老の男性が顔を覗かせた。

丁度目が合った茶髪のメイドに耳打ちすると、男性は扉を閉めた。

茶髪の少女は面倒臭そうに頭を掻いた後、アリアの側に近寄る。

「おいアリア。お前の通っている病院の医者から電話だよ」

思わずルークは紅茶を吹き出しそうになった。

しかし、誰も気にしていない様子である。

「あらあら、そうですね。ルークさん、少し席を外しますね」

「あ、ああ構わないぞ」

「直ぐに戻りますので。レンさん、頼みますね。皆さんで自己紹介でもしてはどうでしょうか」

「承りました、アリア様」

アリアが自走して部屋から出て行くと、当然のように沈黙が流れた。

気まずいので、ルークは自己紹介をする。

「あ、えっと。俺はルークだ。アリア君から聞いているかも知れないが、スピードワゴン財団から派遣されている」

すると、レンが軽く会釈をしながら。

「レン・オオトリです。アリア様の身の回りのお世話を仰せつかっています。宜しくお願いします、ルーク様」

「ああ、宜しく。君は……日本人なのか？」

「はい。スシとテンプラは嫌いですが、日本人です」

レンはそう言った後、茶髪の少女を見た。

露骨に嫌そうな顔になる茶髪の少女だったが。

「……ミリイだ」

ルークに視線も合わせずに、ミリイはダルそうにそう言った。

レンは最後に、壁際にいる金髪の小柄な少女の方を見た。

しかし、見ただけで直ぐにルークに視線を戻す。

「彼処に立っているメイドが、フェンネルです。今は喋る必要が無いので手に持っていますませんが、普段は携帯電話等のメールによって会話

を行っています。彼女は自分では喋りませんが、とてもお喋りで。一時間近くメールで会話をするので、手が疲れます」

レンがそう言うと、フェンネルはポケットから携帯電話を取り出し、ニコニコしながら素早く操作した。

するとレンが携帯電話を取り出し、送られてきた文面をルークに見せる。

『宜しくお願いでえ〜す！ 所でそのケーキって、もしかしてもしかしてもしかして。駅前にあるお店の奴？ 良いよなああああああ〜、お嬢。私も一回並んだけど直ぐに売り切れて。チョコレートケーキなら有りますよ、こっちの方も売れ筋ですよって言われたんだけど。私はイチゴケーキが食べたいのよ！ 言葉に気を付けて貰いたいわ！』

「あ、うん。今度また買ってくる」

あの僅かな時間でここまで打ち込んでいた事、文面に圧倒されながらルークがフェンネルへと言う。

「所でルーク様。アリア様はいつ頃、この街を出立されるのでしょうか？」

「ああ、君達もスピードワゴン財団から派遣されていたんだったな。詳しい日程とかは、この事件が解決してからだろうな」

「そう、ですか。私個人と致しまして、先程ルーク様が仰った通り。アリア様には幸せになって頂きたく思います。お二人の捜索に差し支えない程度に、私も微力ながら力添えをしたいと考えております」  
レンが、アリアの紅茶のカップに蓋を乗せながらルークへと言う。  
成る程な。

と、ルークは一人納得する。

アリアが生まれつきのスタンド使いであるなら、派遣される人間もそうではないかと予想していたが。

府に落ちたルークはレンと、他の二人のメイドにも順に目をやる。

「君達も、なのか？」

「……はい」

レンは名刺代わりに宣言する。

「全員、スタンド使いです」

スピードワゴン財団は、世界最先端の医療技術を有し、あらゆる産業分野にも進出している団体である。

元々は大手の石油株式会社として各界へ出資等を行っていたようだが、その後は科学発展の為の団体として新たに設立された。

そして、医療や科学の発展を目指す裏側で、密かに。

スタンド使いを集めている。

ルークもその一人である。

「しかし、驚いたな。スタンド使いつてのは俺も知らなかった。君達は別の支部から派遣されたって事か？」

「いえ、それは……」

レンが少し言い淀んでいると、客室の扉が開き。

アリアが戻って来た。

そこで、彼女達の間にも一秒にも満たないアイコンタクトのようなモノがあったらしく。

恭しく頭を下げたレンが、壁際の定位置に戻った。

「それは、ルークさん。私がお答えします」

アリアは、真っ直ぐに此方を見据えて口を開いた。



## 居場所

「彼女達は、私やルークさんのように。生まれつきのスタンド使いではないんです」

「……っ、まさか」

「——弓と矢だ」

二人の会話に割って入ったのはミリイだった。

気のせいだろうか、少し苛立っているように見えた。

「アンタも聞いた事有るだろう？ スタンド使いつてのは二種類存在する。生まれつきのスタンド使いと……」

ミリイはアリアと、ルークを順に見た後。

……いや、睨み付けた後。

「矢に貫かれて、後天的にスタンド能力を身に付けた奴」

両拳を握り締め、レンとフェンネルを続けて見た。

アリアは静かに俯く。

「原理は不明だが、その特殊な矢は貫いた相手からスタンド能力を引き出すんだ。素質が無い奴は、そのまま死ぬがな……！ そうだよなあ、アリア？」

「ミリイ……！」

壁際のレンが声量を強めてミリイを威嚇した。

ミリイは髪を掻き乱しながら軽く舌打ちをし、客室の扉へと早足で近付いて行く。

「好きでもねえ奴の所で、好きでもねえ仕事をやらされる。居場所すら選べねえ奴は、何処に向かえば良いんだ……！」

誰に言うでも無い。

その言葉を置き去りにして、ミリイは扉を蹴って退室して行った。

壁際に立っていたレンはアリアへと一礼し、直ぐにミリイを追って行ったが、フェンネルは欠伸なんてしている。

携帯電話を取り出すと、器用に指を動かしてカタカタと何かを打ち込んだ。

と、ルークの携帯電話が短く鳴動した。

メールが一件、来ている。

開くと。

『あ、気にしないで？ 毎回やってっから、このやり取り。さつきレンちゃんも事件解決には協力するって宣言してたけどさ。ミリイにだけは期待するだけ無駄無駄。私やレンと違って、ミリイは無理矢理スタンド発現させられた系だからさ』

「そうなのか……って、俺アドレスなんて教えたか!？」

すると、メールがもう一件届く。

『世の中にはねえ。便利なスタンド能力も有るって事さね。私のスタンドみたいにあ、さつきの続きだけどね。知ってると思うけど、スピードワゴン財団は、私達みたいな孤児を保護とかもしてんの。ミリイはその中の一人だったんだけど、トチ狂った研究者が財団の中にいたらしくて。』

ミリイの所属していたグループの子供を片っ端から矢で撃ち抜いて、スタンドが発現する所をカメラで記録してた。でも、二十人いる内で、スタンドが発現したのはミリイだけだったのさ』

「あ……」

分かった気がした。

何故、ミリイがエリアに苛立っていたのかを。

続けてメールが届く。

『その時に使われた矢は、お嬢の父上が発見したモノの一本だった。矢が発見されなきゃ、友達は死なずに済んだかも知れない。だからミリイは、お嬢を目の敵にしているんだ。でもさ、それはお嬢はどうしようもないって。ルークがさつき言った通り、使う奴が悪い。あ、その使ったヤツは追い詰められて拳銃自殺したけど』

「……フェンネルさん?」

ルークの態度から全てを察したエリアが、フェンネルの名前を呼び、首を振った。

今回の事件だけではない。

矢がもたらした事件は、スピードワゴン財団にも存在していたの

だ。

しかし、それを知りながら何故。

代表はミリイをアリアの元へと派遣したのだろうか。

また、メールが来た。

「ミリイさんの事は。その事件を知って、私がお願いしました。直接的でないにしても、ミリイさんを深く傷付けてしまった事。背負いたかったからです」

『知ったのは私とレンちゃんが派遣された後。私がうっかり、メール開いたまま机にケータイ忘れてさ。一緒に探してくれたお嬢が見ちゃったらしくて』

アリアは、本当にどれだけ背負っているのだろう。

普通なら誰かのせいにして、見ないフリをしても良いのに。

真つ直ぐに、余計な小細工無しで現実に立ち向かう。

「——それに、恨むべき相手がいないというのは、辛いモノですから」  
そう言って笑みを浮かべる。

そのアリアの言葉を、部屋の直ぐ外で。

レンとミリイが、客室の扉に背を預けながら聞いていた。

「何だ、そりや……馬鹿じゃねえか？」

レンにもハッキリと分かるよう、露骨に悪態をついたミリイ。

そして二階に続く階段へと足を向け「サボって来るわ」とレンの肩を叩いて階段を上がって行った。

レンは特に何も言わず、暫く待ってからアリア達の待つ客室へと入った。

「申し訳ありません、アリア様。ミリイを見失いました」

そう一言断ってから、アリアとルークの元へと戻って来る。

そしてアリアの紅茶のカップから蓋を取り除いた。

レンが戻って来て安心したのか、アリアは一度溜め息を吐いてから再び口を開く。

「先程、ルークさんから貴重な情報を提供して頂きましたので、私も話そうと思います。スピードワゴン財団が追っている、敵の事を」

アリアは自らの脚に触れ、目を閉じる。

「あの事故の日。まだ幼い私は突然父に連れられ、車でこの街に向かっていた。その、途中で。父と私の乗る車は事故に遭い、父は亡くなり、私は車外に投げ出され重症を負ったものの、一命を取り留めました。きつと、私のスタンドが守ってくれたんですね」

そう言つてアリアは、ニッコリと笑った。

相手を不安にさせない為の作り笑いである事は明白であったが、ルークは指摘しない。

「——私は薄れ行く意識の中で。炎を上げる車の前に佇む、一人の男性を目撃しています」

アリアはワゴンの上からレモンを一つ手に取ると、空中へと放り投げた。

瞬間。

彼女の側に出現した『シルバー・チャリオッツ』が、宙を舞うレモンへと超高速で剣戟を滑らせる。

レモンは瞬く間に分解され、テーブルに置かれた皿の上に輪切りとなつて整列した。

「首筋に、このような痣を持った男性です」

その内、星型に刻まれたレモンスライスが一枚、彼女のスタンドの剣先に貫かれてルークの目の前に浮かんでいた。

「首に、星の痣？」

「敵です。私は……その敵を探し出す為に、鍛練を積んできました」  
不意にアリアの瞳が鋭く細められ、車椅子を掴む指先が白くなる。

言葉の端に激しい憎しみが込められているのが、ルークにも感じ取れた。

アリアのスタンドが消え、皿の上にレモンスライスが落下する。

直ぐにレンが「アリア様、少々はしたないかと」と隣で咳払いをして茶を濁した。

その言葉を受け、アリアは我に返つたようだ。

「あ。ご、ごめんなさい」

「後でハチミツ漬けに致しますので、お下げ致します」

そう言つてレンは、皿を片付けた。

ルークの前を星が通り過ぎる。

「成る程。スピードワゴン財団に情報提供しておくよ。この前印刷した男の事も既に調査を依頼してある。後、出来る事は――」

「ディードさんがバッグを置いた場所は分かりますか？」

「ああ。パソコンに情報は入っている。その内、一ヶ所はここから近い」

「では、日暮れ前に少し周辺を調べましょう。レンさん、フェンネルさん。出掛けて来ます」

「今から、ですか？」

レンは不安そうに言うが、アリアはルークと共に「行って来ます」と言い残して客室から出て行ってしまふ。

少し、肩を落とすレンの携帯が短く鳴動した。

『お嬢は少し、不良になった方が良いと思うよ。小細工無しの真つ向勝負なああの性格が、スタンド能力にもモロ現れてるし。だからこそ強いつてのも有るけどさ』

「アリア様は、今のアリア様のままで宜しいのです」

メールの文面を見たレンは、深く溜め息を吐いてみせた。

すると、先程まで壁際に立っていたフェンネルが軽くレンの脇腹を突つつき、自らの携帯に打った文面を見せた。

『そんな心配なら、付いて行けば？ まあ並のスタンド使いならお嬢の敵じゃあないけどさ。絶対邪魔してくるだろうし。あ、この片付けは手伝ってね。で、ミリイは？』

「お洗濯物を取り込みに行きました」

『へえ。何だ、気が利く』

「……。フェンネル、もしかしたら。貴女の力を借りる事になるかも知れません。先程、ルーク様の携帯電話に貴女の『ネオン・ウルペーヌ』が付いたようですから。くれぐれも、お願い致します」

『……はいよ』

フェンネルはニカツと笑い、敬礼した。



『リング・ア・ベル』



屋敷は小高い場所に建っており、オレンジ色の屋根が軒を連ねる旧市街の街並みが一望出来たりする。

遠方には中世を彷彿とさせる尖塔が何本が建っているが、その直ぐ下には電車が走っており。

現代との調和が成されている。

屋敷の前を通る小路は石畳で整備されているものの、街までは基本長い下り坂が続く。

車椅子のエリアにとっては、両手を使って踏ん張りを利かせながら降りるので一苦労だろう。

しかも、結構な頻度で階段も有る。

「ん？」

すると。

段数は少ないが、早速階段が二人の前に現れた。

「エリア君、手を貸——」

ルークが言い終える前に、エリアは大胆にも勢いを付けて最上段から飛び出した。

これは事故なんじゃないかと思う角度で地面へと落下するエリアだったが、何と車椅子でウィーリーして両後輪で見事に着地している。

涼しい顔をして、こんなので出来て当然とばかりにスタンドも出していない。

「あ、はい。何でしようかルークさん？」

ニッコリ笑って前輪も着地させるエリア。

落下の衝撃で乱れた髪の毛を耳の後ろへと流したりなんかしてい

る。

相も変わらず、白くて綺麗な首筋だ。

「あ、えっと……凄いな。車椅子ってそんな動き出来るワケ？」

「長い階段は流石にスタンドを使いますが、この程度でしたら。あ、  
そうそう。最近ムーンウォークも覚えたんですよ？」

そう言ってアリアは、上半身と肩を一定のリズムでくねらせながら  
後輪を動かし、石畳の上を滑るように後退してみせる。

「いや、おい。どうやってるんだ、それ……!？」

「他にも、セグウェイみたいな動きを鋭意練習中です」

「君は何を指摘してるんだ……!？」

等と雑談を交えながら、二人は人気の無い小路へと下って行く。

アーチ状の短いトンネルを潜り抜け、建物に囲まれた十字路へと差  
し掛かる。

幅は車二台がギリギリスレ違える程度だ。

二人は其処を右に曲がり足を止めた。

「うん。間違い無い、ここだ」

ルークがパソコンを出現させて位置を確認する。

どうやらこの先は行き止まりになっていて、他の小路も今は封鎖さ  
れてしまっているようだ。

街の発展に伴い、増改築を繰り返した為、このような袋小路が至る  
所に出来てしまっているらしい。

この辺り一帯は既に空き家となっているが、中世の街のような佇ま  
いは観光客にも人気のスポットで。

街の景観維持の為に取り壊される事無く、そのまま残っている。

「この先の行き止まりに、バッグを置いたらしい」

二人は奥まで歩を進めたが、冷たく堅牢な壁が有るぐらいで他には  
何も無い。

正面と左右を囲う様に聳え建つ高い壁は、教会地区と旧市街地を区  
切っていた時代の名残りらしい。

アリアは周辺を調べているが、特に怪しい物は見付からないよう  
だ。



「長居は無用だな。アリア君、もうすぐ日暮れだ。明日は朝から調査を――」

「妙ですね」

と、アリアが行き止まりの壁を見ながら言う。

ルークが振り返ると、彼女は華奢な手で、壁をペタペタと触っていた。

「見て下さい、ルークさん」

「ん……？」

「この壁に空いてる穴です」

アリアが壁の一点を指差したので、ルークは覗き込んだ。壁には丸く穴が空いているのだが。

その穴の中にはコインがスッポリと入っているのだ。

更に視線を持ち上げて広げると。

穴は一つではなかった。

無数に穴が空けられており、それぞれに釘や瓶ジュースの蓋等がめり込んでいる。

「何だ、こりゃあ。悪戯にしては……」

そしてその穴の近くには、染みがあった。

サッカーボール程の大きさの、丸く黒い染みである。

「これは、何か奇妙です。ルークさん、急いでこの場所を離れましょう」

アリアはそう言って壁に背を向ける。

と、目の前の十字路の角に。

指を掛けて此方を覗く、黒っぽい人影が見えた。

人型だが、昆虫のような両眼と灰色の外套に身を包んだ容姿をしており、人間では無い。

恐らくは、敵のスタンド。

「ルークさん、敵です！ あの十字路の角にいます！」

アリアはスタンドを指差し、隣のルークの裾を引っ張った。

後ろは行き止まりで、両側は高い壁に囲まれている。

逃げ場は無い。

「何処だ、アリア君!？」  
だが。

アリアが目を離れた一瞬の内に、前方のスタンドは姿を消した。  
角の奥に引っ込んだ、と言うよりは。

その場から姿を消した、という表現がしつくりとくる。

「気を付けて下さい。まだ近くにいる筈です」

アリアはゆつくりと車椅子を漕ぎ、前進して行く。

「恐らくですが。デイドさんから聞き取った情報の内の幾つかは、  
罠でしょう。バッグを置いた場所を調べに来る人間を、監視していた  
ようです」

「どの道、予想していた事さ。考えようによっちゃ、このまま本体を捕  
まえて情報を吐かせれば万事オーケーだ」

警戒し、前方の十字路を注視する二人。

その背後の壁から、音も無く。

先程角からアリアを覗いていたスタンドの上半身が、ズルリズルリ  
と這い出して来た。

『ウジュ……ウジュウジュ』

不気味な音を滴らせ。

ゆつくりと、三本の鋭利な指先をアリアへと伸ばす。

その指先が、風で流れたアリアの銀髪を僅かに掠めた。

「……っ!？」

途端にアリアは車椅子を左へと半回転。

左眼の視界に敵スタンドを捕捉する。

『シルバー・チャリオッツ』！

即座に見舞う剣撃。

白銀の軌跡と共に敵スタンドの腕を瞬時に斬り裂いた。

「っ！」

右腕から鮮血が吹き出し、男は顔を歪めた。

アリアとルークが入った袋小路から、少し離れた尖塔の上。

二人を監視出来る位置を陣取る、此方も二人組の男達。

「大丈夫か？ ジャック？」

ライフルのスコープから顔を離れた長髪の男が、負傷した右腕を布で縛るジャックへと訊ねた。

「ああ、何とかな」とジャックは苦笑う。

「誰がどう見ても。俺の。完璧だっただろ、奇襲。それでもあの女、俺のスタンドの攻撃に一瞬速く気が付きやがった。自分の間合いに入るモノは即座に探知する。そんな凄味を奴からは感じる」

「ああ、見ていた。優れたスタンド使いのようだ」

「だが。右腕の代償に。凄く痛えが、奴の髪に触れる事は出来た。これでもう、あの行き止まりからは逃げられねえ。駄目押しに、頼むわカルザル。ほらよ、保険だ」

ジャックはそう言つて、ライフル弾を一発カルザルへと手渡した。

カルザルは静かに射撃体勢に入り。

スコープを覗き込んだ。



「や、やったのか。アリア君！」

「いえ。取り敢えず、一太刀入れるのが精一杯でした。敵スタンドは再び壁の中へ消えましたから、今の内に此処を離れましょう」

ルークは頷き、アリアと共に壁から離れて行く。

十字路を左へ曲がれば、来た道に帰れる。

「今は、退くしかないな。アリア君、君の屋敷へ……」

ルークが隣のアリアを見ると、アリアは地面を滑るように少しずつ後退して行く。

「……。えっと、特技。だったっけ、それ。凄いとは思うけれどね」

「ル、ルークさん。違います、これは……！　まさか、あの時。私は、躲し切れていなかった……!?!」

アリアは、両手でしつかりと車椅子の後輪を押さえ付けているが、やはり少しずつ滑って後退して行く。

「あのスタンドが潜んでいる壁へ……！　引き寄せられています！」

「な、何だっつてえ!?!」

ルークは慌ててアリアの車椅子を押さええるが、自分の方へ引き寄せられる事も出来ない。

何か強力な力で固定でもされているようだ。

その二人の横を、別の十字路の小路から転がって来た空き缶が通り過ぎ、行き止まりの壁に激突する。

それでも空き缶は止まらず、原型を留めぬ形になりながら壁へとめり込んで行く。

次いで、ルークの上着の内ポケットからペンが飛び出し、ネクタイピンも飛ばされて行った。

同じように破壊と共に壁にめり込んで行く。

「ま、マズイぞ……！　この結末はマズイ！　だいたい分かって来た。引っ張られた後、どうなるのか」

「引き寄せられているのは金属類、ですか。強力な磁石のように、この周辺一帯を飲み込んでいるようです……!?!」

「MRIみたいなモノか!?　だが、それよりもっと。どんどん強力になっつて行くぞ」

その間にも、様々な金属類が飛んで来る。

恐らくは、敵が予め隠しておいたのだろう。

まるでこの袋小路全体が巨大な罠である。

と、何処からともなく。

大量の釘と瓶ジュースの蓋が二人目掛けて高速で飛んで来た。  
『チャリオツツ!』

臆する事無くスタンドで迎撃に入ったアリアが、即座に剣戟で弾幕を張った。

飛来する金属類を高速で、片っ端から切断、分解していく。

しかし、それでも弾き切れなかつた金属片が二人の身体を容赦無く斬り付けて通過行つた。

「う、ぐ……!」

「仕方、有りません。ルークさん、手を……!」

アリアは車椅子の後輪から手を離し、ルークの手を掴む。

すると弾かれたように無人の車椅子は壁へと飛ばされて行き、粉々になつて行く。

「く……!」

アリアは地面の上へと倒れ込んだ。

これ以上引き寄せられる心配は無いが、文字通りアリアの機動力はゼロである。

直ぐに抱え上げようとした、ルークの視界の端に。

フワリと宙に浮かぶ物体が映つた。

花の蕾のような形状をした、小型の飛行物体だ。

その物体に付いている衛星の反射坂に似た箇所が、鈍く光つたと、狙撃音。

「っ!? ルークさん、私から離れて下さい!」

うつ伏せのまま、アリアがルークを押し退けた。

どうにか両手で上体を起こしてスタンドを出したアリアだったが。

小型の飛行物体から飛び出した弾丸が、彼女の脇腹を抉つた。

「……っ!?!」

「アリア!」

ルークは駆け寄り、アリアを抱き抱える。

そして小型の飛行物体が塞いでいる小路を避けて、時折飛来する金属片からアリアを守りながら奥の小路へと走り去つた。

◆

「やったじゃあねえか、カルザル。俺の『リング・ア・ベル』とお前の『マンハッタン・トランスファー』。あと一息だ。始末出来る。あの男の方は、慣れてない。戦闘に、圧倒的にな」

「……。」

「これで、俺達を探ろうなんて輩はいなくなる。予定通りだ。『七つ眼』の誕生も安心して待つ事が出来る」

「……。」

カルザルは無言のまま、スコープから顔を離した。

そして、手早くライフを分解し始める。

ジャックは目を丸くした。

「何、やってんだ。お前？」

「場所を移す。お前も来い」

「おいおいおいおいおい。だから、何言っただお前は。この場所を離れるならよお。俺の『リング・ア・ベル』は一旦能力を解除しなきゃあならねえ。潜んでいる、あの壁から離れ過ぎるからな。」

今やつとの思いで『リング・ア・ベル』が直に触ったつてのに。今度は金属だけじゃあねえ、あの女を引き寄せられるんだぜ!？」

「……恐ろしく頭の回転が速いヤツだ、あの女は。射撃音を聞いて、ワザと俺に心臓を狙わせた。あの一瞬。狙われた軌道が分かるのなら、防衛も間に合う」

「はあ?。」

「心臓への攻撃は防がれた、と言っているんだジャック。ヤツのスタンド、中々に素早い。弾を切断して本体へのダメージを最小に押さえた。そして、何より安心出来ないのは。あの女に、此方の場所がバレたという事だ」

『リング・ア・ベル』②



「う……！」

伝わった傷の痛みにアリアは顔を歪めた。

「すまない、俺の責任だ」

「大丈夫、です。急所は外れていますから。それより、ルークさんが。私を庇って怪我を」

「俺のは掠り傷程度だ。君の方が酷い」

負傷したアリアを抱き抱え、ルークは走っていた。

この先も行き止まりになっているのは分かっているが、何よりも先ず、アリアの手当てをするのが先決だった。

その為には、あの敵から距離を置かなくてはならない。

「よし、ここなら」

ルークはアリアを下ろし、壁に背を預けさせた。

彼女の純白のブラウスは血に染まっており、右脇腹を押さえるアリアの右手もまた、血に染まっていく。

「撃たれたのか？ 何なんだ、あのスタンドは。アレも、壁のヤツの能力なのか？」

ルークはハンカチを取り出し、傷口に当てると。

自らの上着を脱いで引き裂き、アリアの胴体へと巻き付ける。

「取り敢えずの応急措置だ。」

「いえ、ルークさん。スタンドは、一人一能力です。あの引き寄せるスタンドと、もう一体。ライフル弾の軌道を変える狙撃衛星のようなスタンドがいたようです」

「な……!?!」

「本体が近くにいないにも関わらず、攻撃は正確でした。敵スタンドは二体共に遠隔操作型のスタンドのようです。本体が何れぐらい離れた所から操作しているのか、まだ確かな事は言えませんが……」

アリアはそう言っ、握っていた左手を開く。

そこには、斜めに斬り裂かれたライフル弾の片割れがあった。

「30―06スプリングフィールド弾ですね。使用されたのは恐らくですが、ボルトアクション式のスプリングフィールドM1903A4です。有効射程は約五百メートルですが、飛んで来た威力を踏まえると、実際はもつと近くから狙撃していた筈です。あとちよつぴり近ければ、『チャリオッツ』でも防げませんでした。……そして、もう一つ」

アリアは、手にしていた弾丸を地面へと転がしてみせる。

「この弾丸自体には、磁石のスタンドの能力が働いていません。恐らく弾丸に対してのみ、能力の解除や区別をしていたのでしょうか。」

先程の連携もそうですが、つまり敵は二人で行動している可能性が高いです。この周辺で私達の行動を見張り、かつ安全にあの行き止まりの壁との射程距離を確保出来るのは――比較的、高所」

アリアは、太陽が沈んで行く西側の空の方を指差した。

「そして、夕陽を背に出来る方角。……敵は、あの位置に居ます」

「よし、なら近付ければ」

「――しかし、残念ながら。それは敵が私達を甘く見てくれている場合の話です。既にさつき敵がいた場所、になっているかも知れません」

アリアは、背にしている壁の隙間に左手の指先を差し込み、掴まる。

「しかしだな、アリア君。君は確かに機動力を失ったが、これで磁力の影響は受けないだろう？ ああ狙撃のスタンドに注意していれば、本体の所まで行けるんじゃないか？」

「……いいえ、ルークさん」

頬に汗を掻きながら、アリアは右手でも壁の隙間に指先を入れて掴まった。

立つ事が叶わない筈の彼女の両足が、ローファーごと徐々に持ち上



がっている。

スカートの裾が捲れて、黒いストッキングに包まれた細い肢体が太ももまで露になった。

「良くない、ですね。あのスタンドに触れられると、今度は……！」

堪え切れなくなったアリアは壁から引き剥がされ、小路の上を引き摺られ始める。

咄嗟にルークがアリアの手を掴み、阻止したが。

さつき車椅子を引っ張った時のように、強力な力が働いていた。

「今度は、私の身体そのものが。引き寄せられています！」

「何だって!! クソツ……!!」

「ですから、ルークさん。まずは、この磁石のスタンドからです。この能力が解除されないという事は。本体はまだ、あの位置から動いていないという事。もう安心して、勝った気でいるんです。今が叩くチャンスなんです」

「だ、だが！ このパワー！ 俺にはもう……どうする事も出来ないぞ?!」

ルークの手が、無情にもアリアの手を滑り抜けていく。

華奢なアリアの身体がフワリフワリと宙に浮かぶ。

「いいえ、ルークさんの。貴方のスタンド能力となら、勝てます。後は、タイミングだけです」

「……っ！」

最後の力を振り絞るように、ルークはもう片方の手でアリアの手を掴まえたが。

とうとう。

彼女の身体は強風に煽られた紙のように、敵スタンドが潜む行き止まりの壁へと飛ばされて行ってしまった。

「アリア！」

ルークは後を追うが、アリアの身体は地面の少し上を滑るように進んで行く。

あつという間に十字路まで引っ張られて来てしまったアリアだったが、自分の予想通りに狙撃衛星のスタンドの姿が無い事に、深く安

堵する。

狙撃手は、自分の場所がバレる事を嫌うものだ。

しかしアリアの身体は、とうとう曲がり角に差し掛かった。

この先はあのスタンドが潜む壁が待ち構えるのみ。

直線で引き込まれたら終わりである。

「っ！ 『チャリオッツ』！」

アリアはスタンドを出現させ、壁に向かって素早く正確に剣を突き立てた。

そして、『シルバー・チャリオッツ』はもう片方の腕でアリアを抱き止める。

「く……い！」

どうにか、角を曲がる寸前で持ちこたえたアリアだが。

尚も強くなる磁力を前に、動く事が出来なかった。

ジリジリと、突き立てた剣先が抜けていくのが分かる。

アリアの身体が少しずつ、角から姿を現す。

「おいおいおいおいおいおいおい。頑張るじゃあねえの」

と、スタンドが潜む壁の上。

正確には壁面に。

一人の男が現れた。

スタンドの能力で背中を壁に張り付けているのか、宙に浮かんでいる。

「悪い壁だ。この場所、俺のスタンドを生かすのに都合が良いもんで。

つい、五人程食わせちゃった。壁に黒い染みがあったらどう？ ス

ピードワゴン財団の連中は簡単だったよなあ。本当に悪い壁だ」

「貴方は……！ 最低の人間ですね！」

「おいおいおい。これからイチゴジャムみてえに潰れるお前の最後の台詞なんだぜえ？ どうせなら初恋の男の名前でも叫んどけ。……

まあ、そんな時間はもうねえがな。

俺がんな事を言う為だけにノコノコやって来たと思うかあ？ 本体である俺がスタンドに近付けば、その分パワーだって強くなるんだ

ぜえ！ トドメなんだよ！ テメエはもうおしまいだ！」  
急激に。

引き寄せられる力は強まり、スタンドの剣先が外れてしまった。  
アリアは角から引き摺り出される。

「もうおしまい。それが貴方の最後の台詞のようですね。そしてやはり、本体が直接出て来た」

左目で、壁に張り付いている本体の位置を確かめたアリア。  
大きく息を吸って、叫ぶ。

「——ルークさんっ!!」

アリアは閉じていた手を開く。

その瞬間、ソレは元の大きさへと戻る。

あの時、ルークから渡されたモノ。

幽霊の道具の一つ。

車椅子だった。

アリアはスタンドも使い、器用に宙でそれに腰掛け、掴まる。

(……っ!?! 俺の『リング・ア・ベル』が効かねえのか？ だが!)  
そのままアリアは、車椅子ごと猛烈な勢いで壁に引き寄せられて行く。

アリア自身がスタンド能力で引き寄せられている以上、車椅子に座っているようにいまいと、関係が無い。

能力さえ解除しなければ、どの道壁へと激突する。

と、敵は考えている。

アリアはそう思った。

「ええ、うっかり解除なんてしないで下さい。幽霊の道具は引き寄せられず、私が引き寄せられているこの状況が良いんですから。この勢いを、そのまま伝えられるワケですから」

と、あと数メートルで壁へと激突する瞬間。

アリアは、再び『チャリオッツ』を出現させ、真横の壁へと剣を突き立てると共に、車椅子から手を離れた。

彼女の狙い通りの角度へ、無人の車椅子は勢いをそのままに飛んで行った。

その先には、敵スタンドの本体であるジャック。

「ぐええ!？」

勢い良く飛んで来た車椅子を顔面に喰らい、ジャックは地面へと落下した。

それは、スタンド能力を解除してしまった事になる。

壁に激突した車椅子はしかし、壊れる事無く地面の上を二、三回跳ねた後。

『シルバー・チャリオッツ』に抱えられているアリアの元へと戻つて来た。

なので、腰掛ける。

そして、少しだけ自走して止まる。

前方には。

足を挫き、顔面から血を流して蹲る敵スタンドの本体、ジャック。

「貴方、スピードワゴン財団の職員の方を、五人も殺したんですか?」

その冷たい左眼の威圧感に、思わずジャックは腰を抜かした格好で後退る。

「そ、そうだったっけなあ。よく覚えてないよなあ」

「……あらあら」

一度目を伏せ、アリアは薄く笑みを浮かべた。

「使用人であるレンさんから、教えて頂きました。日本では嘘を吐くと、とても重いペナルティが有るそうですよ? それは……」

「ひい……!？」

「針串刺しの、刑ですっ!」

アリアの元から飛び出した『シルバー・チャリオッツ』は、超高速で突きの連打を男の全身へと叩つ込む。

その猛烈なまでの剣撃に、大気は弾けて乱れ飛んだ。

白銀色の閃光となって押し寄せ、貫く刃は余りに速く。

瞬く間に男の継戦能力を剥奪し、壁へと吹っ飛ばした。

「人は壁を乗り越えて成長するモノですが」

『シルバー・チャリオッツ』を引っ込め、アリアは背を向ける。

「貴方という壁は、少々低かったようですよ?」



『ハーテイ・レグナ』



アリアが。

ルークの幽霊の道具の力を借りて、壁に潜む敵スタンドの本体、ジャックを撃破するよりも、数十分程前。

尖塔の上でジャックと別れたカルザルは一人、オレンジ色の屋根の上を走って移動していた。

離れているのだ、アリア達から。

しかしそれは決して、恐怖心から逃げているのではない。

自分のスタンドの射程距離にはまだ余裕が有る。

確実に見付からない安心な場所を確保して距離を稼ぎ、絶対無敵の狙撃を持って仕留めるといふ、敵への宣戦布告。

ある意味で、敬意であった。

カルザルは礼拝堂の屋根に飛び移ると、直ぐにライフルを組み上げてスタンドを出現させた。

『マンハッタン・トランスファー』は入り組んだ小路から吹き上がる上昇気流に乗って高く舞い上がる。

そして、見付けた。

アリアを抱えたまま、奥へと逃げるルークの姿を。

スタンドを狙って射撃すれば先ず間違いなくルークは仕留められる。

「ジャックの奴はまだ、あの位置から動かないのか。まあ良い。二発有れば足りる」

カルザルはスコープを覗き込みながら、上空の自分のスタンドへと照準を合わせた。

そして、ゆっくりと引き金を――。

「暗殺、で御座いますか？」

「……っ!?!」

突然、女の声。

カルザルが振り返ると、自分と同じ礼拝堂の屋根の上に。メイド服を着た黒髪の少女が一人、いつの間にか立っていた。

「あ、失礼を致しました。狙撃主が要人の頭を亜音速弾で撃ち抜いて暗殺する、という映画のワンシーンのような緊迫した場面に出会す機会が、今まで無かったものでして。つい興味本意で話し掛けてしまいました。大変申し訳有りません」

レンは先ず、男にそう謝った。

カルザルは無言のまま立ち上がってライフルを肩に担ぐ。

「どうぞ、私の存在は気にせず、暗殺を続けて頂いて結構です。貴方様は今、『命令』を遂行なさっている最中なのではないでしょうか？」

「……。」

「私はここで、私への『命令』を丁寧に遂行していますので」

「——お前も、何か『命令』を？」

「はい……。」

レンとカルザルの間の空気が、徐々に張り詰め。

緊迫していく。

そんな中、レンは唇を開いて宣言する。

「貴方に今、狙われていた方達を守る。という『命令』です」  
「……。」

交差した二人の視線。

同時に、動いた。

カルザルは懐から拳銃を引き抜いて数回発砲し、此方に接近しようとしたレンを牽制する。

『マンハッタン・トランスファー』！

更にスコープを覗く事無く上空へとライフルを発砲、その先にいるスタンドを狙った。

レンは屋根の上を転がり、正面からの弾丸を辛うじて避けて尚も接近したが。

上空から反射して飛んで来たライフル弾に気が付かず、右足を撃ち抜かれてしまう。

「く……!?」

その場で体勢を崩したレンへと拳銃を向けたカルザルは、間髪入れず残りの弾丸を続け様に発射。

複数の弾丸が一気にレンへと肉薄する。

「……………! 『ハーティ・レグナ』!」

レンの正面に、ソレは出現する。

全身に鎖が巻き付いた様な装飾を有した、黒色の人型スタンドだ。

『押羅押羅押羅アッ!』

『ハーティ・レグナ』はその両拳で素早く連打を繰り返し、命中寸前だった弾丸を瞬時に弾き飛ばした。

カルザルは舌打ちしたが、それ以上レンを攻撃する事無く、その場から走って距離を取った。

ライフルの次弾を素早く装填しつつ、拳銃のマガジンも取り換えて銃身をスライドさせる。

そして、一定の距離を置いて振り返った。

「奴は、明らかに近距離パワー型のスタンド。だが、脚を撃ち抜いた」  
スコープを覗き、その場に座り込むレンの姿を捉える。

此方の動きを見ているようだ。

「弾丸はガード出来るか。死角から反射させて仕留める」

カルザルは『マンハッタン・トランスファー』が気流を渡ってレンの背後へと浮かんで行くのを確認する。

レンはカルザルの視線を読み、自分の背後に浮かぶスタンドに気が付いた。

「この、スタンド。弾丸の軌道を変える、狙撃衛星のような役割を致しますか……………!」

レンはタイミングを見計らい、『マンハッタン・トランスファー』へとスタンドの拳を繰り返した。

『押羅アッ!』

だがその超高速の拳打を、『マンハッタン・トランスファー』はヒラリと軽く避けた。

レンは目を丸くする。



「っ!? この、異常な回避性能は……?」

正面からは恐らく、これから銃撃が飛んでくる。

この距離だ、スタンドでガード自体は間に合うだろう。

しかし、その瞬間背後からライフル弾が来る。

「飛び道具は、余り信用が無いのですが……」

レンはフレアスカートを捲り上げ、太ももに装備していたナイフを一本引き抜いた。

そしてそれを、出現させた『ハーティ・レグナ』へと手渡す。

「現戦闘においては有効な手段となり得ますね」

すると『ハーティ・レグナ』はナイフを持って振り被り、渾身の力を込めて投げ放った。

しかし幾ら速くとも、この距離ではナイフは銃弾と違って空気抵抗を大きく受けてしまう。

僅かに斜め上へと反れ始めた。

カルザルも薄ら笑いを浮かべる。

が。

そのナイフが途中で裂けるように二本が増え。

更に二本が四本へと増えた。

同じような連鎖が瞬時に引き起こり、ナイフは一気に数十本の大群となつて押し寄せた。

「何い……!?!」

小魚の大群の様に飛来したナイフから、カルザルは慌てて回避行動を取る。

それぞれが別々の方向へと進行し、直撃を受けた礼拝堂の屋根や付近の屋根を滅茶苦茶に破壊して行く。

まるで機関銃でも乱射されているかのようだ。

「うおおお!?!」

肩や脇腹を切り裂かれながらも辛うじて別の建物の屋根へと飛び移れたカルザルは、息を荒くした。

破壊された礼拝堂の屋根瓦からは土煙が上がり、破片が飛び散っている。

「し、至近距離以外への攻撃は、余り正確ではないようだが……無茶苦茶だ」

一先ず、自分のスタンドの位置を確認した。  
先程の位置から余り離れてはいない事が分かる。

「あの女のスタンド。そういう事か。物質を『分裂』させる能力！」  
この視界でも、自分のスタンドの位置は把握出来る。

即座にライフルの引き金を引く。

土埃を裂いて飛んでいった弾丸を反射させ。

負傷して動けないでいる、レンが居るであろう位置へと撃ち込んだ。  
だ。

「よし」

しかし。

土埃が上昇気流によって晴れた時、レンの姿は礼拝堂の屋根の上から忽然と消えていた。

驚くべき事に、あの負傷した脚で。

屋根に突き出た採光塔の影に隠れたかと思つたが、上空へと舞い上がった『マンハッタン・トランスファー』からでも発見出来ない。

礼拝堂から落下して下に逃れたのだろうか。

そう思つた矢先。

上空から見張る自分のスタンドが、遂にレンの姿を発見した。

場所は。

本体であるカルザルの、背後である。

「馬鹿な……!?!」

振り返れば、二本の脚で立ち上がっているレン。

撃ち抜いてポツカリ空けてやった筈の脚の傷は、綺麗に塞がっているようだ。

(まさか、傷口周辺の細胞を分裂させて……)

「——警告致します」

カルザルが拳銃を構えるより先に、レンはスタンドを出現させる。

「射程距離に入りました」

『押羅押羅押羅押羅押羅押羅押羅押羅押羅押羅押羅押羅押羅ッ！』

超高速で叩き込まれる豪拳の連撃連打。

大嵐を彷彿とさせる純粹な破壊の塊が、容赦無く敵の肉体を撃ち砕いていく。

『押羅アアッ！』

トドメの一撃がカルザルへと突き刺さり、遠方へと吹っ飛ばす。

カルザルはそのまま、袋小路の方向へと落下していった。

「貴方様の『命令』は、これで御仕舞いかと」

レンは、スタンドで屋根を蹴り付けて軽々と跳び上がり、礼拝堂の上へと舞い戻った。

「ですが。私への『命令』は、まだ継続するようです」



## 命令



「アリア君！」

遅れて、行き止まりへとやって来たルークは。

仰向けに倒れたジャックの前で息を整えているアリアを発見した。

「ルークさん……」

思わず、顔を綻ばせるアリア。

その表情を見て、ルークもホッと胸を撫で下ろした。

「やったのか？」

「ええ。ルークさんの力が無ければ、勝てませんでした」

「いや、全部君の手柄だろう？ 君の冷静な判断力と分析力が無ければ、間違い無く死んでいた」

「い、いえいえいえ、そんな。ルークさんが私を庇ってくれたからこそ——」

暫く、二人の謎の譲り合いが続けられていたが。

何処からともなく吹っ飛んで来たカルザルが近くの壁に激突した事で、終わりを迎えた。

「あらあら……」

「だ、誰かは知らないが。まだ息は有るな」

「ルークさん、彼の上着のポケットを見て下さい」  
「ん？」

アリアが指差す先を見てみると、衝撃で開いたポケットからライフル弾のボディが顔を覗かせていた。

ルークはアリアと顔を見合わせる。

「先程使用されたライフル弾と同じですね。……この方が、狙撃衛星のスタンドの本体で間違いなさそうです」

「しかし、既に再起不能のようだぞ？ 何があつたんだ？」

「分かりません。ですが、念の為です。ルークさん、彼の腰にまだ拳銃

が装備されているので、外して下さい」

「ああ、そうだな。ついでに弾薬も回収しておこう」

二度も敵スタンドに襲われたからなのか、ルークは少し用心深くなっていた。

ポケットというポケットから弾丸を回収し、カルザルの腰からガンホルダーごと拳銃を回収した。

「H&K P7M13ですか。持っていた弾薬の量から推察すると、もう一つ拳銃を所持していそうですが」

「相変わらずだな、君は」

取り上げた拳銃を見てそんな台詞を真つ先に呟くアリアを見て、ルークは笑うしか無かった。

すると丁度そこへ。

「アリア様」

真上から、レンが降って来た。

スタンドで落下の衝撃を殺し、フワリとアリアの隣に着地したのだ。

「レンさん……!?! では、この狙撃手は」

「はい。誠に勝手ながら、私が倒しました。不用意に交戦してしまい、誠に申し訳ありませんでした、アリア様」

深々と頭を下げるレン。

実際はアリアを守るといふ『命令』を忠実に果たして駆け付けているのだが。

それを敢えて説明する事もないだろうと少しズレた自己判断を下し、先ず自ら危険行為を行った事を謝罪しているのだ。

レンは、非常に面倒な思考回路をしていた。

「そんな、謝らないで下さ……」

会話の途中で、アリアは顔を歪めた。

脇腹の傷口に痛みが走ったのだ。

レンが血相を変える

「アリア様!?! まさか、また酷いお怪我を!?!」

「少し、脇腹を撃たれて……」

「直ぐに手当て致します」

レンは『ハーティ・レグナ』を出現させると、アリアの傷口にソツとスタンドで触れる。

細胞を分裂させた傷口は活性化でもされたかの様に、あつという間に小さくなつていき、やがて完全に塞がった。

同じように、所々の小さな傷もスタンドで触れて一つ一つ治していく。

「治療、完了致しました」

「すみません、レンさん。いつも治して頂いて、本当にありがとうございます」

「いえ。アリア様のお役に立てて、光栄に思います。これからも、私の力を存分にお役立て下さい」

「……っ」

抑揚の無いレンの機械的な返答に、アリアは少しだけ寂しそうな顔をした。

それにルークが気が付く。

レンは見た所、アリアと同じ年ぐらいだ。

何故アリアがあんな寂しそうな顔をしたのか、容易に想像は出来る。

「なあレン、ちよつと——」

「ルーク様もお怪我をされている御様子。今、治療を施しますのでお待ち頂けますか？」

「ん？ あ、ああ……」

上手く言葉を被せられ、曖昧に返事を返すルーク。

レンは恭しくアリアへと一礼をした後、此方へ近寄ってきた。

そしてスタンドを出現させると共に、アリアへ気付かれぬように、自らの唇の前で人差し指を立てるのだ。

静かに。

そう言っている。

「なあ、一体どういふつもりなんだ？」

なので、ルークは小声でレンに話し掛けた。

アリアは今、一応敵のスタンド使いを見張っているようだ。

「線引きが露骨過ぎるぞ。あれじゃあ、アリア君も……」

「分かっています」

傷を探し、治療を施しながらレンが一言そう言った。

「アリア様が、私に使用人以外の繋がりを求めている事。ちゃんと、分かっています」

普段は無機質に近い彼女の瞳が、この時ばかりはとても寂しそうに潤んでいて。

ハッキリと、レンの表情に悲しみが滲み出していた。

「でも、私には必要なんです。『命令』で繋がれた今のこの関係性が。変化の無い距離を保て、愛想も要らない。それが私にとって、唯一『安心』出来る居場所なんです。『命令』は『安心』なんです」

「君は……」

言い掛けて、ルークは言葉を飲み込んだ。

治療を終えたレンが離れてしまった事も有る。

既にレンは、普段の平然とした表情に戻っていて。

『命令』に対して一切妥協しない態度を主であるアリアへと見せ付けているのだ。

今の関係性を保つ事が、今の二人にとっての『真実』であるのか。それを知る方法が、圧倒的に無い。

このまま見守る事が今の自分に出来る最善なのではないかと、ルークは己の心へと言い聞かせる事にした。

「何はともあれ。君達が倒した敵については、スピードワゴン財団に引き渡そう。有力な情報が得られそうだし」

まとめて倒れているジャックとカルザルを見下ろし、携帯で連絡を入れたルーク。

今日の所は引き上げようか、とアリアへ提案しようと振り返ると。  
「……。」

アリアは頬を赤らめながら、落ち着かない様子で肩や脇の辺りを仕切りに擦っていた。

本人は隠れてやっているつもりなのだろうが、隣のレンも少し不思議

議そうに見ている。

なので、代わりにルークが聞いてみた。

「……何、やってるんだ？」

「えっ!? あ、いえ。どうぞお気になさらず」

「お怪我を？」

「い、いえ。怪我ではないのです。……ただ、少し神経質な、女性特有の悩みと言いますか……」

少し狼狽した様子で顔を赤くし、的を得ないあやふやな返答をモジモジとするアリア。

何故か、ルークからは視線を反らしている。

「先程の磁力のスタンド能力で引つ張られた時に、それはそれはもう色々なモノが引き寄せられていたようでした……。例えば、そのこの辺りに身に付けているモノだったか？ するワケで。今、微妙に、その、位置的なモノ？ が、結構敏感に気になってしまっているみたい、です」

「……ああ」

優秀なレンは両の手を打って合わせ、アリアの車椅子を押し始めた。

そしてルークに見えない様に十字路の角へと連れて行く。

「直ぐに終わると思いますので、ルーク様はそちらでお待ち下さい」

「ごめんなさい、ルークさん」

そうやって二人は、何やらごそごそやっている。

気にはしていないようだ。

もうすっかり日が暮れて、辺りは暗くなり始めていた。

結局、今日一番の進展が敵のスタンド使い二人を再起不能にした事ぐらいだ。

しかもこれで、敵側には明確に此方の目的がバレてしまっただろう。

まだスピードワゴン財団は敵の目的も不明瞭なままだというのに。

恐らく少女達を監禁している事も、計画の一部でしかない。

今後奴等の目的の為に使われるのだろうか。



彼女達の命も大切なのだが、何よりその犠牲の先に辿り着く結果は、確実に災厄を呼ぶ暗雲だ。

そうなる前に、今度は先手を打ちたい。  
防戦一方では進展が無いのは当然である。

「ルークさん、お待たせしました」

丁度そこへ、アリアとレンが合流した。

彼女達はこの街で信頼出来る、優れたスタンド使いだ。

しかしこのまま、彼女達の力を闇に利用して良いのだろうか。

もつと、年頃の少女らしい日々を過ごさせるべきではないだろうか。

そうすればきつと、アリアとレンの関係性にも変化が訪れる筈である。

(……っ、今さら迷うな！ アリアと一緒に事件を解決して、彼女を納得させて連れて行くんだ！)

拳を握り締めて俯くルークだったが、懐の携帯電話が鳴動を始めたのを受けて、我に返る。

電話だった。

番号から、スピードワゴン財団からだ分かる。

「俺だ」

『ルークさんですね。先日頂いた画像の男ですが、身元が判明しました』

電話の相手は若い男の声だった。

「っ!? 本当か!?!」

『ええ。落ち着いて聞いて下さい。画像の男は、ルークさんが今居る街。つまりはエベールで、暮らしています。しかも働いているんです。大学で事務員として』

「働いている……!?!」

『エベール女学院大学。医療系の学部がある大学です。その事務員です。名前はフラン・アベルト。住所は南中央区カールアル通り前に有るマンシヨンの702号室です』

「分かった、直ぐに調べる!」

『……あ、それともう一つだけ。非常に重要な出来事です。先日ルクさんから引き渡されたデイドという男ですが、殺されました。つい先程の事です』

「っ!? どういう事だ!?!」

『分かりません。厳重な警備のもと、閉じ込めていたらしいのですが。昼に用意した食事に手が付けられていなかった事を不審に思い、職員が中を確認すると……。首が捻じ切られた死体だけが発見されたそうです』

「マジかよ……」

『我々にはスタンド能力が無いので何とも言えませんが。あの警備の中で密室にいる標的を的確に狙って殺す事は、人間には到底不可能です』

「ああ、俺もそう思うよ。少なくとも、財団の他のスタンド使いが到着するまでは絶対に部屋には入るな。冷却するなりして、出来るだけ現場を保管し、安全な距離から見張るんだ」

『分かりました。そちらもお気を付けて。では』

電話を切り、無言のまま携帯をポケットに入れたルーク。

有力過ぎる追跡可能な手掛かりがようやく見付かって、本来なら喜ぶべき所なのだが。

裏で起こった不気味な殺しへの不安感が、それを半減させた。



## 名前



「あと少しでね、点滴終わりだつて」

アリア、七歳。

彼女は今日も、病室のベッドの上から幻覚に話し掛けた。

右目と両足の機能はこの先回復する見込みが無く。

それはアリア自身も気が付いていた事なのだが、医者や看護師は毎日のように励ましの言葉を掛けてくれたし、まだ幼い彼女の精神的支えになっていた事は間違いない。

しかしそれ以上に彼女を側で見守り続けたのが、彼女自身のスタン  
ド能力であった。

そこに誰か立ってる、鎧を着てる、剣を持つてる。

事故から目覚めた後、そんな台詞を言い続けたら流石に「幻覚が見えてしまっている」と判断されてしまうだろう。

部屋を変えても幻覚は付いて来て、アリアの側に姿を見せ続ける。

思い切つて話し掛けてもみたが、返事は無い。

危害を加えてくるワケでもない。

アリアにしか見えない。

それでもアリアは、この幻覚に奇妙な友情を感じ、看護師がいない時の話し相手にもしていた。

しかし、それから数日後。

決定的な事が起こる。

夜間に突然胸が苦しくなり、ナースコールを押そうとしたアリア  
だったが。

焦っていた事もあり、運悪くコールを床へと落としてしまう。

手が届かない上に苦しくて声も出ない。

誰か助けて。

そんな彼女の願いを叶えるように、側に現れた幻覚の友達はコールを拾い上げ、アリアの目の前にコールを届けた。

この幻覚は、自分の思った通りに動かせる。

彼女が初めてスタンド能力を認識した瞬間であった。

そして、この日の出来事がまだ幼い彼女の復讐心に火を着ける結果となる。

父を殺し、自分をこんな身体にした、あの事故の現場にいた男。

身体が不自由な自分でも、この力が有れば。

この力を上手く使えば。

見付け出して、必ず罪を償わせてやる。

その為には知らなくてはならない。

もつともつと、この力の事を。

この日を境に、アリアの身体は驚異的な回復を見せる。

薬の量は減っていき、少しずつ出来る事が増えていく。

食欲も増して、上半身の機能もほぼ取り戻した。

「一つ。スタンドは、精神エネルギーが作り出す、パワーを持ったビジョンである。スタンドは『立ち向かう者』という意味合いからきており、この力を持つ者はスタンド使いと呼ばれている」

ベッドのリクライニングを起こし、アリアは鉛筆を左手で持って、ノートへと分かった事をまとめていく。

この時、アリア八歳。

父親と共に事故に会ったのが丁度七歳の誕生日を迎えた翌日。

身体を起こして手を動かせるようになるまで、実に一年を費やした。

「本人の精神エネルギーで作りに出している為、スタンド使いはそれを自在に操る事が出来る。個々によってスタンドの姿や能力は異なっており、この騎士のスタンドは私自身の精神が形となった姿であると

思われる」

車椅子に乗ってリハビリを受けるようになってから、アリアは病院の中で一人だけ、スタンド使いの男性に出会っていた。

いや。

正確には観察をしていた、である。

突然の高熱で運ばれて来たらしいその男は、スタンドを使って看護師や他の患者に悪戯を働いたり、金品を盗んだりしていたのだが。

その時、見舞いに来た友人達に話していたのを聞いていたのだ。

スタンド、という言葉がこの時初めて耳にし、以降アリアもこの幻覚の事をスタンドと呼ぶようになる。

「一つ。スタンドはスタンド使いにしか見えず、スタンドを持たない者は見る事も触れる事も出来ない。これは性別年齢を問わず、200人を対象に検証を行ったので、例外は無いと判断する。尚、この事から恐らくスタンドはスタンドでしか倒せない」

事故の現場にいたあの男も、恐らくスタンド使いだろう。

だとすれば対抗する手段は此方も手に入れた事になる。

「一つ。スタンドが傷付けば本体も同じように傷付く。しかし、本体が直接負った傷はスタンドには著明に反映されない。これはスタンドを作り出している精神エネルギーの流れが関係していると考えられ、ダメージバックが発生するのはスタンドのみである。つまり、スタンドを叩く事で本体を再起不能にする事は可能である」

と、病室のドアがノックされる。

アリアは広げたノートの上に教科書に乗せて隠した。

いつもの女性の担当看護師が入って来る。

「アリアちゃん、調子はどうかしら？」

彼女はアリアが入院してからずっと優しくしてくれている看護師だった。

まだ若いのに仕事が出来て、誠意に溢れていて周囲からも一目置かれている。

「大丈夫。今日は夜一緒なの？」

「うん。アリアちゃんがちゃんと寝てるか見に来るからね。あ、勉強

中？ 偉いわね……。つて、ええ!? これ名門中学の入試の参考書なんじゃあないの？ 凄お〜い」

そう言つて感心したようにアリアの頭を優しく撫でた後、看護師の女性はアリアのバイタルを測る。

数値を紙に書き、何故かベッドの角に張り付けた。

アリアは不思議そうに見る。

「ああ、気にしないで？ 私、最近何だかミスが多くて。自分で思ったのと反対の事を引き継ぎの時に伝えちゃってるし。彼氏にも……。酷い事言つて。あ、これは私事か……」

彼女はアリアのベッドに腰掛けながら、意気消沈したように深い溜め息を吐き出す。

それからアリアの方を見て、自嘲気味に言うのだ。

「それで、ね。もしかしたら私、アリアちゃんの担当……。外されちゃうかも」

「え……。!?」

「つていうか、他の病棟に飛ばされるかも。そうならないように……。頑張ってるんだけど。ゴメンね、何か……」

看護師の女性はアリアへそう言った。

彼女はこの病院の中で唯一アリアに対等に接してくれた人間である。

辛い時に素直に辛いと伝えられる、アリアにとっては医者以上に頼れる存在であった。

「じゃあ、また夜にね」

と、アリアのベッドから彼女が立ち上がった時。

一瞬だけ見えてしまった。

彼女の口の中、舌の上に何かが張り付いていたのを。

「……っ!? ま、待ってー!」

咄嗟にアリアは呼び止めた。

看護師が振り返る。

「私ね、お仕事が上手く行くおまじない知ってるよ」  
アリアの心臓が高鳴る。

今までの自分の仮説を決定的なモノにする、絶好の機会。  
何より、自分なら彼女を助ける事が出来るかも知れない。

試す価値は有る。

「へえ、どんな？」

人の良い彼女は直ぐに近寄って来てくれた。

「うんとね」

アリアは勉強用のノートに適当に模様を書き、彼女へと見せた。

「この魔法陣に。目を閉じて、あつかんべーをすると、仕事が上手く行くようになるの」

「え、何それ可愛い。じゃあ、ちよつとやってみようかなあ？」

アリアがノートを見せると、看護師は目の前までやって来て目を閉じる。

タイミングを図る為に、アリアが音頭を取った。

「じゃあ、行くよ。せえゝの……」

看護師は舌を出す為に口を開き、アリアは——自らのスタンドを近くに出現させる。

そして看護師が「べえゝ」と舌を出した瞬間。

アリアは左目を鋭く細め、スタンドの剣を彼女の舌に取り付いている物体目掛けて素早く繰り出した。

見事、スタンドの剣先は彼女の舌からその物体を串刺しにして引き剥がす。

タコの手足のようなウネウネとした触手を持つ、小さな生物のようなスタンド。

「もう良いよ？」

「ありがと、アリアちゃん。何だか、上手くやれそうな気がするわ」

アリアは看護師へと笑顔を向けつつ、スタンドの剣先に貫かれたスタンドの動きを注視していた。

剣先のスタンドは呆気なく消滅した為、アリアもスタンドを引っ返める。

「じゃあ、私はもう行くわね。……ん？ 何か、騒がしいわね」

看護師は廊下の様子を探ってから、手を振ってアリアの部屋から出

て行った。

その直ぐ後。

「ええ!? 主任が突然血を吐いて倒れた!」

そんな声がアリアの病室の中まで届く。

アリアは確信する。

自分の仮説の正しさと正確さを。

自分のスタンドの能力を。

そして、大事な人の助けになれた事を。

「やつぱり……スタンドは、使う人次第なんだ」

その日の出来事は、後のアリアの人格を作る上で非常に重要な経験となった。

正しい枠の中で真っ直ぐに進む為の強さの源。

正義という言葉を、アリアは幼いながらに知ったのだ。

「そうだ。私のスタンド、名前を付けよう。何が良いかな……」

アリアは部屋の中を見回す。

丁度、窓側に停めていた車椅子の座席シートの上に、さっきの担当看護師が図書館から借りてきてくれた占いの本が開いた状態で置いてある。

生年月日の合計の数字によって決定した頁を開き、そこに表記されたタロットカードによって占う、というモノだった。

今開いているのは、恋愛面を占った結果の頁。

戦車の正位置だった。

「チャリオット……」

窓から吹いた風が、アリアの銀髪をゆらゆらと揺らす。

流れた髪を指先で払い、「決めた」と彼女は微笑した。

「このスタンドの名前は、『シルバー・チャリオッツ』」





## 『アルク・ブラック』



すっかり薄暗くなった袋小路で。

レンは月明かりを頼りに一人、メールを開いていた。

近くには再起不能になった敵が倒れてはいるが、スタンドで死なない程度には治療はしてある。

『分かってるってば、レンちゃん。取り付いてる私のスタンドはバツチリ会話も聞いてるし、状況はさっきのメールで確認した。お嬢の判断は正しいよ。そこにスピードワゴン財団が到着するまで、レンちゃんを見張りとして置いておく判断も含めてね』

レンは無言でメールを返信し、フェンネルの返事を待った。

直ぐにメールが届いた。

『ミリイなら、もう寝るとか言って仕事放棄して部屋に入ってるよ。レンちゃんに言われた通り、お嬢がルークと大学に向かった事はメールで伝えてあるけどさ』

その一文を見ると、レンはつい穏やかに笑みを溢した。

そしてフェンネルへ「分かりました、ご苦労様。貴女はそのまま、マンションの方へ向かって下さい」と返信する。

月を仰ぎ、レンは静かにスピードワゴン財団の到着を待つ事にした。

(頼みましたよ。フェンネル、ミリイ……)



「何とか、間に合ったな」

「大学行きのバスはこれで最後だったようですね」

二十時四十五分。

エペール女学院大学前と表記されたバス停に、二人は降りた。

アリアは搭乗する際はルークが抱えて乗り込み、幽霊の車椅子は小さくしてポケットに仕舞った。

運転手には少々奇妙に映った二人組であったが、特に何を聞かれるワケでもなく。

そのまま大学前まで乗って行く事が出来た。

降りたのはアリアとルークの二人だけ。

それもその筈。

既に校舎の明かりは一階の一部分を残して落とされており、月明かりと青い静けさに包まれているのだから。

学生なら講義のある昼間に入るし、強盗ならモノ好きしか入らない。

つまりは、例え開門されてはいても、こんな時間に訪ねる一般人はいないという事だ。

二人は堂々と正面から敷地内に入り。

これまた大胆に警備室へと向かった。

ルークが窓口に立ち、呼び鈴を押して警備員がやって来るのを待つ。

当然だが校舎は施錠されている為、中に入るには警備室横に有る専用の扉から入らなくてはならない。

バスの中で大学の情報を集めたが、大学は主に三棟に別れていて、今二人がいるのは中央棟の前。

元々建っていた旧棟を取り壊して三年前に建て直したらしい。

事務室は、左手に建つ実習棟の一階にあるようだ。

「はい。どう………されました?」

アクリルの板越しに、警備員の男が不思議そうに話し掛けて来た。

ルークは受付けの壁を殴りながら警備員を睨む。

「フラン・アベルトはまだいるか? この事務室で働いている筈だ」

「……失礼ですが、どちら様ですか? アポイントメントって知ってます?

厄介事なら困るんですが」

もう一人の警備員が、受話器を取って耳に当てている。

「はあ!? 九時までに来てあってあれだけ脅してやったつてのに! つまり奴はまだ、事務室で残業なんて決め込んでやがるのか!」

ルークは警備員に怒鳴った後、アリアに視線を送る。するとアリアは短く頷き、ルークの隣に自走して来た。

「あのクソ野郎、俺の妹に手を出した挙げ句に金まで要求しやがつて! 妹は体を売って金を作って頭がおかしくなって電車に飛び込んで! こんな身体になったつていうのによお!」

アリアを見た警備員は困ったような視線をもう一人へと送る。受話器は置いてくれた。

「お兄ちゃん、もう……良いから。お仕事しているなら、仕方ないよ。私はただ、フランさんに一度会つて気持ちを確認しておきたかつただけだから。それだけ、だから……」

と、アリアがハンカチを片手にそんな事を言う。

警備員の二人は暫く何かを話し込んだ後、「穏やかに話すなら通すよ」とアリアに言つてから結局通してくれた。

ルークも「分かつた」と頷きアリアに続いて校舎へと入る。

二人が中に入ったのを見届けた警備員達だつたが。

彼等の耳や口元からは、黒色の液体がドロドロと溢れ出ていた。

「ほぼ君の言われた通りにしたが、アリア君。やっぱり恋人設定にしないで正解だつたよ」

「ドロドロの三角関係でも良かった気もしますが。出来る限り、関わりたくない雰囲気を出したかつたので」

「いや、君高校生だろ? 俺の彼女だつて言つたら色々不味いだろ」  
「そう、ですか?」

アリアは首を傾げてみせた。

ルークに車椅子を押ししてもらつた格好で夜の廊下を進んで行く。

節電対策なのか、人がいない場所は流石に薄暗い。

限り有る資源は本当に大切に使わないといけないよなあ、なんてエコーな精神を再認識するワケでもなく。

二人は実習棟へと渡つた。

渡って、直ぐに分かった。

明かりの点いている場所が一階に一つだけ有る。

中の光が廊下に溢れて、そこが事務室だと遠くからでもハッキリ分かった。

「まだ中に居るみたいだな。残業するなんて、大変な仕事だよなあ。」  
学生のサポートとかやるんだろうか？ 手当とかは出るのか？」

ルークは少しばかり、自分の境遇と重ねて考える。

「平日はずっと仕事だし、土日は寝てたいし。家と職場の往復だから出会いも無くて彼女が出来ない……！ 情報処理に適性が高いスタンドっていつても、結果やってるのは俺だからな。爆発の事故現場とかから幽霊のパソコン拾って来て中のデータを朝まで調べて……！」  
「ル、ルークさん……大変なんですね」

途中から愚痴った背後のルークにアリアが苦笑いを浮かべる。

不可解な事件が有れば、即座に調査に派遣される。

基本的に人海戦術で行う事なのでそういった気苦労は無いと考えていたが、ルークは別のようだ。

アリアの勝手なイメージだが、きっと狭い部屋の中で書類の山と格闘しているのだろう。

「まあな。きつと今回の任務が終わったら、暫く家にも帰れないぞ。書類がミルフィューユみたいに重なってるんだろうなあ。まあ、でも」

事務室の明かりが落ち、一人の長身の男性が出て来たので、二人は廊下の中央で揃って止まった。

画像の男、フラン・アベルトである。

「だからと言って、人を拉致なんてしないけどなあ？」

ルークのその言葉で此方に気が付いたのか、フランは戸締まりをしながら二人を眺めた。

しっかりと戸締まりを確認した後、フランは廊下のスイッチを入れて互いの姿を確認する。

更にポケットから携帯電話を取り出し、一度画面を確認した。

「……君、可愛いね。左眼に眼帯してるけど、それ抜きにしても可愛い

よ」

フランは先ず真つ先に、アリアの容姿を誉めた。

ルークがアリアの肩を軽く叩いて、車椅子から離れる。

「フラン・アベルトだな。行方不明事件の事で、ちよつと聞きたい事が有る」

「あ、なあ〜んだ警察？ いや、それにしちゃ若いね。そつちの女の子も含めると。ピザのクォーターみたく情報量が多いよなあ〜、情報量が」

「別に逮捕しようとか、そういう事じゃあないさ。俺達はただ、行方不明の事件について聞きたい事が有るだけだ」

「ププツ。警察じゃあないなら、つまりお前達一般人って事だろう？

話す責任も無いね。僕はね、忙しいんだよ。これから家に帰って、ネット小説の続きを見なきゃあならない。毎日二十二時十分キツカリに続きが投稿されるんだ。」

以前読んでいた作品は、五話で更新が止まってから投稿が半年途絶えてね。僕しか読んでいない事にモチベーションが上がらなくなつたのか、知つた事ではないが。五話まで書いたら、読者が何人だろうが最後まで完結させて欲しかったよ」

フランはニヤリと笑いながら、廊下の壁に肩を預ける。

「いや本当に完結つて大事だと思つうワケさ。唯一の作者の責任つて断言してもいい。物事には必ず始まりが有つて、必ず終わりが有る。分かる？ 何人邪魔が入ろうとも、この計画は必ず終わらせる責任が僕には有るつて事なんだよ。つまりさ——」

廊下のスイツチを。

フランが再び切つた事で、廊下は暗黒に包まれる。

突然の闇の訪れに目が慣れていない。

その、二人目掛けて。

フランの足元から勢い良く飛び出した黒い影が、アリアとルークへと襲い掛かった。

「君達二人を始末して、確実に完結させるつて事なんだ」

両腕が刃物状になった、漆黒のコートを身に纏つた人型のスタン

ド。

その切っ先がアリアとルークへと振り下ろされる。  
が。

スタンドを持つ者だけに聞こえた、甲高い金属の共鳴音。

そして山吹色の火花が闇でスパークした。

「む……」

フランは警戒する。

自分のスタンドの刃が、突如として出現した銀色の甲冑を纏ったスタンドの剣で弾かれたのだ。

「あらあら。真っ正面から攻撃するだなんて——意外と紳士なんですね？」

微笑むアリアは、眼帯を外し、左眼でスタンドをハッキリと見ている。

間髪入れず彼女のスタンドが素早い剣戟を放つ。

無難に数回、斬り結び。

飛び退く。

(この女……！)

暗転による奇襲を読んで、見える方の目を眼帯で覆い違和感を与える事無く、強かに暗闇に慣れさせていた。

警戒心が強く、闘いにおいて自らのスタンドの素早さに絶対の自信を持っている。

そして何より、此方の奇襲に動揺する事無く対処した冷静さ。

「——警察とか。不審者とかだったりした方が、全然マシだったかな。僕の事を突き止めたから、只者じゃあないと思っていたけど。スタンド使いだっただはね」

フランのスタンドはゆっくりと宙を移動し、近くへと戻って来た。

まだ射程距離には入っているが油断は出来ない。

「まあ、必ず始末はするがね。僕の『アルク・ブラック』は。君達をこのまま逃がすワケにはいかないからさ」

## 『アルク・ブラック』②

距離を置いて対峙するアリアとフラン。  
だが、ルークだけは事務室への侵入方法を考察していた。  
というのも。

ここへ来る途中のバスの中で、アリアからお願いされた事が有るのだ。

接触すれば、フランは高確率で此方を始末しにくる。

戦闘は自分が引き受けるが、その代わりに事務室の中に入って、フランのデスクを探して欲しい。

そのデスクに、行方不明者のリストが有るかも知れない。

それを見付ける事が出来れば敵の目的も見え、搜索も容易になる。  
そんな事を言っていた。

(しかしだな、アリア……)

ルークは頬に一筋汗を掻く。

アリアもフランも一旦スタンドを仕舞い、硬直状態に入ったとはいえない。

警戒しているアリアを前にしても尚、余裕でいるフランの態度。  
行方不明事件に加担しているにも関わらず、自分には関係が無いように振る舞い、仕事で残業までして社会に貢献している。

やっている事が矛盾している事に気が付いていないのだろうか。  
一体どんな精神状態で事務室に施錠をして、帰ってネット小説を読んでいるのだろうか。

不気味な程に掴み処が無い男である。

(大丈夫なのか？ 本当に君一人で。そりゃあ君の戦闘能力の高さは認めるが、相手はトチ狂った犯罪者だぞ?)

ルークは不安そうにアリアへと目配せするが、アリアは短く頷くのみ。

続行する意思は変わらないようだ。

一方のフランは、腕組みしたままアリアをジッと見ている。暗い廊下で対峙する三人。

知らない人間が見たら異常な光景だろう。

「——君を見て。最初に思った事を、僕は素直に告白しようと思う」  
そんな時。

先ずアリアを見詰めるフランが口を割った。

「その短いスカートから覗いている、ストッキングに包まれた柔らかい太ももの間に。手を挟みたいな、なんて。いやもう本当に、嫉妬しているんだ隣の彼氏には。羨ましいって言葉は、きつとこんな場面を目撃した独身の男が酔った勢いで作っちゃったんだろうな」

「……。」

中々に気持ちの悪い挑発だが、彼女の表情には変化が無い。

流星アリアだと、ルークは思った。

だが、その矢先。

アリアは一転して満面の笑みを浮かべた。

「ええ。少しでしたら、構いませんよ？ どうぞ、此方へ」

そんな事を言い放つ。

多分だが、これは怒っている。

近付いて来た所へ、『シルバー・チャリオッツ』を全力で叩つ込むつもりでいるのだろう。

すると何処まで本気にしたのか、フランは吹き出した。

「でもまあ、それは君達を始末すれば両方解決出来る事なんだよ。脚だけ残せば良いワケなんだから。所詮、一時の嫉妬心なんだ。危うく欲望に飲み込まれる所だった。有り難う、押さえるよ。君は心まで純粹で何処までも優しい娘だね。尊い白を具現化したような存在だ」  
「そうですか」

アリアは眼帯を右眼に付け直し、両手でグッと車椅子の後輪を掴んだ。

その姿すら舐める様に凝視するフランが口の端を吊り上げる。

「今日から家には帰れないワケだけど、独り暮らしてペットとか飼ってたら今の内に教えて欲しい。可哀想だから、僕の方で処分しく



よ」

「——最近パソコンの勉強を始めましたが。貴方という障害をクリアする事の方が、遥かに簡単でしょう。参考書は三ページ目で躓きましたから」

「……フフ、ハハハ」

フランは手を叩いて態とらしく高笑いをした。

それでも表情は笑っていない。

どうやら、アリアの今の言葉が癩に障ったようだ。

「ハハハハハ！——『アルク・ブラック』！」

不意に、出現させたスタンドをアリア目掛けて突進させる。

速い。

アリアは少しだけ身を屈めて迎撃体勢に入る。

『シルバー・チャリオッツ』！』

彼女の元から飛び出した騎士のスタンドが、廊下の中程で敵スタンドと交戦状態になる。

銀色を纏った高速の剣戟は手数で勝る『アルク・ブラック』の猛攻を捌き、瞬時に無数の火花を咲かせた。

アリアは少しだけ車椅子を前進させる。

十、二十と重なる斬撃の軌跡はやがて周囲へと弾け飛び、廊下や壁を破壊していった。

と、アリアのスタンドが放った剣が突如として空を切る。

敵のスタンドが突然、溶ける様に足元に消えたのだ。

刹那。

『シルバー・チャリオッツ』の背後の壁から『アルク・ブラック』が飛び掛かる。

が、『シルバー・チャリオッツ』は絶妙なタイミングでスピニングしながら飛び上がり、敵スタンドの頭上を越えて壁に着地する。

と同時に、怒濤の勢いで放つ突きの連打。

からの、横薙ぎ一閃。

白銀の軌跡が月明かりに浮かぶ中。

辛うじて足元に逃れた『アルク・ブラック』だったが、本体である

フランの両腕と指先からは鮮血が吹き出した。

遅れて、天井から蛍光灯が落下して飛び散り、壁面が真一文字に崩れる。

「……」

アリアはスタンドを引つ込めると、直ぐに敵スタンドの位置を確認した。

暗い廊下の真ん中を、黒い影の様な物体がフランの方へと戻って行くのが見える。

明らかに、フランは驚いているようだった。

「やるね。君のスタンド、近距離パワー型かと思ったんだけど。結構射程が長いようだ。動きも素早い。正面からじゃ流石に分が悪いかな。怖い怖い」

フランは流れ落ちる自分の血を見て言った。

「そして何より怖いのが、君だよ。まさかその身体で、ここまで闘えるなんてね。あのスタンドの滑らかな動き。常に自分のスタンドとの間を微調整して、能力を最大限に発揮出来る距離を保っているのか。

攻撃の正確さとバリエーションの多さも百戦錬磨といった印象だよ。成る程。凄まじいまでのバトルセンスだ。柄にもなく……フツ、尊敬しちまったかなあ」

飄々とした様子でネクタイを外すと、それを右腕に巻いて止血している。

フランの考察通り、一対一の真っ向勝負にはアリアは滅法強い。

どんな相手にも油断をする事無く、常に全身全霊を持って冷静に対処するからだ。

それは敵対する相手の力量を素直に認める事が出来る、無垢であるが故の境地である。

しかしフランはどうだ。

ルークは壁際に避難しつつ、フランを眺める。

彼女の圧倒的な実力を肌で感じていながら、未だに危機感というモノを持つとうしていない。

始末する事を宣言しておいて、今更逃げる気は無い筈。

と、いう事は。

単純に、自分の勝利を信じて疑わないのだろう。勝てるという確固たる自信から安心を得ているのだ。

「さあして。じゃあどうすると思う？　今君は、自分の方が圧倒的に有利だと思ってるでしょ。違うんだなあ。何故なら君は、この後僕を、車椅子で追い掛ける事になるからね。戦略的撤退ってヤツさ」  
そう言い残し。

フランは踵を返して、アリアとルークに背を向けて実習棟の奥へと走って行った。

「ルークさんは、例のモノを探して下さい！」

アリアは車椅子を漕いで後を追った。

そう、追わなくてはならないのだ。

奴が逃げないというのは、単なる予想に過ぎない。

始末すると宣言していても状況が悪くなれば逃げるかも知れない。

最悪なのは、フランがこのまま姿を消す事だ。

監禁している行方不明者の所へ戻られでもしたら、收拾が付かなくなる。

本来の目的を達成する事が困難になってしまう。

今は追うしかない。

どれだけ危険でも。

しかし、アリアが精一杯に車椅子を速く漕いでも、向こうは大人の男の足だ。

あつという間に見失ってしまった。

アリアは一旦車椅子を止め、周囲の様子を確認した。

少し奥まった左手位置には講義用の教室の入口と、並んで二階への階段。

正面はまだ奥まで続いているが、T字路になっている。

右側は曇りガラスが嵌め込まれている教室だ。

さて、何処に姿を隠したのか。

正面のT字路まで走り切るには流石に無理が有り、右側は薄暗いとはいえガラス張りだ。

と、なると左手奥の講義室の中か、階段の上。

此方が車椅子である事を考えると、逃げ場の無い講義室の中よりも階段の上に逃げた方が現実的である。

アリアはそこまで即座に思考を巡らせた後。

角の床に転がっていたボールペンをスタンドで斬り払った。

『イギ、イギギギ……！』  
すると。

破壊したボールペンの中から赤子程の大きさの、蛙に似た黒っぽい生物が飛び出した。

その生物は奇声を上げながら床に染み込む様に溶けて消えていく。

(このスタンド。やはり、影ですね。ボールペンの影の中に潜んでいた。スタンドの一部を切り離して、射程距離に関係無く設置しておけるとしたら……)

アリアは。

行方不明者達の写真を見て、フランに辿り着いた時の事を思い出す。

写真に写っていた彼女達の影の長さから、撮影された高さを導き出したのだが。

そう、今思えばそれが違和感だった。

彼女達の写真には全て、影が写っていたのだ。

もし、今のボールペンのように。

このスタンドを彼女達全員に設置していたとすれば、彼女達の位置情報はスタンドを通じて知る事が出来る筈だ。

そしてその設置には条件が有る。

自動追跡が始まる条件が何か。

(……っ！ カメラのフラッシュ。フェンネルさんも使っていた、あの機能。人工光を当てる事で自動追跡が始まるスタンド能力。そう言えば、最初に私とルークさんを攻撃する時も廊下の蛍光灯を付けていた。成る程……)

アリアは階段に向かって全力で車椅子を漕いだ。

(だとすれば、あの時。自動追跡の条件を満たした筈の私とルークさ

んに、敵スタンドが取り付かなかつたのは。スタンド使いだったから。自動追跡は、スタンド能力を持たない一般人にのみ取り付く事が出来る。つまり彼の目的は、スタンド使いと一般人を区別する事)

階段まで勢い良く車椅子を走らせたアリアは、出現させた『シルバー・チャリオッツ』に車椅子ごと自分の身体を放り投げて貫う。

一気に踊場へと着地した。

(スタンド能力への適性が高い人間を探し出し、利用する計画だと仮定するなら。使われる可能性は高い……！)

スタンドを出して周囲へと警戒を走らせ、アリアは歯噛みする。

(スタンド能力を引き出す、あの弓と矢を——)

更にスタンドを使ってアリアは二階の廊下へと跳躍した。

着地と共に、アリアは決意を滲ませる。

(逃がさない、この敵だけは。私自身の為にも！)

『アルク・ブラック』③

闇の中に広がる空虚と静寂。

其所へそつと溶け込むように二階に上がったアリアは、上半身を屈めて息を殺した。

と、一瞬だけ灯った光を左眼の端で捉える。

光が途絶えたのは、直ぐ近くの教室の中だ。

アリアは、スタンドを出現させた状態で慎重に車椅子を漕いだ。

臨戦体勢で望み、窓からの僅かな月明かりだけを頼りに暗闇へと勇敢に踏み込む。

(あの光、間違いない。ペンライトか何かでスタンドを設置している……)

それ以降、教室の中に光は灯らない。

此方の気配に気が付いたのだろうか。

もし、身を潜めているのならば好都合だ。

密室内での一対一の戦闘なら望む所である。

アリアは車椅子を漕いで教室へと近付いた。

しかし、その進行の最中に。

無数の気配。

アリアが気が付いた時には、既に。

廊下の上に無造作に、そして不自然に転がっていた文房具。

『イギギギ』

『イギ、イギ』

不気味な声を滴らせ、あの蛙に似たスタンドが一斉に跳び掛かって来ていた。

しかも、文房具。

それもコンパスやカッターナイフも混じっているそれ等を、蛙に似たスタンドは手足で器用に抱え込んでおり。

明らかに、鋭く尖った先端を突き立てるつもりで攻撃してきてい

る。

「……っ！」

咄嗟にアリアは突破する事だけに力を集約化させた。車椅子を全力で漕ぎつつ、前進を遮る数体の敵スタンドへと強引に。

『シルバー・チャリオッツ』の剣を振じ込む様に高速で繰り出し、斬り裂く。

（く……！・せ、正確過ぎる。この攻撃。しかも何かを探知したように、一斉に私目掛けて襲い掛かって来た……！）

敵スタンドの包囲網を突破出来たものの、荊の中を通過したかの如く、アリアは傷だらけになる。

裂けたブラウスのあちこちで薔薇が咲き、顔を歪めた。だが。

頬からも滴る鮮血を物ともせず、アリアは調理実習教室の中へと一気に飛び込んだ。

再び灯った明かりを目掛け、『シルバー・チャリオッツ』の剣の切っ先鋭く。

正確無比の刃を突き立てた。

しかし。

途端に前方の空間は音を立てて碎け散り、それが鏡である事をアリアは知る。

（……っ!? しまった、本体は対面の廊下の角に……！）

調理実習教室の入口が、音を立てて閉じられる。

無数の気配が一斉に蠢くのを、アリアは肌で感じた。

（そして、これは。マズイ。この教室から脱出しなくては）

廊下側の窓を割って逃げるのか、先程と同じように入から正面突破するか。

様々なこの空間からの脱出方法を画策するアリアだったが。

流石、調理実習室というだけあって刃物が揃っている。

その刃物を、無数の影のスタンドが掴んでアリアを包囲する形で迫って来ているのが見えた。

途中、衝撃で落下したフライパンが串刺しとなり、続け様に床を転がった鍋が粉微塵になった。

さながら軍隊蟻の行進である。

「……。」

アリアは、スタンドで離れた位置に有るスプーンを拾って、刃物の群れの中へと投げ入れた。

敵スタンドの群れは転がったスプーンの上を通過して行き、真っ直ぐ此方へと向かって来る。

最早、窓に近寄る事も一ヶ所しか無い入口に向かう事も怪しくなってきた。

唯一、敵が固まっていない壁際を走り抜ければ強行突破で入口から脱出出来るかも知れない。

だが、無事では済まないだろう。

「設置可能な、自動攻撃を行うスタンドですか……。確かに、厄介な能力ですね」

ジリジリと迫って来る敵スタンド達。

アリアは徐々に部屋の奥側へと追い込まれていく。

もう逃げ場は無い。

一か八か、壁際を走って突破するしか無いだろう。

痺れを切らしたように、一斉に襲い掛かって来た敵スタンド。

その凶刃を前にしてアリアは――。

――何もせず、その場から動かなかった。

襲い掛かって来た包丁の切っ先は、見えない壁に阻まれたかのよう

に、アリアの眼前数センチメートルの所で綺麗に静止している。

「しかし。やはり、そうですか。物体を動かす事は出来ても、最初に影

を潜行させた位置から、スタンドは離れる事が出来ないようですね。

何処までも追跡して来るのなら、階段付近の文房具もこの部屋に

入って来ている筈ですからね。有効射程距離は二メートルが限界と

いった所でしょうか」

アリアは横に移動したが、目の前にいる筈のスタンド達はそれ以上追跡して来ない。



首輪と鎖で地面に繋がれた番犬のように。

それ以上の追跡が出来ないらしい。

「私の逃げ道を限定したようですが、壁際にも恐らくスタンドを設置している筈です。そちらが本命でしょう？」

アリアは近くのフライパンを手に取り、壁際の暗闇の中へと放り投げた。

するとフライパンは鈍い音と共に串刺しになる。

「落下したフライパンは優先的に襲い、スプーンには反応しなかった。刃物の影よりも、大きい影を生み出す物質を優先的に襲う性質を持つスタンド。廊下で私を襲った文房具も、射程圏内に私の影が入って来たから自動追跡のスイッチが入ったのだとすれば……」

アリアは奥の棚からフライパンを三枚取り出すと、スタンドに渡し、て入口へと放り投げさせた。

すると餌を蒔かれた池の鯉のように、敵スタンドの群れは一斉にフライパンを追って入口へと殺到。

ドアごとフライパンを破壊する。

その間にアリアは手早く窓に近付き、撫でるように。

滑らかなスタンドの太刀筋で窓を切断、敵スタンドの群れが再び戻る前に、『シルバー・チャリオツ』を使って車椅子ごと廊下へと飛び出した。

車椅子の車輪が床へと接地する。

その直後、窓から一斉に敵スタンドが顔を覗かせたが、既に射程外だ。

窓から飛び出して来る事も無い。

アリアの注意は、廊下の柱の影に隠れているフランへと注がれている。

「……」

「——凄いね、君。いやあマジに尊敬するよ。僕のスタンドの特性にあつという間に気が付いて、ライオンの群れの中から奇跡的に逃げ出すシマウマみたいに教室から脱出するなんてさ」

フランはアリアの前に姿を現すと、掌の上でペンライトをクルリク

ルリと回した。

そろそろ暗闇にも慣れてきたアリアは、この廊下一帯に不自然な物体が落ちていない事を確認する。

『アルク・ブラック』本体から切り離れた自動操縦型のスタンドは確かに厄介だが、アリアの影を射程圏内に捉えないと攻撃スイッチが入らない。

互いに数メートルの距離を置いている今、最大限に警戒しているアリアに物体を接触させるのは至難の技だ。

試しにフランは自らのスタンドにナイフを持たせ、アリアへと投擲したが。

ナイフの影がアリアの影に重なった瞬間、ナイフに潜行させたスタンドが攻撃するより速く。

アリアの『シルバー・チャリオッツ』はナイフを細切れに切断した。『アルク・ブラック』は君との戦闘に向いていないかなあ〜

「では、降参しますか？ 行方不明になった方々の居場所、喋って貰います。そして、これから連れ去る予定の方に仕掛けたスタンドの自動追跡も、解除して下さい」

「おいおい、そりゃあ傲慢じゃあないのか？ 確かに君を倒す事は無理だと判断したし、僕はもう事実上敗北したも同然だ。——でもさ、僕は心ではまだ敗北していない。スタンド能力は解除しないし、行方不明の女達の居場所も絶対に喋らない」

「……。」

「君は警察でもなければ、裁判官でもない。只の一般人だ。僕を痛め付けた所で、君の魂が穢れていくだけだろうね。断言する。さあ、やれよ。君にそれだけの覚悟が有るのならなあ！」

フランはそう言っアリアへと近付いて行く。

直ぐに『シルバー・チャリオッツ』を出現させ、アリアは左目を細めた。

「僕は勝てないだろうが、最後まで抵抗してやるからなあ？」

そのままジリジリと、アリアの右手側へと移動するフラン。

アリアにとっては非常に闘い難い位置となるので、無意識的に敵を

追って身体の向きを調整し、距離を取る為に壁側へと後退する。

百戦錬磨のエリアであるが故に、自然と警戒してしまう。

と、エリアが壁に最も近付いた瞬間。

背後の壁から『アルク・ブラック』が急襲し、直接エリアを羽交い締めにする。

既にエリアの背後の壁の影に『アルク・ブラック』を潜行させ、虎視眈々と機会を伺っていたのだ。

「っ……!?!」

流石のエリアも背後から零距离で襲撃されては、スタンドのガードも一瞬遅れる。

そのまま天井付近まで敵スタンドが移動した事で、エリアは車椅子から引き離されて宙吊り状態となった。

『アルク・ブラック』のスタンド像は背後の影と融合した様な液体形状と化しており、エリアの身体に纏わり付いて全身の自由を奪っている。

「はははははっ！ やったぞ！ 君が教室から脱出した時には、『アルク・ブラック』は既に！」

「ぐ……うう……!」

液体の様な形状となっても『アルク・ブラック』のパワーは健在であるらしく、ギリギリとエリアの華奢な身体を大蛇の如く締め上げていく。

首筋が締まり、全身の骨が悲鳴を上げているのが分かる。

「試しに、自慢の剣で攻撃してみろよ！ 交際3ヶ月目のカップルみたたく、これだけ密着してりゃあ間違いないく君も巻き添え食らうぞ！」

「う……あ……!」

「このまま首の骨ブチおって殺してやるよ!! 『アルク・ブラック』、トドメを——」

「——っ、『チャリオッツ』!!」

透かさずエリアは、自らの右腕へとスタンドの切っ先を撃ち込んだ。だ。

剣身は一瞬で、彼女の右腕ごと『アルク・ブラック』の右腕を貫い

た。

アリアと、『アルク・ブラック』の本体であるフランの右腕から同時に鮮血が吹き出す。

「ぐ……！」

「な、にいいいいい……!?!」

更に続けてアリアの右肩を『シルバー・チャリオッツ』の剣が貫き、二人同時に右肩から鮮血が舞う。

共に激痛が身体を駆け抜け、意識が飛びそうになった。

「あ……ぐ……！」

「う、おおおおおおお!?」

アリアは苦悶の表情を浮かべながらも、『シルバー・チャリオッツ』の攻撃対象を自分に固定している。

スタンドが攻撃体勢を取り、次に撃ち込む場所を探っているのが見て取れた。

あと何度、繰り返すつもりなのだろうか。

(し、信じらんねえええええええ！ こ、この女ああ！ 何の躊躇いも無く！ 自分ごと、『アルク・ブラック』を串刺しにしてきやがったあああああ！)

「次、は……！ 肝臓なんて、いかがですか？ この、距離なら……：正確に。外し……：ません……！」

そう言って、アリアは不敵に笑ってみせた。

まさかとは思うが、どちらかが気絶するまで続けるつもりだろうか。

自らのスタンドで自らを刺し続ける、等と並大抵の覚悟では務まらない。

凄まじいまでの精神力である。

(ヤバイ！ 想像以上に、この女はヤバ過ぎる！ ブローリンの野郎にこの女を——)

その、フランが携帯電話に手を掛けた瞬間。

『アルク・ブラック』の拘束が一瞬弛んだ、その隙を逃す筈も無く、身体を捻って自分と敵スタンドとの間に僅かに隙間を作り出すと、

その空間へと『シルバー・チャリオッツ』の剣先を振り込み、敵スタンドを貫いた。

「うっ、ぎゃああああ!」

今後はフランだけが腕から鮮血を撒き散らせて悲鳴を上げる。

遂には『アルク・ブラック』による拘束を完全に解いてしまった。

マズイ。

と、フランは思ったがもう遅い。

アリアは車椅子の上へと落下、つまりは着席して。

スタンドを使い車椅子を押し、一気に安全圏へと脱出した。

「勿論、肝臓なんて狙いません。私も痛いのは嫌ですし。さて……」

アリアは右肩をpushさえながらフランを睨み付けた。

これだけの負傷を抱えながらも、彼女のスタンドには微塵の動揺も見られない。

それが鍛練と実力に裏打ちされた成果である事をフランは知るよしも無いが、夜闇に漂う威圧的な空気は確かな牽制となって、彼を一步退かせた。

「確か、貴方は先程こう仰いましたね。行方不明者の情報は教えない、スタンド能力も解除しないと。後は……心では敗北しない、とも」

「わ、分かった喋る! 解除もする!」

「素晴らしい信念をお持ちだと思います。なので是非とも、最後まで――」

アリアは『シルバー・チャリオッツ』を自らの傍らに出現させる。

「貫き通して欲しいですね!」

一足で。

瞬時にフランへと肉薄した『シルバー・チャリオッツ』が、彼の全身へと猛烈なまでの突きの連打を亜音速で放つ。

教室や廊下に展開していた自動攻撃のスタンド達が次々と消滅していき、全身を剣で貫かれたフランは廊下の端まで吹っ飛ばされた。

「貴方の信念、僭越ながら私が貫き通しておきました。覚悟の上での行動ですので、悪しからず」



『ブラッシュユ・リーパー』と『コバルト・ベルセ』



「ヤツのデスクは……ここか」

時間軸としては、アリアがフランを撃破する三十分程前になる。

幽霊の懐中電灯で事務室内を散策していたルークは、遂にフランの作業机を発見した。

意外と綺麗に整理された机の上には、ノートパソコンが一台置いてある。

あとは時計や筆記用具、予定の書き込まれたカレンダー。

机の中には袋に入った飴や、資料の束。

「机の中や下には……さすがに無いよな。几帳面そうなヤツだから、絶対リストぐらい作ってると思うんだが」

ルークは丁寧に机や資料の束を調べていくが、特に何も無い。

ゴミ箱の中も勿論空である。

「と、なると。やっぱりこのパソコンだよな……」

ルークは椅子に座り、電源を着けた。

机全体がパソコンの放つ淡い光に包まれる。

試しにキーを叩こうとするが、早速パスワード認証に引っ掛かる。

「な……!?!? じゅ、十五桁のパスワードを掛けてやがる。これ作業する時にイライラしないのか?」

試しに適当な数字を打ち込んでみたが、駄目である。

何か、手掛かりは無いかとカレンダーを手に取ったが、これは罨だった。

カレンダーの裏側から、蛙のような形状の小さなスタンドが姿を見せ、近くのカッターナイフを掴んでルークの手の甲を切り付けたのだ。

「うお……!?!? な、何だ!?!? コイツは!?!?」

ルークは直ぐに机から離れ、反対側の机の角へと身を潜める。

手背から滴り落ちる鮮血は取り敢えず、ハンカチを巻き付けて止血した。

すると、敵スタンドはそれ以上の追跡をせず、パソコンの側へと戻っていったようだ。

やり過ぎしたのか、と安心したルークだったが。

そのスタンドは今度はパソコンを攻撃し始めた。

カッターナイフで画面を攻撃した後、ボールペンを画面に突き立てている。

「まさか、ヤツのスタンドか……!? い、いつから居たんだ!? 本体が近くに居ないのに、正確にパソコンを狙っているぞ……!?」

机の上の文房具をあらかじめ使った蛙に似たスタンドは、今度はパソコンに体当たりを始めた。

徹底的に破壊するつもりのようなのだ。

「成る程。用心深いヤツだ。自分以外の人間が起動させると、自動的に破壊されるように罠を仕掛けてたって事か。けどな……」

ルークはそつと机に近付くと、敵スタンドの動きに注意しながら一気にパソコンへと触れた。

そして、タンスから衣類を引き出す様に、ズルリと。

破壊されたパソコンから幽霊のパソコンを引き抜く。

「この手の方法じゃあ、俺の方が一枚上手なんでね」

ルークのスタンド能力によって出現した幽霊のパソコンは、破壊される前の状態で復元され、中身の情報もそのまま残る。

また、自在に縮小可能でルークが許可しない相手は扱う事が出来ない性質も合わせ持つ。

尚、幽霊である為スタンド能力による干渉を受けにくい。

つまりは、貴重な情報を低リスクで持ち運ぶ事が出来るのだ。

「さて。目当てのモノは手に入れたが、パスワードがな……」

敵スタンドはまだパソコンを破壊する事に夢中になっているし、何より時間が無かった。

ルークは事務室の入口に座り込み、パソコンのパスワードを解除する事に尽力する。



だからこの時はまだ、気付いていなかった。  
ヒタヒタと事務室へと近づく、人影に。

この暗闇の中、懐中電灯も無しに真っ直ぐに向かつて来ている事を、ルークはまだ知らない。

やがて。

事務室前にやって来たソレは、勢い良く入口の扉を開いて中に入つて来た。

しかしそこに、ルークの姿は無い。

「……っ」

口に片手を当て。

文字通り息を殺して、間一髪。

ルークは窓側の机の陰に隠れていた。

(もう少し気付くのが遅れていたら……ヤバかったな)

机の陰から、ルークはこっそり顔を覗かせる。

月明かりに照らし出されて明らかになったソレの正体は、警備員であつた。

入口付近、先程までルークが居た場所を。

四つん這いになって、落としたコンタクトレンズでも探すように調べている。

奇妙な事に、腰に装備されている懐中電灯は使っていない。

(明らかに、様子がおかしいよな。まさか、新手のスタンド使いか?)  
暫く様子を伺っていると、警備員は突然動きを止め。

ゼンマイ仕掛けの駆動人形のような、少しぎこちない動きで振り返つた。

明らかに、此方を見ている。

そして四つん這いの状態で、ゆっくりと向かつて来た。  
(マズイ、こつちに来るぞ……!)

ルークは足音を立てないように、中腰のまま慎重に移動を始めた。  
長机をグルリと一周するつもりで回り込み、警備員と入れ違いに一つしか無い入口から外に出ようと考えたのだ。

ジリジリと互いに移動していき、ルークは入口正面の机の角に隠れ

る。

入口は開いていて、走れば振り切れる距離だ。

警備員はまた、先程までルークが隠れていた所を四つん這いで探している。

今しか無い。

ルークはそれでもソツと小走りで移動して入口に辿り着いた。

警備員は背中を向けており、気付いていない。

安堵したルークが廊下へと出ると。

既に入口の真横に。

二人目の警備員が立っている。

「……………?!」

即座に組み付いてきた警備員。

ルークを廊下へと引き摺り倒すと、逆手に持っていたナイフを思い切り振り下ろしてきた。

「うおっ!」

咄嗟に身体を回転させて避けたルークは、懐から幽霊のスタンガンを取り出して警備員の足首に押し当てた。

警備員は少しよろけたただけだったが、距離を取るには十分である。

ルークは事務室から急いで離れ、近くの廊下の角に身を隠した。

(な、何だ? アレは?!)

今、警備員を間近で対峙したルークが感じた違和感。

血の気の抜けたような青白い肌に、裏返った眼球。

フラフラと歩く男の両眼と口から、黒色のドロドロとした液体が流れ出ているのが見て取れた。

黒い液体は廊下にまで滴り落ちており、足跡のようになっていた。

と、事務室の中からもう一体。

矢張り四つん這いの状態の警備員が登場した。

二人は、またしても吸い寄せられるが如く、ルークの隠れている廊下の角へと近付いて来る。

(アレは……何か奇妙だ。あの警備員がスタンド使いなんじゃあなくて。取り憑かれているみたいだ。——それにしても、勘が良すぎる

……!?)

ルークは音を立てないように、呼吸を殺しながら廊下の奥へと進んで行く。

突き当たりの側にあつた階段を慎重に上り、踊場の辺りでしゃがんで様子を見た。

ヒタヒタと、二人分の足音が聞こえる。

近付いて来ている。

(そのまま、階段の横を通り過ぎてくれよ……?)

相手は懐中電灯を使っていない。

加えて、ここは月明かりが差し込み難い場所だ。

やり過ぎせる可能性は十分に有る。

だが、ルークの予想に反して警備員二人は。

迷わず階段に足を掛けた。

(何……!?)

そればかりか、踊場で様子を伺っていたルークを的確に見上げると、ニタアと不気味な笑みを浮かべ、急に走り出して階段を駆け上がって来た。

さつきまでヨタヨタと歩いていた二人が、突然にだ。

あつという間に距離を詰められたが、警備員二人は階段の途中。

下の手刷りと上の手刷りとの間に斜めに張られていたロープに引っ掛かり、派手に転倒する。

その隙にルークは二階へと逃れた。

「ね、念の為。幽霊のロープを張つて良かった。……しかし、あんな分かり易い罠に足を取られるなんてな」

ルークは廊下を暫く走って、再び角に身を隠した。

また罠を張ろうかと思つたが、警備員二人は意外にも早く、二階に上がって来ている。

(クソ……。駄目だ、俺の能力じゃあ身を躲すので精一杯だ。しかも、本体が近くにいないのに俺を追跡して来ているって事は、何かを感知して追つて来ている……! このままでは、振り切れない!)

走り出し、ルークは懐から幽霊のパソコンを引っ張り出した。

フランクの物ではない為、立ち上がりから直ぐにこの校舎の見取り図を表示出来る。

それを見ながら、ルークは廊下を走って二階校舎をグルッと回って行く。

「お、女の子に助けを求めるのはどうかと思うが、今は抜き差しならない状況だ。——アリアだ、アリアの『チャリオッツ』なら太刀打ち出来る」

そう考えたルークだったが、ふと背後を振り返ってみると。

二人の警備員は既に。

数十センチの距離にまで迫って両手を伸ばして来ていた。

ルークの服の裾が、警備員の一人に掴まれる。

「うおおおおおおお!! マ、マズイ……!!」

グイグイと上着を引っ張られ、ルークは足を纏れさせてしまう。

しかし、寸前の所で上着を脱ぎ捨てて廊下を転がり、立ち上がって再び走り出す。

それをも見越して、警備員は尚も追い掛けて来た。

(時間稼ぎ程度なら……)

走りつつ、ルークはシャツの胸ポケットから幽霊のテーブルを取り出すと、廊下の真ん中に設置した。

突然現れたテーブルにブツかり、警備員二人は倒れ込む。

その隙にルークは曲がり角に差し掛かった。

すると警備員は立ち上がらずに、両手足を使い蜘蛛のような奇妙な格好になって凄まじい速さで追って来た。

「げえ……!!? な、なんだあ?!」

最早人間業では無い。

あの速さでは間違い無く追い付かれる。

たまらず、ルークは途中にあつたトイレの中に逃げ込み、一番奥の個室に入って鍵を掛けた。

荒くなっている息を、整える事に努める。

(俺が入った所は……見られてない筈だ。急に姿が消えたから、探しているかも知れないが……)

と、入口の方でギイツと音が上がって、二人分の足音が入って来たのが分かった。

しかも真つ直ぐに奥の方へと歩いて来ている。

ルークは再びパソコンを取り出し、立ち上げた。

「落ち着け。見取り図の確認を……」

だが。

ドンツ、と鍵を掛けた扉が叩かれる。

そこから更に何度も扉が歪んだ。

所詮はトイレの扉だ。

今にも白旗を上げそうである。

そして、遂に。

扉が破壊され、狂った警備員達が流れ込んで来た。

其所に居るルークへと、一斉に掴み掛かる——事にはならなかった。

何故ならルークの姿は、トイレの個室から忽然と消えていたのだから。

警備員二人は中を這うようにして探したが、暫くすると立ち上がり。

揃ってフラフラとトイレから出て行った。



「う……………ん……………」

真つ暗な廊下に仰向けに倒れていたフランは、目を開いた。

肩や腕には布が巻かれており、止血されている。

恐らくは教室のカーテンを裁断して作ったモノだろう。

「気が付きましたか？」

その応急手当てを行ったであろうエリアが、月明かりを背景に姿を

見せた。

彼女も自分の身体に布を巻き付けており、止血を行っているようだ。

「……僕に、喋らせるつもり、か？ あの女達の居場所を」

「いいえ。ルークさんが貴方のパソコンを確保する筈です。悪い尋問は、私の趣味では有りませんので」

「パソコン……？ ああ、残念だったな……。アレには、罠が仕掛けてある……」

上手く身体を動かす事の出来ないフランは、視線だけでアリアの動きを追う。

アリア自身も車椅子を漕ぐ動作がぎこちない。

「もつとも、僕がこうなつた以上……『アルク・ブラック』はとつくに解除されていると、思う……けどな」

「例え解除されていなくても、ルークさんならば大丈夫です」

「へえ……信用、しているんだ……羨ましい、限りだよ」

フランは天井の蛍光灯を見上げ、ボンヤリと呟いた。

「僕は昔から、写真が好きでね。特に、女性を被写体にした写真を、毎日のように撮っていたよ……。美しいモノを自分の手で形にして残す。僕にとつてのそれは、芸術の域を外れない、一つの生き方であり真実の自分だった。その高揚感を普通だと認識していたし、誰しもがそう思っている感覚なのだと疑わなかった」

「……？」

「ああ。勿論、独り言だよ。適当に聞き流してくれて良い。仲間を呼ぶ前に君に倒されちゃったし、僕自身も反撃する力はもう残っていないさ」

フランの様子を見る限り、それは事実だろう。

電話を使う事はスタンドの動きも含めて完璧に防いだし、急所を外しておいたが一人で立つ事は困難な程には戦力を削いである。

もし戦闘になっても即座に無力化する事は可能だ。

単なる時間稼ぎならば、ルークを待っている此方にも利得が有る。「警戒している所……悪いんだが。これは、そういうのじゃあない。

君の実力なら、僕を殺す事も出来ただろう。でも、僕は生きていて、こうやって君に手当てして貰っている。それに対する少しばかりの敬意だと捉えて欲しい。僕は自分からは他の仲間の事や計画の事は絶対に喋らないが、何せ君は勘の良い奴だからね。僕自身の事ならば少しは、と思つたのさ」

「一体、何の話を——」

「僕の写真への拘りを『才能』へと昇華してくれたのが、矢だった。形にして引き出した。僕から『アルク・ブラック』をね」

「っ!?!」

「君はあの矢について知っていて、手に入れたと考えているんだろ？ 僕のスタンドの特性に気が付いておきながら、敢えて追つて来たからね」

「矢は、今何処に有るんですか!?!」

冷静さを欠いた態度でアリアがフランに食い付いた。

フランがスタンド能力を発現させ、その力に気が付いたのは最近の事だろう。

矢を持つ人物を突き止める手掛かりになるかも知れない。

だが、薄ら笑いを浮かべるフランを見て、アリアは察する。

フランは知らないのだ、と。

悔しさと歯痒さを押し殺して、アリアは顔を背けた。

「……良いね。君の今の表情。フフツ、凄く良かった。カメラがあったら思う存分に君を撮影したいよ。フフフ、凄く気分が良い。君さ、ひよつとして携帯とか持ってないの？ パソコンが苦手とも言つたよね？ 面白いな、君に興味が湧いた。——今から、僕が言う事を良く聞いて。一回しか言わないけど、心に留めといってくれると有難い」

フランは首を捻るアリアへと、一度不気味な笑みを浮かべる。

そして、言うのだ。

「『愛してる』」





『ブラッシュユ・リーパー』と『コバルト・ベルセ』②



「——サッカーとかの試合に使われる芝ってね。それ専用グラウンドキーパーみたいな役職の人を雇って、嚴重に育成管理されてるんだってさ。芝が長いとボールの回転にも影響が出るし、足を取られた選手が転倒するかも知れないからね。試合中にごっそり芝が抉られた時の為に、予備の芝まで準備しているっていうから徹底してるよ。……ああ、それはそうと、非常に興味深い」

『何がだよ?』

小綺麗なマンシヨンのリビングで。

男は右手で、ワンピースを着た黒髪の人形を揺らし、裏声で人形の声を出して会話を成立させた。

「最近、この街に入ったスピードワゴン財団の人間。ルークとかいったか。確実にコイツも何かしらのスタンド能力を持っている。使い捨ての駒だったがデイドを返り討ちにし、拘束する事に成功しているんだからな。しかもだ、監禁場所にも見当がついているのか、警察に包囲網まで敷かせている」

『へえ〜〜〜生意気な奴なんだね。早く始末しようよ』

「当然、私はそう考えたワケだ。常に最悪の事態は想定していなくっちゃあならないからな。デイドの奴には幾つかフェイクの情報を与えてあった。その情報の真意を調べにノコノコやって来た奴を、ジャックとカルザルに始末させるつもりでいた。しかしだ。どうやら奴はまたしても切り抜けたらしい。スピードワゴン財団の他の連中を呼び付けて、二人を拘束した。そして奴はその後、フランの居る大学行きのバスに乗ったようだ」

『スゲェ〜〜〜!? いきなりだあ!』

「私もそれは想定外だった。まさか、捜査線上に今まで拳がらなかったフランに、横からアイスクリーム搔つ攫うカモメみたいに突然にだ。突然に辿り着いた。一体、何処からフランに関する情報を得たのか、見当も付かん。糞つたれスピードワゴン財団のサポートが極めて優秀なのか。あるいは、奴には他に頭の切れる仲間が居るのか」

男は右手に持っていた人形を一旦テーブルの端に置くと、ピザを一口食べた。

付けっぱなしにしているテレビではサッカーの試合をやっていて、それをソファーに深々と腰掛けながら観賞しているのだ。

その男から少し離れて壁際に、ズラリと女性達が並んで立っている。

彼女達の日や口からは赤黒い液体がドロリと流れ出しており、皆一様に微動だにしない。

「ここで奇妙なのが、その時奴と一緒にバスに乗った女だ。身体に障害が有るのか、車椅子に乗っていたらしいが。着ている制服から、デイードが拘束された場所……つまりはエベール女子高等学校に通う生徒だという事が分かる。何かの偶然なのか。しかもこの女、ジャックとカルザルが見張っていた現場にも居合わせた事になるよな？」

男は透かさず右手で人形を持って動かした。

『何者なんだああああ〜？ その女はよおお？ 可愛いのかあ？ スタイルはどうなんだよおお〜？』

「あ、気になってきた？ とても興味深い事実だろう？ まあ、金を渡した一般人からの目撃情報だがな。しかも真意を知ろうにも、非常に残念だが、あの大学に入ったのなら。我がスタンド『ブラッシュ・リーパー』の攻撃圏内に入ったという事さ。フランの奴の状況にもよるが、『ブラッシュ・リーパー』は何者だろうと必ず始末する自動追跡型のスタンドだ。こうして悠長にピザを食べながらサッカーの試合を見ているも、既に攻撃は完了している」

『さっすがだぜ、お前は一番頼りになる奴だああ！ その女共も捕まえているしなあ！』

「……………ん？ ああ、その壁に馬鹿みたいに突っ立っている連中の事かい？ 今どきは虐待だ何だつて保護者が騒ぐから学校でも授業中に立たせとく事はしないって言いたい？ 大丈夫、ソイツ等は『芝』だよ。補充の為の『予備の芝』だ。『七つ眼』という、巨大なフィールドを埋める為のな」



「——今。何て仰いましたか？ 『愛してる』って聞こえたんですが？ 控えめに言つて気持ち悪いですね」

アリアは軽蔑にも似た、冷めた眼差しをフランへと送り付けた。

普段から注意深く人の話を聴き、観察を怠らないアリアだが、この時ばかりは興味を欠き、悪態をつく。

最早怒りすら過った。

「さつきも言ったが、僕は一度しか言わない。その言葉の意味が、君に届く事を願っているよ」

「……………」

「お喋りは、これくらいにして。最後に君という人間と話せて良かったよ。残念だが、僕はもう始末されるだろう」

静かに目を伏せて、抵抗する事を諦めたかのようにフランは全身の力を抜く。

「君は直ぐに逃げた方が良い」

「……………あらあら。仰っている意味が、分かりませんか？ 貴方は勿論、私も殺される事は有りません」

アリアは『シルバー・チャリオッツ』を自らの傍らに出現させ、周囲を警戒する。

迎え撃つ覚悟のようだ。

確かにスタンドの性質上、『シルバー・チャリオッツ』は探索よりも迎撃する事の方に遙かに向いている。

『シルバー・チャリオッツ』の視覚は本体であるアリアに依存している為、彼女が見る事が叶わない場所の情報は持ち帰る事は出来ないのである。

しかし反面、知覚可能な範囲内の物質やスタンドへは非常に高い制圧力を誇り、炎でさえ斬り伏せる事が可能だ。

無論、アリアは自らのスタンド能力を熟知しており、それ故に瞬時に迎撃体勢に移行している。

「——思うに。これからフランさんを始末しに来るといふ敵は、自動操縦型のスタンドですね。貴方が電話で呼ぼうとしていた人物とは、また別の人間の能力」

警戒しつつ、アリアはスタンドでフランの身体を少しずつ壁際へと引き摺って行く。

そして自らは車椅子を漕いで柱の陰に身を隠した。

「敵スタンドの特性はまだ分かりませんが、貴方が敗北する場面を敵本体が常に監視している、というのは可笑しな話です。何かしらの条件の元、敵本体の無自覚の範疇で発動するタイプである方がまだ現実的では有ります。恐らくは、あらかじめこの大学に仕掛けられていたのでしょうか」

「……………」

「ここで一度交戦し、敵のスタンド能力をある程度見極めた上で逃げた方が安全です。ルークさんが合流するまでの時間、持ちこたえればフランさんも運び出して貰えますし。後は着実に距離と対策を取り、敵本体に近付ければ上々なのですが」

アリアは念の為フランから距離を置き、柱の陰から廊下の暗闇に視線を這わせている。

月が雲に隠れると、この視界の悪さだ。

自分の側に『シルバー・チャリオッツ』を出現させて常にガードしておかなければ、不意打ちを食らう可能性だって有る。

『アルク・ブラック』との戦闘で負傷し、体力も奪われているアリアだったが。

この暗闇と泉のような静寂さは逆に彼女の神経を鋭利に研ぎ澄まさせた。

『シルバー・チャリオッツ』の弱点とも言える本体への視界依存を感覚的にカバーする為、アリアは定期的に屋敷の地下訓練室に閉じ籠もり、気の遠くなるような試行を繰り返している。

殆ど視界を遮った上での正確なスタンド操作を厳しい基準で自己分析し、己の感覚へと徹底的に叩き込んでいるのだ。

その尋常では考えられない試行量と特殊な鍛練の末、今は最大二メートルまでなら視界を遮断してもスタンドを正確に操る事が出来るようになった。

スタンド能力は『才能』であり、それ故に成長させる事が出来るという自らの仮説に基づいた努力の結果である。

「君は、本当に優しい人間だよ。情報を一切与える気の無い僕を、命懸けで助けようっていうんだから」

「——誰もが、常に白の道を歩いているワケでは有りません。時には迷いや失敗、様々な選択と体験から黒の道を歩いてしまう事も有るでしょう。ですが、白に戻る事は、誰にでも平等に出来るんです。私に少しばかりでも興味が有るのならば、フランさん。今すぐに、白に來て下さい」

「……もし生き残れたら、君の写真を撮っても良いかな？」

「ええ、構いませんよ？」

この時ばかりは、アリアはニツコリと笑った。

月明かりに照らし出される彼女の銀髪は艶やかで、傷が痛みを忘れる程に美しい。

反射的に、フランは自らの唇を舐めた。

自分の行き過ぎた趣味への没頭は他人を遠ざけたが、今こうして最高の被写体が目の前に居ると、手の平を返すようだが。

今までの人生も悪くはなかったと思える。

「正直ね。僕もこれから来るスタンドの事は良く分かつちやあいない

んだ。ただ、死人に口無しって言葉通り、敗北したスタンド使いを始末する能力だって聞かされている。スタンド名は『ブラッシュ・リーパー』、射的距離は君のさつき予想していた通りだ」

「……!？」

「何驚いてるんだよ。僕の知っている事を少し伝えたくらいで、この状況が覆るとは到底思えないからね。今は、君の写真に対する前金みたいなモノだよ」

「……そうでしょうか？」

仮説の裏が取れたアリアは、顎に手を当ててジツクリと思考を巡らせた。

フランとの戦闘が終了して、既に三十分弱経過している。

敗北した段階で襲って来るならば、遅過ぎだ。

(何かを感知し、自動追跡が始まるまでに若干のタイムラグが発生している？ 昼夜問わず、かつ感知するまでに時間が掛かるモノ……?)

辺りを適度に観察しながら、移動する事も視野に入れ始めるアリアだったが。

その時。

『痛い……』

「……っ！」

暗闇に突如として聞こえた、枯れた女のような声。

フランの方を向くと、彼にも聞こえたらしく、焦燥を滲ませた顔付きで周囲を見回している。

『痛い……痛いネ……。痛いネ』

「こつ、この声は……!」

丁度、月が雲に隠れて見えなくなり、辺りは薄暗さを増す。アリアは車椅子の車輪を両手で捕まえ、警戒を強めた。徐々に、近付いて来る。

——ズルツ、ズル。

『痛い……痛い……!』

声の他に、何かを引き摺るかのような音が聞こえ始める。先程よりも尚近い。

しかし、この音がアリアに居場所を伝える狼煙となった。

音のするのは、前方。

一直線の廊下の奥の、右の壁側だ。

そして、雲から出た月明かりに浮かんで、遂にその姿を見せる。

うつ伏せのまま、ズルズルと身体を引き摺って。

這って移動している赤黒い物体。

見た所、脚と呼べるモノは無く、胴体と両腕。

そして長い黒髪に覆われた頭部で構成されている。

時折、進行を停止しては、『痛いネ』と今度は幼子の声で呟く。

「なん、だ……!?! あのおぞましい姿のスタンドは……! ホラー映画とかに出て来る化け物じゃあないか!?!」

フランが思わず口を開く。

しまった、とアリアは身構えたが、敵スタンドの進行速度には変化は無い。

まだ此方に気付いていないように見える。

但し、真っ直ぐにフランのいる方向へは向かって行く。  
だが、もう数メートル近寄った、その時。

『アアアアアアヒヤヒヤヒヤヒヤッ！ 居タ居タ？ 痛イヨ  
ネエエエエツ！』

突如として顔を上げた『ブラツシユ・リーパー』が奇声を上げ、それまでの移動速度とは比べモノにならない猛スピードで、廊下を這いずって来た。

「っ!? 『シルバー・チャリオツ』!」

やや遅れて、アリアが自らのスタンドを正面へと突進させる。

瞬く間に間合いに入った敵スタンドを、牽制するつもりで剣を一薙ぎした。

その鮮やかな高速の斬撃を受けて『ブラツシユ・リーパー』は、水が弾け飛ぶ様にその場で霧散する。

「な、何だ……う？ やったのか？」

「いえ、違います！ 手応えが有りませんでした。敵スタンドは、ピンピンしています」

まるで液体を切ったかの如く、敵スタンドは弾けて姿を消した。

もし、本当に液体状に飛び散って、しかもその状態でも自動追跡が継続していたのなら。

あのスピードで、追跡して来ていたのなら。

「——静かになったようだね。とりあえずは、危機をハネ除け……」  
そんな、安堵したフランの頬に。

ポタリ。

一粒、液体が落ちる。

天井を見上げたが、蛍光灯が有る以外には何も無い。



「何だ？」

ポタリ、ポタリ。

不思議な事に、何処からともなく。

滴り落ちる水滴。

と、その時。

『痛い……』

途端に、フランの周囲から噴水のように赤黒い液体が吹き出し、目の前で一つの集合体になっていく。

更に周囲から細かい水滴が、磁石に引き寄せられる砂鉄を思わず、物理法則を無視した動きで、フランに向かって飛んで来る。

「う、上から落ちてきたんじゃないやなくて……」

冷や汗と共に、恐怖して速くなる鼓動。

現れたのは不気味な姿のスタンド、『ブラッシュ・リーパー』である。「集まって来ていた、僕に向かって！ コイツは！」

敵スタンドの両腕が、フランの片腕と首をガツチリと押さえ付ける。る。

長い黒髪に覆われた敵スタンドの顔は、目や口といったモノは無かった。

代わりに、その顔面が縦に割れ、開き扉のように左右へと別れる。すると中から、粘液が絡んだ注射針がズルズルと出現した。

「フランさんっ！」

アリアは既に車椅子を漕いではいるが、遠過ぎる。

その間にも、敵スタンドは注射針の先端をフランに向けて突き出していた。

(直接攻撃した『チャリオッツ』と私を無視して先にフランさんに攻撃を……!!? しかも、液状でも的確に追跡をしている……! 敗北したスタンド使いを始末する、それが目的のスタンド……!!? 一体……!!?)

『ブラッシュ・リーパー』は押さえ付けたフランの頭部目掛けて、首

を持ち上げた。

一撃の元、あの注射針をフランへと突き立てるつもりでいるのだ。「うっ、おおおおお……!!? こ、このパワー……! 逃れられない! こ、このスタンドは……!! コイツの、能力は……!!?」

『イタイ、ヨネ?』

敵スタンドは首を傾げた後、その鋭利な切っ先を躊躇わず振り下ろした。

フランの悲鳴が木霊する。

だが、注射針が突き刺さる、その瞬間。

『『シルバー・チャリオッツ』!!』

白銀の一太刀。

アリアの太ももから鮮血が吹き出し、闇夜へと溶けた。

自らのスタンドで、脚を切り付けたのだ。

「く……! うう……!」

苦痛で顔を歪めるアリアだが。

歩けなくても、此処はちゃんと痛みを感じる事が出来た。

まだ感覚が残っていた事が、彼女には嬉しかった。

ピタリと。

フランの鼻先、数ミリメートルの所で。

注射針は停止した。

『『ブラッシユ・リーパー』』はフランの拘束を解くと、身を翻して今度はアリアへと向かって高速で移動を開始した。

「探知しているモノが、分かりました」

アリアは車椅子に手を掛けて身構え、スタンドを出現させる。

それでも、フランから距離を取るようにジワリジワリと後退は続け

た。

「血液です！ このスタンドは、深海のサメのように。空気中に広がった血の臭いを追跡して来るスタンドなんです。そして負傷が多ければ、或いは血液の鮮度が高ければ、そっちを優先的に追跡します」肉迫した『ブラッッシュ・リーパー』へと、アリアは『シルバー・チャリオッツ』を繰り出し、高速の斬撃を展開する。

しかし。

全身を切断された『ブラッッシュ・リーパー』は先程と同様に液状となつて飛び散り、アリアの前から姿を消した。

「手応えは無い、ですか。でも、やはり動作自体は単純ですね。探知したモノに向かって攻撃する、という大雑把な動きしか出来ていません」

言いつつ、側に集まつてきた液状の敵スタンドへと剣撃を放ち、四散させる。

そして続け様に車椅子を回転させると、背後に出現途中の頭部を精確に斬り払った。

「近付いて来るのは好都合です。この間合いなら、私の方が圧倒的に速いですから」

すると。

周囲を警戒するアリアの攻撃を避けるように、『ブラッッシュ・リーパー』はゆっくりと天井から出現する。

しかし、

彼女のスタンドは即座に頭上へと剣を撃ち込み、敵スタンドの頭部を串刺しにしてみせた。

本体が負傷しているとは思えない、驚異的な反応速度である。

敵スタンドが襲い掛かって来る度にアリアは斬り払い、少しずつ、少しずつフランの所から離れて行く。

一気に移動すると、フランの方へと自動追跡が切り替わる恐れがあったからだ。

自分が常に標的になる事で、『ブラッッシュ・リーパー』をこの場から引き連れて離れる。

非常に危険だが、効果的な方法であった。

(——さつき、敵スタンドが急激に追跡速度を上げる場面があった。このスタンドの自動追跡には、標的までの距離が関係している)

アリアは『シルバーチャリオッツ』で身を守りながら後退を続ける。(その距離、目測で約二十メートル。二十メートル以内に血液を感知すると、追跡スピードが途端に速くなるようですね。このスタンドから二十メートル離れる事が出来れば、追跡自体は停止しなくても振り切れる可能性は高い……！)

ジリジリとフランから距離を取るアリア。

彼を驚異の外へと逃すまで、あと少し。

後退先を一度目視してから、アリアは正面の『ブラッッシュ・リーパー』へと斬撃を放った。  
だが。

この攻撃に限り。

金属音と共に『シルバー・チャリオッツ』の剣身は弾かれ、押し負けてしまう。

「……っ!?!」

驚愕したアリアへ、敵スタンドの丸太のような右腕が強襲した。

即座に『シルバー・チャリオッツ』で迎撃を行ったが、その破壊力は剣撃を弾き飛ばし、『シルバー・チャリオッツ』の脇腹を捉えた。

「うぐ……!?!」

スタンドへのダメージが本体であるアリアにもハネ返り、衝撃で車椅子ごと吹っ飛ばされる。

壁に激突したアリアは車椅子から投げ出され、床に転がって吐血した。

「アリアー!」

フランが悲鳴にも似た声を上げる。

車椅子から投げ出されたアリアの機動力はゼロ。

しかも新たな傷を感知して『ブラッッシュ・リーパー』は襲い掛かって来る。

「成る程……ゴホッ。血液を、感知するスタンド。スタンド自体も血

液と同じ性質を……持っているという事……ですか。鉄分と、凝固因子による硬質化……」

離れてしまった車椅子をスタンドで掴み、近くへと引き寄せるアリアだが。

それすら許さない『ブラッシュ・リーパー』が追従するようにアリアへと突進して行く。

「マズイぞー！ 速くっ！ 速く体勢を立て直すんだああああ！ もう既に、君の側に！ 向かっているぞ！」

フランが叫ぶ。

何とか車椅子に手を掛けたアリアの背後に。

注射針を振り下ろす敵スタンドの不気味な影。

もう駄目だ、とフランは顔を背けた瞬間。

何故か注射針は床に突き刺さった。

アリアの姿が、その場から忽然と消えたのだ。

『痛い？ ヨネ？』

攻撃目標を失った敵スタンドが、首を傾げた。すると。

「おい、化け物」

突如として発せられる少女の声。

彼女は大胆にも、『ブラッシュ・リーパー』の隣に立っていた。

給仕服に身を包んだ、ミリイである。

勿論、負傷していない彼女には反応しないので、無視して移動を始めるのだが。

「コツチを見ろ」

直後、ミリイから藍色の人型のスタンドが飛び出し、至近距離から猛烈な勢いで拳を繰り出した。

『ウリヤアアッ！』

硬質化している敵スタンドの装甲もお構い無し。

破壊と共に顔面に一撃を入れられた『ブラッシュ・リーパー』は、ガラスを突き破って正面の教室の中へと吹っ飛ばされた。

「会話ぐらいよおお。成立させようぜ、なあおい」

『痛いネ……痛いヨネエエエエ……！』

敵スタンドは暗闇の中、教室の窓口に手を掛けて起き上がり。  
一声叫んだ。

「よおおお。お前に言っただぜ？ アタシはよおおお」



『ブラッシュユ・リーパー』と『コバルト・ベルセ』③



「ここ、は……？」

「間一髪だったな、アリア君」

錆びた天井。

黄色変色した壁紙。

ルークに横抱きに抱えられた状態で、アリアは。

見慣れない場所に居た。

何処かの建物の中だろうか。

薄汚れた狭い廊下の真ん中でルークから止血を受けながら、アリアは周囲を見回す。

「旧校舎だよ、この場所。新校舎が建てられる前に建っていた。俺の能力で幽霊の旧校舎に入った」

「……っ」

「敵に追い掛けられた時に、パソコンで探したんだ。大学の地図の上に、旧校舎の地図を重ねて。入口をな。まさか、女子トイレの中に入るとは思わなかったがな」

「ルーク、さん……」

アリアは左目の端に涙を浮かべ、そっと。

両腕をルークの背中へと回して目を伏せた。

突然の事に少々驚いた様子のルークだったが、微笑し、彼女の頭を優しく撫でた。

「いや、ホント。間に合って良かったよ」

「はい……助かりました。やっぱりルークさんは、頼りになる方で——」

「おいっ！ アリア！ 生きてるのか!？」

不意に背後の壁から、苛立った様子の子のミリイの上半身が飛び出した。

アリアは悲鳴を上げながらルークから離れ、真っ赤な顔で振り返る。

「テメエな！　生きてんなら、大丈夫ぐらい先にアタシに言いやがれ！」

「は、はい！　すいませんでした、ミリイさん！　助けに来て頂いたのに、私は……」

「おい！　おいおい！　素敵に勘違いしてんじやあねえぞアリア！　アタシは別にテメエを助けに来たつもりはねえ！　考えが甘いんだよ、頭にハチミツ詰まってるのかテメエはよおお！」

一氣にまくし立てるミリイだった。

幽霊の校舎の中を移動していたルークが偶然一階で発見した時に、「アリアは無事か!？」と結構本気で心配している。

「ミリイと出会ったのは偶然だったよ。この近くの本屋に用事があったらしい。んで、俺の方から彼女に助っ人を頼んだんだ」

ルークがそう言うと、ミリイはそっぽを向きながら「そう、それだ！」と相槌を打った。

屋敷で聞いた事情が事情だけに、頑なにアリアを助けに来た事を認めないミリイ。

「俺はミリイと君を探して幽霊の建物の中を移動し、ここまで一緒に登って来た。何か、君にも危機が迫っている気がするね」

「それで来てみれば。……フン、好い様だよなあアリア?」

ミリイは鼻で笑った後、幽霊の建物から退出し。

廊下の端の方に倒れているフランに視線を向けた。

「倒した敵を庇って、その負傷か？　普段から抜け目の無えテメエにしては、随分と間抜けな行動じゃあねえか?」

腕組み仁王立ちで幽霊の建物の入口前に立つミリイは、教室から移動を始めた『ブラッシュ・リーパー』を悠長に眺めながら嘲笑う。

「どうやら、フランの方へと向かっているらしい。」

「今ならよお。——負傷したテメエの『チャリオッツ』なら、楽に始末



出来るかもなあ？ この場でよお」

不敵な笑みを闇夜に浮かべ、ミリイが首だけを振り返る。

「……っ！」

殆ど反射的に、アリアは『シルバー・チャリオッツ』を自らの傍らに出現させていた。

ミリイとアリア。

二人の視線が交差し、張り詰めた空気となる。

「……ふん」

暫くの睨み合いの後、先に視線を切ったのはミリイだった。

敵スタンドが移動を始めた事もあり、行く先にいるフランの方を見ている。

「——で？ 何なんだあのスタンドは。攻撃したアタシじゃあなくて、あっちの男の方へ行くぞ？ どうなっている？」

「……あのスタンドは、血液を感知して攻撃目標を変える性質があるようです。標的との距離が近ければ近い程、追跡スピードが増していきます」

取り敢えずスタンドを引っ込めたアリアが、気持ちを切り換えて説明した。

レンといいミリイといい、メールで会話するフェンネルといい。

アリアの屋敷の使用人達は本当に回りくどいな、とルークは溜め息を吐く。

今のミリイの台詞も「助けに来た。だが気を抜くな」を言えば済む話だろうに。

「射程距離はどのくらいだ？ 本体は何処にいる？」

「——本体は近くにはいません。スタンドだけが自動的に目標に向かって行くんです。しかも目的を遂げるまで、決して追跡を止めない」

「おい、何だそりゃあ？ それはつまり、あのスタンドがいる限り、負傷した人間をここから運び出せないって事か？」

「ええ。敗北したスタンド使いを確実に始末する事に特化した能力と言えるでしょう。このスタンドの本体が、それを望んでいるんです」

二人が会話している間にも、『ブラッシュ・リーパー』は確実に移動している。

このままだと、再びフランを二十メートル圏内に捉えてしまう。

ミリイは様子を伺った後、後方のアリアとルークへ向けて人差し指と中指を揃えて立てた。

「二つ、だな。選択肢は二つだ。先ず一つはアイツを囿にして、アタシ達三人で幽霊の建物を使って逃げる」

「っ!？」

「二番安全で安心出来るやり方だ。幽霊の建物の中へは、ルークが許可した者以外は出入り出来ない。あの化け物も、アリアが建物の中へ入った瞬間に見失っている。奴の追跡能力の範囲外って事だ。校舎の外まで追跡して来るなら話は別だがよお」

「で、ですが! このままフランさんを見殺しには……!」

「浜辺に打ち上げられたワカメみてえにボロボロの格好の今のお前が、アタシに言える立場か? それに、だ。あのフランとかいうボロ雑巾みてえな奴を助けた所で、アタシ達にメリットがあるとは到底思えねえな。アイツが、今後、お前を襲わないって保証が何処にある? いや今度は、ルークやレンが危険な目に会うかも知れねえよな」

「——っ!」

アリアの指先が、ルークのシャツを力強く掴んだ。

唇を真一文字に結んで、俯いている。

彼女にはかなり効果の有る一言だと思う。

しかし実際問題、ミリイの言う事も一理有る。

純粹に人を助けたいだとか、もう十分に罰は受けただとか、そういう慈悲による行動は人間の道徳心によるモノで。

何の根拠も理屈も無い、本物の悪には利用されるだけの、美しい理想論だからだ。

各々の正義や魂の純粹さに影響されると言っても良いかも知れない。人を信用するな。

その一言と仲間の安全を天秤に掛けられては、アリアも選択を余儀

なくされた。

悔しいが、葛藤の中で天秤が仲間の方へと傾いていってしまう。

「——良いかアリア、よく聞けよ。お前よりも二年先輩だから忠告し  
といてやる。その天秤に最後まで残っているのが、本当にお前が守る  
べきモノだからな」

振り返る事なく、ミリイが図ったかのように切り出した。

「その残ったモノの為に人は、行動するんだ。正義とか、道徳だとか、  
裏切りとか、他の全部を犠牲にしてもよお。それだけは切り捨てるん  
じゃあねえぞ？ どれだけ惨めになるうが、それが真実の行動なん  
だ」

「——はい」

「よし。なら、二つ目の方法だ。あのスタンドをブツ倒して、ボロ雑巾  
を回収する」

「え……!?!」

アリアが目を丸くして、顔を上げた。

だが、しかし。

直ぐに半眼となって頬を膨らませる。

「ミ、ミリイさん……!」

「最初に言っただろうがよ、方法は二つだつてな。だが、アイツは元々  
敵だ。助けるには其れなりに覚悟が要る。覚悟が必要な選択をしな  
くっちゃあならないって事だせアリア」

それだけ言うと、ミリイはツカツカと廊下を進み、敵スタンドへと  
近付いて行く。

「アタシが相手をする。実際ブツ倒せるかは分らんが、取り敢えず  
お前等と引き離す。その間に、ルーク。アンタがフランを幽霊の建物  
に運ぶんだ」

確かに、負傷していないミリイは一方的に敵スタンドを攻撃出来る  
ワケだが。

あのスタンド、液化化やその逆に身体を硬質化させたりと、目標を  
仕留める為ならあらゆる手段を使って来る。

きつと、そういった手段を選ばないという本体の暴力的な潜在意識

がエネルギーとなっているのだ。

「——気を付けて下さい、ミリイさん」

「ああ」

「それと……ありがとうございます」

恭しく頭を下げたアリアの台詞に、ミリイは足を止めた。

いつもそうだ、アリアは。

どれだけ憎まれ口を叩いても、脅しても。

ちゃんと此方の意図を分かったように、最後にはありがとうございますを言うてくる。

「そう言うのは、終わってから言うもんだ。死亡フラグみたいになるだろうが」

言い残し、ミリイは駆け出した。

スタンド自体の射程距離は敵スタンドが圧倒的に上回る。

あのアリアを振じ伏せた純粋な破壊力も厄介だ。

加えて、自在に身体を変化させるスタンドの基本特性。

はつきり言つて、真つ正面から闘う相手ではない。

(分かってたんだ、それはな。危険な相手だってハッキリ分かっている。

……だが、近付かなきゃよお)

右拳を握り締め、自らの傍らにスタンドを出現させる。

左側頭部から右足に掛けて歯車の装飾が施されている、藍色の人型スタンド。

出現すると同時にスタンドから白煙が漂い、窓ガラスが曇り始める。

「この化け物をブチのめせねえからな」

敵スタンドの真横から、ミリイが自身のスタンドと共に渾身の力を持って強襲する。

『コバルト・ベルセ』！」

命中した拳は硬質化した敵スタンドの脇腹へと突き刺さり、轟音と共に廊下奥側へと吹っ飛ばした。

『ブラッシュ・リーパー』は二、三度壁や床で跳ねた後、廊下の真ん中へと音を立てて落下する。

ミリイの闘争本能がそのまま形になったかのような、豪拳による強力な殴打。

しかも余りにも素早く、正確に敵スタンドの脇腹を抉っていた。更に殴った箇所は凍り付き、その重さで容易く起き上がれずにいる。

「おいおい……何てパワーのスタンドだ……!?!」

その能力の一端を視界に捉えたルークは、思わず足を止めて驚愕する。

只の右ストレートが、まるでトラックにでも跳ねられたような破壊力だ。

「しかも、何だ？ 凍っているぞ？ アレがミリイのスタンド能力か？」

「ルークさん、急いで下さい！」

幽霊の建物の中から声を飛ばすアリア。

今の一撃で、目測二十メートル圏内から完全に敵スタンドは離れた。

フランを幽霊の建物の中へと入れるには今しか無い。

ルークは一気にフランの所へ駆け寄ると、両足を持って引き摺り始める。

フランが鼻で笑った。

「お人好しだね、君も」

「黙ってる！ ついでに、アリア君に感謝するんだな」

移動するルークの足取りは、遅い。

フランのように体格の良い成人男性ともなれば、アリアを抱えるのとはワケが違う。

真綿と鉛ぐらいの差が有る。

その間にも敵スタンドは此方に向かっているのだろう。

射程圏内の外とはいえ、あとちよっぴりでも進行を許せば巻き添えを食らう危険地帯。

「おい、急げルーク！ 敵スタンドが起き上がるぞ！」

そして、最前線で闘うミリイからも声が上がった。

分かっている。

時間を掛けるだけ危険である事は。

もし今。

自分が巻き添えを食らえば、幽霊の建物は解除され、負傷しているアリアも狙われてしまうだろう。

一気に全滅だ。

「クソ……！」

「この大学の近くにスポーツジムが有るんだ。本気で会員になる事をオススメするよ。体力をつけなくっちゃあな」

「うるせえぞ！ 黙ってろって言ってるだろ！」

何処までもマイペースなフランへと、ルークが激昂する。

ここで心中するつもりは微塵も無い。

アリアだつて危険なのだ。

とはいえ、一人でこの重さは流石に骨が折れる。

アリア工作の為に死体を運ぶ犯人になった気分だ。

「ルークさん……！」

すると、ジツとしていられなくなったアリアが、幽霊の建物の中からスタンドだけを進行させ、フランの足を『シルバー・チャリオッツ』で掴まえた。

ルークと片足ずつ持って、引つ張る。

「射程距離に入りました、手伝います」

「助かった、アリア君！」

「はい。ですが、私の『チャリオッツ』は剣で斬る事を得意とするスタンドです。負傷したこの状態では、パワーで大人一人分の体重を引つ張るのは……少し厳しいようです」

「いいや、これなら行けるぞ。君と俺の二人なら、十分に間に合う」

ルークの言葉通り、フランの身体は順調に引き摺られて行き。

ミリイがもう一撃を浴びせて敵スタンドを吹っ飛ばした頃には、丁度幽霊の建物の入口へと到達する事が出来た。

「ミリイ！ やったぞ！ 君も戻って来るんだ！」

ルークが叫ぶと、ミリイは敵スタンドを一瞥し。

踵を返して走って戻って来た。

これで全員が、安全圏に入った事になる。

「だが、あのスタンドは健在だ。今の内に離れた方が良いな。……ルークは其処のボロ雑巾を頼む。アタシはアリアを担いでくからよお」

「分かった。直ぐに出発しよう」

ルークが賛同する。

だが。

ミリイに背負われた時、アリアはふと、気になった事が有る。

先程フランを引き摺って来た時に、床から幽霊の建物の内部へとべったりと付着している血の跡。

途切れる事無く、廊下から。

この幽霊の建物の内部へと続いているのだ。

フランが入る事を。

ルークが無意識の内に許可したから。

この血もフランの身体の一部だから、中に入る事を許可されている。

もし。

自分の時のように、プツツリ途切れる事無く、血の道が幽霊の建物の内部へと続いていたとするならば。

今度は見失う事無く、スタンド能力での追跡が可能だとするのならば。

絨毯の上を歩くが如く、この幽霊の建物の内部へと侵入出来るかも知れない。

いや、既に。

導いてしまっているとすれば。

その仮説を裏付けるのか。

『ブラッシュ・リーパー』は突如として奇声を上げ、導火線の上に落とされた炎のように血の跡の上を猛スピードで這いずって来た。

「……っ！ ミリイさん！ ルークさん！ 追跡されています！ フランさんの血の跡を辿って、この幽霊の建物の――」

と、丁度入口付近。

凶暴化した『ブラッシュ・リーパー』が、建物内部へと突進して来た。

「マジかよ……!?!」

「く……!」

そこにいたアリアとミリイが体当たりを食らい、壁へと吹っ飛ばされる。

互いにスタンドを出現させて壁への激突は緩和させたが、それでも直ぐに立ち上がれない程のダメージはあつたらしい。

その間に。

敵スタンドは攻撃の手を休める事無く、額から出血したアリアを狙って両の腕を振り下ろした。

「この野郎……!」

透かさずミリイが割って入り、スタンドで『ブラッシュ・リーパー』の両手をガッチリ掴んで受け止めた。

が、徐々に敵スタンドのパワーは上がっていき、ミリイのスタンドが押され始める。

(く……!?! アタシの『コバルト・ベルセ』よりパワーが上かよ。しかも建物の中に入り込まれた。……やるしか。もうここで、このスタンドを叩くしかねえぞ……!)

「……っ! 『チャリオッツ』!」

アリアが、殆ど床に伏せた状態でスタンドを出現させ。

その超高速の刺突による連打を敵スタンドの頭部へと鋭く見舞う。

攻撃自体は鈍い金属音と共に弾かれたが、硬化化した頭部は蜘蛛の巣状にひび割れる。

『コバルト・ベルセ』……!」

と、ミリイがスタンド名を呟けば。

瞬く間に彼女のスタンドが極寒の冷気を纏い、掴んでいる敵スタンドの腕が凍り付いて行く。

その一瞬の硬直時間を見逃す事無く、ミリイは敵の攻撃線上からアリアを連れて脱出し、素早く真横へと移動。



そして、ひび割れた頭部へと、至近距離からスタンドの拳を見舞った。

これが、敵の頭部を完全に捉える。

——かに、見えたが。

「……………?!」

いつの間にか、『ブラッシュ・リーパー』の全身が無数の針に覆われており、『コバルト・ベルセ』の拳が貫かれている。

「う、おおおお!!? 何iiiiiiii!!?」

ミリイの拳にもダメージが跳ね返り、血飛沫が上がった。

今度はその血を追跡し、敵スタンドが襲い掛かって来る。

「ミリイさん!」

「アリア、ルークの所へ行けっ! アタシから離れろ!」

ミリイはスタンドでアリアを蹴飛ばし、ルーク達の方へと吹っ飛ばした。

そして自身はスタンドを前方へと突進させ、拳の弾幕を張りながら敵スタンドを押し返す。

当然、針がスタンドを貫き、ミリイの拳や全身にもダメージが入るが引き下がらない。

「く……………!」

ポタリポタリと、床に血が落ち。

ミリイの服に薔薇が咲いて行く。

「ヤバイ! もの凄くヤバイぞ!」

「ルークさん、私をミリイさんの所へ——」

「来るなって言っただろが!」

助けに入ろうとしたアリアとルークを、ミリイが一喝する。

しかしそれは、決して捨て鉢になろうだとか、犠牲の心から来る台詞ではなかった。

二人に向けて、ミリイは不敵に笑ったのだ。

「これで万事オーケーなんだよ。これで良い。アタシも含めて全員が助かったってワケだ!」

と、敵スタンドが突如として百八十度進行方向を変え、後方の暗闇

を無差別に攻撃した。

かと思えば、今度は右上、左下。

その場でグルグル回りながら、自分の周囲を攻撃し続けている。その間に、ミリイはアリア達の所まで何食わぬ顔で戻って来た。

「ど、どうなっているんだ?」

ルークが啞然とした様子で訊ねる。

するとアリアが、暗闇の一点を指差した。

「ルークさん、アレを見て下さい」

言われた通り、敵が攻撃している箇所をジッと見てみると。

水滴。

いや、血液だ。

ハイスピードカメラで雨を撮影したかのように、水玉となった血液が、落下する事無く、空中に浮かんでいる。

それも、『ブラッシュ・リーパー』を囲う様に、グルリと。

『コバルト・ベルセ』。さっき吹き出したアタシの血の落下を『遅く』した。奴が距離の近い鮮血を自動的に攻撃するというのならば……

! これでもう、アタシ達に辿り着く事は無い」

「……っ!」

「永久に、そこで自動追跡してるんだな」

ミリイはアリアを背負うと、敵スタンドから更に距離を取る。

「ところで、ルーク。お前、ガソリンとか持ってないか? 酒瓶とかでも良いけどよお」

「え? ああ……幽霊の瓶に入れてる酒なら有るが」

「お前、思ったよりも有能だな。アリアが惚れ込むのも分かるぜ」

「ちよっ!?! ミリイさん!?!」

真っ赤になったアリアを横目に、ミリイはルークから酒瓶を受け取る。

そして透かさず、敵スタンドへ向けて放り投げた。

途中から酒瓶の動きはゆっくりになっていき、その中身を敵スタンドへと満遍なく振り掛ける。

「だがしかした。考えてもみれば、あんな怨霊みたいなスタンドを放

置したんじゃあよお。通行の邪魔だよなあ……！」

次の瞬間。

『ブラッシュユ・リーパー』を中心に爆炎が吹き上がり、猛烈な勢いで燃え上がり始めた。

『ヒギヤアアアアアッ!!』

瞬く間に敵スタンドの身体は千切れ飛んで行き、散り散りに霧散する。

「やっぱりなあ。蒸発に弱い。さつきお前の周囲を何度も攻撃して、遅くして貯めといた熱を。今、一気に解除した。酒との相性が良いみたいで、何よりだ」

煌々と燃える炎を見て笑うミリイだったが。

黒炭のようになった敵スタンドが、ミリイの血液に反応したのか、炎の中から勢い良く飛び掛かって来た。

「ったくよお。——アタシの道を、塞いでんじゃあねえぞ。邪魔くせえ——！」

ミリイから飛び出した『コバルト・ベルセ』が、カウンターで豪拳による連打を敵の全身へと叩つ込む。

『邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔!!』

余りに速く、何より鋭く。

一撃一撃が驚異的な破壊力を宿した、超高速の連打撃。

『邪魔あああああッ!!』

トドメの一発は敵スタンドを跳ね飛ばし、再び炎の中へとダイブさせる。

断末魔の悲鳴を上げて、『ブラッシュユ・リーパー』は夜闇の中へと溶けるように蒸発していった。

「これでアタシの真つ正面に、文字通りに血路が開けたってワケだ。良かった良かった」



そして、同時刻

マンションの一室。

ソファアールで寝ていた男が目を覚まし、テーブルの上に置いておいた人形を手に取りろうと腕を動かした。

が、動かない。

顔を持ち上げてみれば、自分の身体がソファアールに寝たままロープでグルグル巻きになっている。

「はい！ そうなんです！ 助けに来て下さい！」

横を見ると、壁に立っていた女達が居ない。

いや、この部屋の電話を使って助けなんて呼んでいる。

「これは……夢か？ 何で動いて——」

反対側を向いた男の顔面へ、フライパンが叩き付けられた。

「がふ……!?!」

「ちよつと来て！ コイツ目を覚ましてるわ！」

別の女性だった。

直ぐに男は武器を持った彼女達に包囲される。

そして気が付く。

自分のスタンド能力が、解除されていると。

「まさか……!?! く、食らったのか……!?! 俺の『ブラッシュュリ——』ばが!?!」

今度は分厚い本で殴られた。

「何言ってるのよこの誘拐犯が！」

「テメエを警察に突き出してやるからな！」

そのまま。

男はスタンド能力から解除された彼女達からタコ殴りにされる。  
「いぎやあああ!?! い、痛い痛いよおお!」

スタンド名『ブラツシユ・リーパー』

本体 マーミ

全治四ヶ月の怪我を負い再起不能。

その後、誘拐された彼女達は無事に警察に救出される。



## 命令②

「——ええ、はい。解決しましたよ」

泊まっているホテルの部屋の中で、ルークはベッドに腰掛けながら電話を掛けている。

テーブルの上には空になったカップラーメンの容器が幾つも置かれ、その隣には起動したままのノートパソコンがある。

パソコンの時刻は午前十一時を表示していた。

『アリアが、それ程に優れたスタンド使いだったとはな。使用人の彼女達も良くやってくれた、といった所か』

「二応、倒した奴等の裏は全部洗いましたよ。これといった成果は有りませんでした。奴等が街に入る人間を監視していた事は間違い無いです」

『つまりは、これでようやく。スピードワゴン財団での本格的な調査が出来るという事だ。早い方が良いだろう。——ところで、これで事件は解決したのだろうか。アリアも、例の話は考えてくれただろうか?』

電話口の男性が、少し不安げな声色を覗かせる。

ルークは一旦、電話を右手から左手に持ち替え、耳に当て直した。それから一呼吸の間を置いてから答える。

「あの……代表。その事、なんです。本当に、俺の個人的な願望です。彼女に……アリアに、もう少しだけ時間を与えてくれませんか?」

男性が、息を飲むのが聞こえた。

「俺なんか、その……言うべき事では。判断する事では、ないかも知れませんが。今直ぐにこの街を離れる事が、本当に彼女の幸せに繋がるのでしょうか?」

『……』

「彼女は確かに、肉親が発見した矢が引き起こした事件に対して、罪の意識を感じていました。それは事実です。そして代表が、彼女の心も守る為に街から遠ざけたい気持ちも分かります。……でも、アリアが事件を解決するのは、それだけの理由じゃあないんです」

ルークの言葉に自然と熱が入る。

実際に彼女を見て。

彼女について知った事を、伝えておきたかったから。

「アリアはきつと。自分を助けてくれた人達が住むこの街が。純粋に好きで、守りたいんだと思います。だから——」

『アリアの滞在を、少しの間許可しろと?』

「はい。彼女は強い人間です。困難を自分で乗り越える覚悟と、他人の為に行動出来る優しさを持っています」

『……ふむ』

どれだけ伝わって、そして理解してくれるだろうか。

不安からルークは頭の後ろを掻き、電話の男の言葉を待った。

返答までの数秒にも満たない時間を、随分長く感じて。

『——今回の件、やはり君に任せて正解だったよルーク。彼女とは、良い関係を築けたようだな』

意外な一言だった。

『実際に彼女に会った君が、そう思うのなら。きつと正しい判断なのだろう。彼女にとっての幸せが何であるかは、側に立たないと分からないモノだ』

「代表……」

『君の言う通り、アリアにはもう暫く時間を与えよう。彼女が困っていたり、敵と闘う事になった時は、君が力を貸してやればいい。街へは財団の職員を何人か派遣はするが、アリアの事は基本君に任せようと思う。これからも、彼女を頼むぞ?』

「分かりました。……そして、ありがとうございます代表」

丁寧な電話を切り、テーブルに携帯電話を置くと、ルークは深く長く安堵の溜め息を吐いた。

やった事に後悔はなかったが、緊張はするものである。何はともあれ、これで色々な事が一段落着いた。

ゴミ箱の中に無造作に突っ込まれている新聞の束には、動物病院が盗みに入られた事件だとか大通りの交通事故の記事を角に押しやって、失踪事件が解決したという記事が一面で掲載している。

テレビも連日報道しているし、救出された彼女達は今や時の人だった。

誘拐犯を全員で殴り倒した、等というエピソードは着色され、後々映画化するかも知れない勢いである。

アリアは、その殴り倒された男が『ブラッシュ・リーパー』の本体だろうと言っていた。

自動追跡型のスタンドは本体へのダメージバックが殆ど無く、無敵に振る舞える半面。

本体が無防備状態である事が多く、接近戦には滅法弱いらしい。

自分のスタンドが倒された事に気が付かないまま、能力から解放された彼女達にやられたのではないかと、少し嬉しそうに語っていた。

これで残りの問題は。

フランのパソコンの幽霊。

その中身を確認する事だけである。

もしかすると、報道されていない失踪者がいるかも知れないからだ。

「しかし、このパスワードがな……」

幽霊のスタンド能力で手に入れた物体は、基本的に壊れる前の状態のパフォーマンスしか発揮出来ない。

パソコンのデータもスペックもパスワードもそのままなのだ。

なので、ルークは財団の自分の部屋に解読ソフトの幽霊を大量にストックしている。

普段はそれを使って作業をしているのだが、生憎と今手持ちは無い。

本人に聞くのが一番だが、素直に教えるとは到底思えない。



頼みの綱のアリアは、機械類が超苦手判定だ。適当に昼を食べて、地道にやるしかないかと、少々疲労感が滲む顔付きで、ルークは立ち上がった。その時である。

丁度、机の上の携帯電話が鳴った。

手に取ってみると、レンからだ。

「もしもし？ レンか？ どうした？ また事件か何かあったのか？」

『はい、至急ルーク様のお力を御借りしたい案件が御座います。火急の要件ですので、お屋敷まで来て頂きたいのですが』

「!? 分かった！ 直ぐに行くー！」

ルークは上着を羽織ると、部屋を飛び出して行った。

その振動で、ベッドの上に置いてあった新聞がずり落ち、失踪事件の記事の下に小さく書かれていた記事が露になった。

『猟奇殺人。犯人は未だに不明』



「……それで？ 要件とは？」

若干嫌な予感がしつつも、ルークはテーブルの反対側にいるアリアに訊ねた。

確かにレンは事件だとは一言も言っていないが、まさかである。

「え、えっと、ですね……」

アリアは目を泳がせながら言葉を濁した。

態度も少し落ち着きが無い。

何故なら。

テーブルにはパンやビーフシチュー、パスタ、スープ、色鮮やかに飾り付けされたサラダ等の料理がプレートスマットの上に並んでいて。

中央には然り気無く花瓶に純白の花などが差してある。

もうコレ完全に急ぎの要件じゃあないだろう、食事に誘われただけだろう、頼むから普通に言ってくれ。

と、心の中で懇願してみたり。

屋敷に着いた時、ミリイが「よお、早かったな」と言って悠長に扉を開けてくれた時からそれは薄々感じていたが。

まあ、彼女は元氣そうで何よりだ。

あの大学での戦闘から、もう十日が経つ。

結局、大学の入口付近でレンとフェンネルを待ち、『ハーティ・レグナ』で治療をした後、フェンネルに病院まで運んで貰った。

傷は直したが、アリアとミリイは頭を打っている事もあり、念の為だ。

フランの治療は程々に留めておき、スピードワゴン財団が到着するまでの間入院して貰った。

アリアとミリイに特に異常が見られない事が分かり、その日は解散となったのだが。

考えてもみれば、あれからホテルに缶詰め状態でアリア達には会っていなかった。

連絡を貰わなければ、今日からパスワードと格闘していただろう。もしかすると、アリア達に気を遣わせたのかも知れない。

「ルーク様。要件の方は、食事の後で伝えますので」

いや結局、有るのか。  
要件。

「私が思うにルーク様は。ホテルではインスタント食品で食事を済ませているかと」

「まあ、そうだよ。こういう食事は久しぶりだ」

呼び出されて未だに要件を伝えられない事には難色を示したルークだったが、漂う香りに自然と笑顔になる。

配られたスプーンを手に持ち、早速手前のビーフシチューを掬い、

ルークが口元に運ぼうとすると。

その場に居る全員の視線が、自分に注がれている事に気が付いた。口を開いたまま、固まるルーク。

「え……つと？　もしかして、何かマナー違反とか。知らない間にやってる、俺？　それとも食べる順番とか有るの？　ベジタブルファースト的な」

訊ねると、今度は全員が同時にそっぽを向いた。しかし、横目では見ている。

正面のエリアはハンカチで顔を隠しながらチラチラ見ている。

非常に食べにくい状況だが、流石に空腹なので見なかつた事にして食べた。

と。

「ん!?　美味っ!?!」

一口食べて分かった。

カップ麺とは違う、味が層になったかの様な奥深さ。

自分のように素人の舌でも手間暇掛けて調理されている事がハッキリと理解出来る。

少々はしたないが仕方ない、ガツガツと他の料理も食べていく。

折角昼食に招待されたんだ、食べないとエリア達に悪いだろう。

そんな理由を楯にどんどん食べ進め、あつという間に完食してしまった。

レンが水をくれたので、それで一息入れる。

「いかがでしたか、ルーク様?」

「美味かったよ、良い物食べさせて貰った。一見高級そうなんだけど、食べてみると結構家庭的というか。勿論、良い意味で」

「……だ、そうだ。良かったなあエリア?」

ミリイがいやらしい顔付きでエリアの頭をポンポン叩いて皿を片付け始める。

みるみる内にエリアの顔が赤くなった。

「えっ?」

唾然としたルークの肩をフェンネルが突っついてきて、携帯電話で

撮影した動画を見せてきた。

アリアが、バリアフリー完備の調理場で野菜を切りまくっている。その後、その野菜を皿の上で組み上げていき、鳳凰を作った。

アリアは満足した様子でそれを見ているが、隣で見ていたレンが「派手過ぎます。誰の結婚式ですか？ もっと家庭的な方が親しみ易いかと。あと、ドレッシングの味付けはもう少しだけ塩味を利かせて下さい。その方がルーク様の好みに合うでしょう」等とアドバイスしている。

アリアが「分かりました」と快諾して物凄い速さで材料を調理し始めた所で動画は終わった。

「……。凄いな、君は。その……。料理まで作れるのか。ホント美味かったよ」

ルークが頬を掻きながらアリアの方を見て称賛すると、アリアはハシカチを広げて何故か頭から被った。

「プロ並みの腕だからな」と、ミリイが雑に食器をワゴンに置きながら答える。

「ちなみに、で御座いますがルーク様」

食後の紅茶を用意したレンが、アリアへと注がれるルークの視線を遮った。

そのお陰で、アリアはある意味で命拾いをする。

「そのプレースマットは全てアリア様の手縫いです」

「え!?!」

「その花も、アリア様が庭で一本一本育てたモノを花瓶に差し入れています」

「何!?!」

「更に……。パンに至っては使用する小麦から厳選され。一次、二次発酵の時間を自ら調整し、焼き上がりまでの全ての工程をお一人で遂行されています。……。私が何を言いたいのか、と申しますと」

レンはルークの顔を覗き込むようにして顔を近付け、耳元で吐息と共にコツソリと言うのだ。

「——ハイスペック。容姿、頭脳、性格、趣味。一等地に建つ庭付きの

一戸建てが最安値で売られているようなモノです。是非とも、ご検討の程を」

「ちょ、ちよつと良いか!？」

露骨なやり方に耐えきれなくなったルークは椅子から立ち上がると、レンの手を引つ張つて部屋の入口に早足で近付いて行く。

勿論、会話の内容なんて聞こえていないアリアとミリイは揃って目を丸くした。

「ト、トイレの位置を教えてください!」

「承りました。この部屋から出て、左手の——」

「分からないから、付いて来てくれ!」

半ば強引に、ルークはレンを連れて退出する。

二人が退出した後、ミリイがアリアの肩にポンと手を置いた。

「——横取りされたな」

透かさず、フェンネルが銀のトレイでミリイの頭を叩いた。

レンを伴って退出したルークだったが、勿論トイレに向かう事無く。

適当に階段下のスペースに連れ込んだ。

そして、話題の転換を図るように、午前中のスピードワゴン財団代表との会話の内容を彼女へと聞かせた。

多分、屋敷の人間の中で一番アリアの身の振り方を親身に考えているのがレンだから。

此方の一言でアリアの滞在を許可させてしまった事を伝えておく必要が有るワケで。

「——成る程。ではもう暫く、アリア様は街に滞在する、という事ですね」

「ああ……」

「? ルーク様?」

レンがルークの顔色を見て首を傾げる。

他人に復唱されると、途端に頭痛がしてきた。

それが顔に出ていたらしい。

考えてもみれば、出会って間もない少女の為に代表の判断を覆した事になっているのだ。

後悔は最初に来ないのが世の中の決まり事だが、もう少し上手くやるべきだったと今更思う。

「——ルーク様の判断は、正しいと私は思いますが？」

「え。き、君のスタンドは心まで読めるのか……!?!」

「いえ。しかしながら貴方様の場合、表情に滲み出ますから。アリア様をこの街に留めた事を、後悔しているのでは有りませんか？」

何だ、表情に滲み出るって。

そんなに自分は分かりやすいのか、とルークはショックを受ける。しかし。

ひよつとして高校の頃、友人達にポーカーで散々巻き上げられた原因は、コレなのだろうか。

向きになって限定モデルのシューズなんて賭けた過去の自分は、所詮若かったのだろう。

「過去に失ったモノを悔やんでも仕方有りません。前を向いて行きましょう、ルーク様」

「いや、おい！　今のは怖いぞ！　本当は読めるんじゃないのか、心……!?!」

「ですから、読めません。先程申し上げた通り、貴方様は少々分かり易いのです。将来的には妻にマウントを取られると思われまますので、どうぞ御注意を」

「一体何の心配だ……!?!」

淡々と言葉を紡ぐレンの目は、それでも何か期待を寄せているかのような凄みと迫力がある。

ルークは一步、後退して咳払いした。

「は、話を戻すが。とにかくアリア君は暫く街に留まる事になる。彼女に危険が及んだ時は、また君達の力を貸して欲しい。それだけ、改めて伝えておくよ」

「……はい、承りましたルーク様」

「うん。そろそろ食堂に戻ろうか。アリア君も、君が居ないと心細い筈だ」

「……っ」

もう二十分程席を離れているので、アリアも不安がる頃だろう。

ルークは来た廊下を食堂へと戻って行く。

「……あの、ルーク様」

呼び止められ、振り返ると。

さっきの位置から移動していないレンの姿が映る。

幾分か表情が暗い。

「有り得るので、しょうか?」

「……? 何の話だ?」

「アリア様が、私という存在が居ないだけで心細くなる、という事がです。先程、ルーク様がそう仰られていたのです」

確かに言ったが、軽い冗談みたいなノリでだ。

それを、まさか本気で気にしていたのか。

ルークの想像以上に、レンはアリアとの関係性に過敏であるらしかった。

レンは俯き、エプロンの前に組んだ両手をモジモジと弄っている。

普段、余り感情を表に出さないタイプの彼女がそんな事を言うのは珍しい。

アリアがもう暫くこの街に居る。

それは、レンが『命令』と呼称する今の生活が続いていく事を意味しているのだが。

彼女はそれを嬉しいと思う一方で、不安な表情をも覗かせている気がしてならない。

「——ああ、有り得ると思うぞ?」

ルークが一呼吸の内に答えると、やはりレンは戸惑った表情を見せた。

「おいおいおいおい、俺は適当に言っているんじゃないぞ。主が使用人に対してそう思うのは、至極当然の事だろ? それは君が仕事で勝ち得た『信頼』ってヤツなんだからな。君は仕事が出来るとタイプだ

し、アリアは特に身の回りの事に手助けが必要な身体だ。君が近くにいないと仕事を頼めない、だから不安になる。そうだろうか？」  
「っ！ あ……はい。不躰な質問をしてしまい、大変申し訳有りませんでした」

深々と頭を下げて謝罪した後、通常運転に戻ったのか。

ルークの一步先を歩く格好で食堂へと戻って行く。

華奢な彼女の背を見て、ルークは少しだけ長く息を吐いた。

きつとレンは。

自分が側に居続けても良いのか、その常に有る心底の罪悪感と。

財団からの『命令』との間で板挟みになっている。

本来なら、彼女の任期はあと数ヶ月で終わる筈であった。

財団はアリアを本部へと本腰を入れて連れて行く計画だったからだ。

本来訪れなかった共同生活の延長が、『命令』の効力を薄れさせているのだろうか。

(この数日。一応、アリア達の事も調べてみたが。——未だに信じられないな)

レンの生い立ちを見たあの日、特に驚いた覚えがある。

常に従順かつ誠実なレン。

そのイメージを覆すような、少しショッキングな事実。

(彼女が——自分の両親と姉を、殺害しているなんて)



「お、戻って来たか」

「ミリイが席から立ち上がった。」

雑だが、食器を片付け終えていたミリイは、フェンネルと共にアリ



アの相手をしていたようだ。

「遅くなつてしまい、失礼を致しましたアリア様」

取り敢えずは、いつも通り。

先程の会話は自分から伝えるべきではないと、判断したようだ。

「いえ、レンさん。もしかして、あの事を話していたんですか？」

「私からは、例の要件の方は御伝えしていません。失念しております」

「ああ、そういえば。何か俺に用があつたんだつたな君達」

ルークがそう言う。

ミリイは颯爽と食器を乗せたワゴンの元へと向かい、自主的に片付けを始めた。

直ぐにレンが指摘する。

「ミリイ？ 何をやっているんですか？」

「見て分かんない？ 後片付けだよ。これ洗うのにスゲー時間掛かるだろうな〜。油污れは洗うの早い方が良いよな〜」

「——それなら、私がやっておくので。貴女は買い出しをお願いします。それが嫌だから自主的に食器洗いを選択してんだろ〜が！」

ミリイは脇からビシツと人差し指を伸ばしてルークを指差す。

「携帯電話買っただけなら、ルーク一人で十分だろ！ 嫌だぜアタシはよお〜！」

「ん？ 携帯電話？」

財団では情報処理を仕事でこなしているルーク。

状況把握能力は自然と養われていたらしい。

今のミリイの一言で、全てを理解してしまった。

「——つまり、だ。要件っていうのはつまり。アリア君が携帯電話を買いに行くから、それに同行して欲しい。そういう事か？」

「は、はい。駄目……でしょうか、ルークさん」

車椅子に座る彼女は、自然と上目遣いだ。

成る程。

ミリイが嫌がるのも、自分に声が掛かった理由も分かった気がする。

る。

あの機械オンチのエリアが携帯電話を買いに行く段階で、既に面倒臭い。

人には必ず得意、不得意な分野が有るのだが、エリアの場合は極端過ぎる。

「――その。怒らないで聞いてくれないか？」

「はい、勿論です」

「君にはきつと、この先も。絶対とは言い切れないが、ホント……必要無いんじゃないか？　そういうの、有る……だろ？」

歯切れが悪くなったが、結構勇敢に指摘したルーク。

しかし前置きに反して、エリアは頬を膨らませる。

「レンさんにも、同じ事を言われました」

「あ……」

「もお、皆さん揃って酷いです！　私を機械オンチみたいに。一応、私もパソコンの勉強していますからね。最近、ハムスターの使い方もちゃんと覚えました！」

何というか。

エリア、相当な負けず嫌いだ。

これは断る方が後々厄介な気がする。

ルークは覚悟を決めた。

「――分かった。俺も同行するよ。あと、ハムスターじゃなくてマウスだ」



『グリーン・チップス・ベルト』



「支障？ ああ、そんなモノとつくに出ているさ」

倉庫の一角に築かれた死体の山。

足元に無造作に転がるのは、干からびた女性の死体である。

男は棺の上に寝転がりながら、今まさに『食事中』の男へと言葉を返した。

「街に送り込んだスタンド使い達。奇妙だが『材料』担当のチームが揃って全滅した。スピードワゴン財団の人間は、街での調査を再開しているようだ」

男は、天井にポツカリと開いた穴から燦々と降り注ぐ太陽の光へと手を伸ばし、空を仰いだ。

『食事中』の男は突き刺していた指先を死体から引き抜き、次の死体へと突き立てる。

太陽の光の中で血の飛沫が舞い、赤黒く男の身体を彩った。

「太陽を克服出来た事には感謝してはいるし、こうして死体からの吸血からでも腹を満たす事が出来る。感謝しているさ、貴方には……クルクス。しかしだが——」

棺の上で男は上半身を起こし、黙々と吸血を続ける男……クルクスを見下ろす。

その表情からは僅かな憤りを感じた。

「これが！ 今のこの、こここそと隠れ住み、『食料』の供給を待つ今の生活が！ 本当に、進化した存在である筈の我々の『今』なのだろうか!？」

その言葉に。

クルクスはピクリと反応し、首だけ振り返った。

首筋には、星型の痣が見える。

「貴方の言う進化の更なる先。矢がもたらす生物の未来に、到達出来たとして！『今』の屈辱的な生活を根本から払拭出来るだろうか！生涯付いて回るかも知れない、弱みだ！我々は自由に、好き勝手に、人間共を支配するべきではないのか!?我々に必要な、私が望む『今』はそれだ！」

「随分と……エイベル。君は不安を感じてしまっているな  
パツと。」

クルクスの姿が目の前から消えて。

直後。

背後から頬を撫でられた。

「本当にすまない」

「……っ!?!」

エイベルの心臓が鈍く縮む。

今のはスタンドだ。

何の能力かは分からないが、瞬き程の一瞬で。  
有り得ない。

姿が見えなくても、自分が命を掴まれている事は分かる。

「だが、理解して欲しい。君の望む『今』と、我々の置かれた『今』を。少し立ち止まって、冷静に考えてみてはくれないか？」

エイベルは喉を鳴らした。

彼は。

頂点に立つには控え目な性格をしていて。

相応しく無いと考えている同志も少なくはない。

正直自分もそう思うし、彼自身も認めている事だ。

しかし、それでも彼以外の同志が頂点に立つ姿は想像が出来ない。

「立ち止まる事。これは、人への『愛』故の行動なのだ」

クルクスはエイベルの頬からゆっくりと手を離すと、そのまま彼の横を通り過ぎて死体の山を見下ろす。

「『愛』が無ければ、理解は出来ない。しようとも思わない。理解出来なければ、そこに安定した支配は築けない」

「……っ」

「人は家畜を安定した支配を基に管理する。その生態を正しく理解し、最も効率の良い殺し方を選択している。家畜自身にも、己の死を悟らせず。抵抗すらない」

再び、クルクスの姿が消える。

彼は先程の『食べかけ』の前に姿を見せ、同じように指先を突き立てた。

「殺して食べる。その結末に到達するまでに注ぐべき、『愛』を理解している。我々の『食料』の場合、それは少しばかり複雑だ。奴等は考え、行動し、時として驚異的な力を見せつけるからな」

これだ。

エイベルは確信した。

冷酷とも、残酷とも違う異質な恐怖。

人の上に君臨する存在である事を自らが理解していながら、それを突き放すかのように徹底した静の態度。

「抵抗を受けるのならば、獲物を追い回している時代と大差が無い。奴等が自らの意思で己の身を差し出す。それが真の支配というモノだ。静かで、無駄な争いは起きないモノだ。恐怖はいずれ克服されてしまうが、この支配にはそれが無い。完成された支配には、エイベル。君の唱える『今』を払拭するだけの安定と平穏が有るだろう」

「——はい」

この静けさが不気味なのだ。

そして矛盾するようだが、同時に惹き付けられるのだ。

この男の力になる事。

その目的の為ならば、いくらでも力を貸そう。

「しかし、クルクス。『材料』担当チームが全滅した件については、探りを入れさせて貰う。我々の同志であるスタンド使いを何人か送り込む。貴方の言う理解の為だ」

「……分かった。しかし、くれぐれもだ。出来る限り、戦闘はするな。探りを入れるだけだ」

「——伝えておきますよ」

その命令は守れそうも無い。

ここは、相手を始末しておくべきだ。

相手もスタンド使いであるならば、尚更。

後々、驚異的な力を見せ付ける事が無いように。

貴方が言った事だ。

実は目星は付いている。

最近この街に入ったスピードワゴン財団の、ルークとかいう男。

あの男が街に入った日から事態が急展している。

そして、その周辺の人間。

どの程度、関与したかは知った事ではない。

少なくとも影響を与えた事は確かだ。

エイベルは、覚悟を決めていた。

それもまた、クルクスへの『愛』故にである。



「それでは、留守をお願いしますね。ミリイ」

レンはそう言って、助手席に乗り込んだ。

運転席にフエンネル。

その後ろにルーク、隣にアリアが乗っている。

「お、おい！ アタシ一人に後片付け押し付ける気か!？」

屋敷の入口でミリイは顔を青くした。

すると、パワーウインドウのスイッチを入れて窓を開け、乗り込んだままレンが答える。

「他の仕事は私がやっておきましたので」

「んなこたあ分かってるんだよ！ アリアとルークが車に乗っている

のは必然だから文句は無いぜ。フェンネルが運転席にいるのも分かる、運転手がいなけりや車は動かねえからよお」

「そうですね。私は運転出来ないのです、消去法でフェンネルが運転します」

「いや、おい！ なら何でお前まで乗ってんだ!? 送迎と買い出しならフェンネル一人で十分だろ!? おかしいだろ！」

食器洗いが何よりもダルいミリイは、何とかレンに残って欲しい為、食い下がる。

屋敷には何故か食器洗浄器が無いのである。

「——ええ、勿論。買い出しはフェンネルに任せるつもりです。私は……最新式の食器洗浄器を買いに行きますから。恐らく、納品は明日になるでしょう」

「……っ!? あ……そう、なのか……」

食器洗浄器が欲しい。

ミリイが毎日のように唱え続けた言葉である。

しかし、自分では屋敷のキッチンに合った物を買うに行くのは面倒臭い。

長さや高さを図ったり、店に行つて機能を確認したりがやたら面倒臭い。

今回、片付けを我慢してやれば、次回から楽が出来る。

「——クソッ！ 今回だけだからな！ アタシの好きなチーズ味のスナック忘れんなよ。フェンネルのヤツが、さっき二袋も開けてバリバリ食べやがったからよお」

ミリイは絵に描いたような地団駄を踏み、屋敷の中に引き返していった。

レンは、直情タイプのミリイを手懐ける術を完全に心得ているのだ。

元々アリアの使用人になる事に難色を示していたミリイを、レンは言葉巧みに操り、時には物で釣り。

器用に屋敷で働かせている。

「フェンネル、出して下さい」

窓を閉め、平然とした表情で告げるレン。

フェンネルは指先で敬礼ポーズを取ると、アクセルをゆつくりと開けて発進した。

後部座席のエリアとルークは、時折雑談等している。

エリアの車椅子は畳んでトランクに積んであるので、彼女は寄り掛かる格好で乗っていた。

何なら、ルークに少し寄り掛かってすらいる。

その様子をバックミラー越しに眺めながら、レンは少しだけ頬を喜ばせた。

最近、エリアは以前にも増して活力が漲っている。

病院での定期検査でも驚かれた程であった。

多分、ルークと出会った事で、彼女の中で良い変化が起きている。

心の働きは肉体と、極めて強く結び付いているモノだ。

これならば。

この先の未来に自分が居なくとも、エリアは大丈夫だろう。

(早く、離れてしまった方が良いかも知れない……)

エリアの変化に引き摺られて、近頃レンはそんな事ばかり考えてしまっていた。

本当は、本来は。

此処は自分には眩しい世界だ。

(でも、もう少しだけ。貴女の喜ぶ顔を見たいと思うのは……傲慢かしら……)

ボンヤリしながら、窓側に身体を傾ける。

暫く走り続け。

街へと続く、山と森に囲まれた長い下り坂を車は進んで行く。

綺麗に整備された海沿いの道だ。

本当に。

あと何度、この景色を眺める事が出来るだろうか。

勾配が少しキツくなり、曲がり角に差し掛かった事もあって、フェンネルはギアを落とした。

日本育ちのレンにとっては、未だに左側ハンドルというモノは馴染



めない点である。

丁度、自分の右手側に海を望む事が出来る為、レンはまたボンヤリと海を眺める。

と、その時。

突然車がスピードを上げて、海側。

つまりは崖に近付いた。

「……っ!？」

ギリギリの所でガードレールには接触しなかったが、レンは額を窓にブツけてしまう。

まあ、自分は運転が出来ないので、ハンドル操作を誤った事への責任を追及するつもりは無いのだが。

「フェ、フェンネル、気を付けて下さい」

今のは心臓に悪い。

額を擦りながら横を見ると、フェンネルが唇を動かしている。

両手が塞がる運転中は、彼女はこうやって会話するのだ。

勿論、レンは読唇術も心得ていた。

『ゴメンゴメ〜ン。何かハンドル取られてさ。道路に枝でも落ちてたかなあ〜? お嬢とルークは大丈夫?』

そう言ったので、レンが後部座席を覗くと。

ルークが、アリアの身体をギュツと自らの胸に抱き寄せていた。

アリアは顔を赤らめ、満更でも無い様子である。

「——大丈夫です」

『おお、そりゃあ良かったぜい』

正直、止めるべきか悩んだが。

ルークは誠実な付き合い方をする人間だ。

きつと、アリアを心配しての行動だろう。

そう納得させてレンは前を向いた。

すると不意に、走行中の車の目の前を鳥の群れが海側へと横切った。

幸い、接触しなかったが。

珍しい事も有るものだ。

レンが何となく、鳥の群れの行方を目で追うと、全羽が。海へ向かって急降下して行き、そのまま海中に沈んだ。

「え……？」

鳥の生態には詳しくないが、今は森に巣を作っている普通の山鳥である。

海鳥とは餌も異なるだろう。

しかも上がって来る様子も無い。

鳥が集団自殺を凶ったのだろうか。

「ア、アリア様……今」

思わず、アリアの方を振り返るレンだったが。

何とルークはシートベルトをした状態でアリアを海側へと押し倒し、覆い被さっていた。

「え、ちよ、ちよつと、ルークさん……駄目ですよ……んっ。そ、それ完全に、あつ、手が……掴んで……」

取り込み中のようなので、レンは前を向いた。

大胆不敵。

この状況でアリアを襲うとは誤算である。

さて、流石に止めるべきだろう。

しかし、何と言って。

車が海を正面に望む直線に入る、その先は右への長いカーブだ。

と、前方に一台、フラフラと走る車があった。

酔っぱらい運転だろうか。

レンが眉をひそめると、前方の車は突然スピードを上げ、ガードレールに衝突。

突き破って、そのまま車は海に落下した。

「……っ！ フェンネル、車を停めて下さい！」

幸い、運転手は投げ出され。

落下を免れたようだったが。

フラフラと起き上がった男性の身体は、奇妙だ。

手や足から、ウネウネと動く細長い物体が無数に生えている。

男性は、壊れたガードレールの隙間から崖へと移動し。

海に向かって、身を投げた。

「な……じ、自殺を!」

途端に、今度はレン達の乗る車のスピードが上がった。

さっきの壊れたガードレールに向かって、一直線にスピードを上げて行く。

「フェンネル、何を!」

隣を見ると、フェンネルの両足と両腕から。

先程の男性と同じようなウネウネと動く物体が生えている。

しかも、次々と増えて行く。

『マズイ、レンちゃん。アクセルから足が……離れない。どんどん加速して行く……!』

と、後部座席のドアが開く。

見れば、ルークがアリアを乗り越える格好で、アリア側のドアを開けているのだ。

しかも、グイグイとアリアを押しながら、開いたドアへと近付いて行く。

ルークの手や足、腕や背中にも、あの細長い物体が生えてきている。

「く……くそ……! アリア君、不可抗力だ。さっきから、身体が勝手に……動く!」

遂には、仰向けのままアリアの頭が開いたドアから外へと出てしまう。

「フェンネル、早く! 早く車を止めて下さい!」

『だ、駄目だ出来ない。足がアクセルから離せ……ない』

車のスピードは時速80キロに到達する。

「……っ、アリア様!」

「分かっています! スタンドです! 攻撃されている!」

アリアは『シルバー・チャリオッツ』を出現させ、車体に掴まった。ルークの身体は自分を押し倒して、ジリジリと外へと押し出して来る。

自分は起き上がる事が出来ない上に、車は猛スピードで走り続けて崖へと向かっている、この状況。

「ルークさんの身体から生えている、この物体……！ 本で見た『タイワンアリタケ』という冬虫夏草の一種に似ています！ この真菌に寄生されたアリは身体を乗っ取られ、最も菌糸が発育し易い環境下で絶命させられるそうです。恐らく、このスタンドも何か、真菌の好む条件下に……ルークさん達を、誘っている筈です……！」

仰け反ったアリアの頭部が、アスファルトへと近付いて行く。

落下すれば、命は無いだらう。

レンはシートベルトを外し、後部座席へと向かった。

だが、レンの右足にも小さな冬虫夏草が出現し、上手く移動出来ない。

「く……い……アリア様……！」

レンはルークの身体を引っ張りながら、アリアへと手を伸ばす。

その間に、車は時速100キロに到達。

壊れたガードレールへと向かった。

レンの左手が、辛うじてアリアの右手を掴まえる。

車は、壊れたガードレールの隙間へと突っ込んだ。

その、瞬間。

『『ハーティ・レグナ』ッ！』

レンのスタンドが僅かに速く、ガードレールへと拳を叩っ込む。

『押羅押羅押羅押羅押羅押羅押羅ッ！』

ガードレールは即座にグニヤリグニヤリとその形と質量を変化させ、滑らかな弧を描く形となった。

車はそのガードレールに沿って、車体から火花を出しながら曲がって行く。

接触した反動でアリアは車内へと戻り、またドアも閉まった。

「脱出します。アリア様……！」

「……っ！ 『チャリオッツ』！」

アリアのスタンドは即座に車の天井部分を四角形に切り取り、大穴を開ける。

アリアがルーク、レンがフェネルの身体をそれぞれ掴んだ。

『『ハーティ・レグナ』ッ！』

レンが自らの座席シートに手を掛けると、シートが内側からみるみる膨らんでいき。

爆発。

スポンジ状の物体が一気に吹き出した。

その反動に乗ってスタンドで車内を蹴り付け、アリアとレンは天井の穴から外へと飛び出す。

そして落下の瞬間に各々スタンドを出現させ、身を守る。

「く……い！」

アリアはルークと共に、レンはフェンネルと共にアスファルトを転がり。

傷だらけになりながらも、何とか脱出に成功する。

車は猛スピードを維持したままガードレールへと乗り上げ、そのまま崖下へと落下して行った。

「レンさん……大丈夫ですか？」

「はい、何とか。フェンネルも……無事です」

互いに身体を起こすアリアとレン。

途端に、ルークとフェンネルの身体から生えている冬虫夏草が一気に活発になり。

急激にその数を増やし始めた。

「うう……い！」

ルークの身体からは菌糸が出現し始めている。

アリアはスタンドで冬虫夏草を斬り払ったが、焼け石に水であった。

直ぐに新しいモノがウネウネと生えてくる。

次第に、アリアと。

レンの身体からも、数はまだ少ないが生えてきた。

「……っ、ルークさん！ しっかりして下さい！」

そのアリアの悲痛な叫びを受けたから、なのか。

森の中から、枝葉を踏む音が聞こえた。

「ふう〜くん、その男がルーク？ 厄介な能力を持っているっていう、噂の？ 車から脱出出来たのは、アンタ達二人のスタンド能力のよう

「……っ！」

「……っ！」

「……っ！」

「……っ！」

「追跡して、先回りしてたの。私。アンタ達を確実に、まとめて始末出来るこの場所で。直ぐにさよならバイバイだけど、一応自己紹介でもしとくう？」

「……っ！」

女は、自らの隣に緑色の人型スタンドを出現させる。  
上半身こそ人型だが、スタンドの下半身は蜘蛛のように無数の脚が備わっていた。

「名前はジェーン、スタンド名は『グリーン・チップス・ベルト』。能力は、今アンタ達が体験している通りの解釈で、マル」

「……っ！」

女はジェーンが、青緑色の煙を全身から立ち昇らせた。  
すると近くの樹から無数の羽音が立ち、全身を菌糸と冬虫夏草に覆われた鳥の群れが地にポトポトと落下する。

「これは油断でも自惚れでも無く。信頼しているからこそ、見せている。あと数分で、全員がこうなつて絶命する。車から脱出した事には驚いた。でも、それだけの事よね」

「……っ！」

女はスタンドを出現させたまま、此方へと近付いて来る。  
「いや、むしろ。アンタ達は更にマズイ状況に自ら進んで陥つたつて言っても良いか。蟻地獄から奇跡的に抜け出したかと思つて安心したら、その先にアリクイの群れがいましたつてくらい最悪。——まあ、諦めな。その男に関わつた事を、あの世で後悔するんだなあ！」  
ジェーンがスタンドで、横たわるアリアへと殴り掛かった。

「……っ！」

（男を救おうなんて、安っぽい感情で行動しやがって。ムカつく女だよなあ。アリアちゃんよおっ！）

「……っ！」

心の声が、そのままジェーンの表情に現れた。  
膨れ上がった殺意は、『グリーン・チップス・ベルト』の拳を加速さ

せ、アリアの頭部へと振り下ろされる。

が、突如として地面から尖った金属製の物質が飛び出し、『グリーン・チップス・ベルト』の腕を貫通した。

「う、おおおおおおおっ!? な、何だこれはあああああ!」

本体である彼女の腕からも血が吹き出す。

思わず攻撃を中断するジエーン。

その、ガラ空きの顔面へ。

『押羅アツ!』

レンの『ハーティ・レグナ』の右拳が炸裂した。

「うげえっ!」

吹っ飛ばされたジエーンは樹の幹に背中から激突し、血反吐を吐いた。

颯爽と、アリアを背中に庇ってレンが立つ。

「アリア様。ルーク様とフェンネルをお願いします。ここは、私が相手をします」



『グリーン・チップス・ベルト』②



レンの家庭環境は、一見すると極普通だった。

父親と母親、姉と共に庭付きの一軒家に四人で住んでいた。学校にも通っていたし、食べる物にも着る物にも困らない。

欲しい物だってお願ひすれば与えて貰えた。

クリスマスだって毎年家族で過ごしていた。

ただ一つ。

他の家と違う所は。

家の中の一角に、大量の美術品が置かれていて。

その複製品を造る作業を、レンが担当していた事ぐらいだった。

両親は家で大量に高価な美術品の贋作を造り、独自のパイプを通じて世界中のコレクターや金持ちに高額で売り捌いていたのだ。

幼い頃から親が行う作業を繰り返し見ていたレンが、ある日。

一枚の絵の贋作を造るように母親に言われ、非常に完成度の高い品を造り上げたのが、きっかけだった。

レンの造る贋作は非常に良く出来ていて、絵画に留まらず、茶碗や寶石、壺等。

ありとあらゆる美術品の複製品を造り出していく。

その高い技術は鑑定士さえも欺く事が有り、彼女の両親は大いに喜び、レンを褒め称えた。

それを普通の家庭だと思いついていたレンにとって、両親の役に立っている事は嬉しかったし、疑問にも思わなかった。

中学校を卒業した彼女は、当たり前のように高校に進学した。

家を離れての寮生活となる事を両親に伝えると。



絵画の複製を今まで通り造り、まとめて家に送る事を条件に許可が降りた。

何故、両親はそんな条件を出したのだろうか。

不思議に思ったレンだったが、新しく始まる高校生活に気持ちが高まり、いつしか忘れてしまった。

だが、世の中には必ず際限が存在している。

いつかは終わりが来るモノである。

レンの場合、それは。

新しい高校生活にも慣れた、六月の事であった。

ある日、レンは教師に呼び出され、職員室に向かった。

待っていたのは、何人かの警察官だった。

彼等は、贋作を高額で売り捌く詐欺グループを追っているとの事だ。

周りで、何か事情を知っていそうな人間はいないか。

そんな質問をしてきた。

勿論、警察はある程度証拠や情報を揃えて、確信を得た上で質問をしてきている。

相手の反応を見る為だ。

レンは直ぐに「知らない」と言ったが、心当たりはあった。

今、自分の部屋にある複製品の絵画だ。

警察はそれ以上何も訊ねる事無く引き上げて行った。

しかし、レンの心臓は速く脈を打ち、酷く不安な気持ちにさせる。

まさか、自分の家族が。

レンは直ぐに父親と連絡を取った。

すると父親は、贋作による詐欺の話題には触れず、一方的に場所を指定してきた。

「二週間後、そこに来い」とだけ告げられ、レンは恐怖する。

それは家族でしか分かり得ない、無言の肯定であった。

自分は犯罪の手伝いをさせられていた。

まだ成熟していない彼女の心は、深い絶望へと沈んで行く。

更に追い討ちを掛けるように。

次の日、レンが犯罪に関わっているという噂が学校中に広まっていた。

今まで仲の良かった友達は手の平を返してレンに罵声を浴びせ、正義を語った。

それが、一番辛かった。

学校での虐めに耐えられなくなったレンは寮を飛び出し、指定された倉庫へと早々に向かった。

もう自分には家族しかない。

祈るような気持ちで、辿り着いた倉庫の中へと入ると。

そこには、レンが今までに造った大量の美術品が、段ボールに入った状態で山積みになっている。

更には、レンが使っていた道具がテーブルと共に置かれ。

まるでこの倉庫で贋作が造られていたように、錯覚する。

唾然として立ち尽くしていると、両親と姉が。

丁度車に乗って倉庫にやって来た。

車には、やはり。

レンの使っていた道具や、製作途中の美術品。

「――まさか」

全てを察したレンの声は、震えていた。

予定よりも早く倉庫に来ていたレンに、両親と姉は驚いた様子だったが。

直ぐに笑顔で取り繕い、獲物を狙う肉食獣の如く、ゆっくりと近付いて来た。

「こんな……こんなの……嘘だよね……！ 私、そんな……」  
そう。

家族は、警察に嗅ぎ付けられた事を知り。

レンに全ての罪を押し付けるつもりだったのだ。

しかも、倉庫内にはガソリンの入ったタンクが用意されていて、レンごと倉庫を焼き払い、警察が焼け跡の捜査を終える頃には。

海外へと逃亡している計画だった。

家族は容易く、ボロボロになったレンを切り離したのだ。

次の瞬間には、父親はレンに覆い被さり、首を絞めてきた。

その隣には、母親と姉が「ゴメンね」と言いながらも、笑っている。もう、何も信じられなくなった。

レンの中で、何かが音を立てて崩れる。

壊れたのはきつと、家族像だ。

温かくて優しい、家族像。

薄れゆく意識の中で、レンはしかし。

手を伸ばした。

そしてそこにあつた、彫刻刀を掴むと。

躊躇わずに父親の喉元へと深々と突き立てた。

これだけで、あっさりと。

父親は血の飛沫を上げて絶命した。

そして、母親が縄を持っている事に気が付くと。

近くの壺を持って振り下ろし、彼女の頭を割った。

両親殺害の現場を目の当たりにした姉は恐れ、ナイフを構えながら数歩退いたが。

レンは姉の手を捻り、逆に彼女の胸へとナイフを差し込んだ。

全てが終わった後、レンは荒く息を整えながらその場に留まり続けた。

生きるという本能的な行動は、彼女の危機を救った。

しかし同時に。

何も信じられなくなった彼女は、自分の意志で行動する勇気を失ってしまった。

その後、到着した警察によってレンは拘束された。

捜査を進める中で、贗作の手伝いをさせられた事や、レン自身にその意志が無かった事。

更には現場の状況等から正当防衛が認められた為、レンは解放された。

だが。

この抜き差しならない現状に、彼女自身が生きる意味を見失ってしまっていた。

自分の手は既に、罪や血で汚れている。

それに。

もう、裏切られるのは。

——嫌だ。

そんな時。

彼女に手を差し伸べたのが、スピードワゴン財団であった。



「アリア様。ルーク様とフェンネルを、お願い致します。私は、あのスタンド使いを倒し。この能力を解除させるので」

レンは、安心を得ていた。

如何なる状況だろうと、『命令』を遂行さえすれば。

もう、苦しまなくて良い。

行動の先に失敗があったとしても、それは自分ではないと割り切り、心から切り離して考えられる。

そう、命さえも。

「やって、くれたなあ〜。この、親殺しが！」

ジェーンは、血塗れの顔面で荒々しく叫んだ。

何故、知っているのか。

訊ねる前に、レンは理解した。

敵は、ルークを追って来た。

当然、周りの人間の事は調べるだろう。

「……そう言われるのは、不愉快です」

「おや？」

意に介さない。

そう考えての安い挑発だったが。

嬉しい誤算である。

これは、最も弱い部分だと解釈するべきだろう。

「テメエ、まさか。そんな薄汚え手で、ご主人様に奉仕してやがるのかあ？ ああ？」

「……っ！」

激昂。

レンが最も我慢ならない、許せない部分を。  
的確に狙い打ちしてきた。

およそ形容し難い怒りがフツフツと煮え滾り、己の理性を剥奪して行くのがハッキリと分かる。

「レンさん！ 今は冷静になって下さい！」

アリアの呼び掛けは、逆効果だった。

絶対に否定出来ない、消える事の無い十字架を背負った自分。  
その気持ちの全てを理解されたようで、辛かった。

行き場の無い怒りが、レンのスタンドの拳を握らせる。

「来なよ。アタシをブツ倒すんだろ？ 殺人鬼？ それとも、アリアちゃんが心配か？ ……いや、そんなワケねえよなああああ？」

ジェーンは踵を返して森の中へと姿を消した。

しかし直ぐにはレンは追わない。

それは決して、アリアの制止に答えたワケではなかった。

去る直前にジェーンが口にした台詞。

動けば、アリアよりも己の感情を優先させた事になる。

奇妙な事に、冷静さを欠いたレンの頭に代わって、その身体は忠実に『命令』の遂行に努めた。

「あの女は……私の生き方を否定しました。『命令』でしか生きられない、私の人生そのものを。それは許す事が出来ない、侮辱的な言葉です」

振り返らず、淡々と背中自身で自身の気持ちをアリアへと吐露するレンは、まるで。

このまま決別するかのような、悲しさと儂さがあつた。

「……アリア様。繰り返すようですが、私は追います……」

「待って下さい、レンさん！」

追い掛けようにも、身体の冬虫夏草とは無関係にアリアは立つ事が出来ない。

かといって、引き留める言葉も浮かばない。

今、アリアに出来る事は。

「……っ。最初に車に乗っている時、ルークさんとフェンネルさんにだけ冬虫夏草が生えたのは何故でしょうか。私とレンさんの症状が軽いのは？」

冷えるような哀しみが伝わり、胸が押し潰されそうになる。

それでもアリアは、言葉を続けた。

少しでも、レンが冷静に闘う事が出来るようにと。

「この冬虫夏草の生える攻撃には、条件があります。車外へ出た瞬間から、私達にも急激に症状が現れたのもその為です。それさえ分かれば、勝てます」

「アリア様……」

レンは振り返りそうになって、しかし、堪えた。

それ以上の言葉も無く。

レンは、アリアを置いて森の中へと走り去ってしまった。

追跡を始めたレンは、我武者羅に森の中を走り続けた。

こうしている間にも身体の冬虫夏草は増え続けている。

ルークとフェンネルの方が、進行は速いかも知れないが。

自分は空っぽの人間だった。

目を反らしていても、その事実は覆らない。

もう自分の心は、誰にも開く事は無いだろう。

自己暗示を掛けるように。

決して二人の為だけに走っているのではない事を、レンは再確認し

た。

と、暫く走った先に。

ジェーンは腕を組んだ状態で、堂々と待っていた。驚く事に。

先程の腕と顔面の傷が治っている。

「太陽の光を克服して、尚。この再生能力。再生するとお腹が空いちやうのが玉に傷なんだけどねえ」

ジェーンはペロリと、自らの唇を舐めて笑った。

「まあ。狙い通り。バカな食料ちゃんが一人でやって来たから、いつかああく〜！」

傍らにスタンドを出現させたジェーンは一足で距離を詰め、両拳で襲い掛かった。

『グリーン・チップス・ベルトオオオツ！』

レンはスタンドを出現させ、腰を落として身構える。

少し矛盾した表現だが、煮え滾るような怒りに支配されていて尚、レンの頭は冷静だった。

「スピードワゴン財団の報告書にあった、進化した吸血鬼ですか……」

『押羅アツ！』

その、敵スタンドのスピードを上回る速度で、レンの『ハーティ・レグナ』は『グリーン・チップス・ベルト』の頭部へと拳を叩き込んだ。

「うげえっ!?!」

本体であるジェーンの顔が歪み、血飛沫と共に仰け反る。

踏み留まり、尚も拳を繰り出してきたが。

この至近距離だ。

近距離パワー型である『ハーティ・レグナ』は素早く左右へと躲し、カウンターで胴を穿つ。

「ぐうお!!」

更に、本体であるレンが『ハーティ・レグナ』と共に大胆な回し蹴りを放ち、スタンドごとジェーンを吹っ飛ばす。

受け身も取れず、そのまま樹の幹に背中から激突したジェーンは、

ズルズルと血塗れで地面へと落下した。

「……能力や効果範囲の維持にスタンドパワーを使っているようですね。スタンド自体のスピードやパワーは、それ程高くはないようです」

「はあ……はあ……」

「貴女のスタンドは、真つ正面……一対一での戦闘には向いていませんね」

「ククク……！　ハハハハハハハ……！」

不気味さ。

その言葉が具現化したかのような、歪んだ表情でジエーンは笑う。レンに恐怖は無かったが、警戒はした。

明らかに、不利な近接戦闘の連続。

何か妙だ。

「ククク……！　そう、だよなあ。お前のスタンド……『ハーティ・レグナ』だっけ？　至近距離ならお前の方が強い。それは認めてやるよ。……けどよお。お前、私を追って来たよなあ、おい。テメエはとにかく、全速力で、我武者羅に私を追って来た」

「……？」

「それで、今の戦闘だ。当然、温まるよなあ？　テメエの身体。それでよお、どうなると思う？　温まったテメエの身体」

直後、レンの身体から冬虫夏草が一齐に蠢いて生え、菌糸を吐き出した。

「な……!?!」

即座に身体の動きが鈍くなり、レンはうつ伏せに倒れた。

代わりにジエーンが、笑いながら起き上がる。

「掛かったぜ、この間抜けが！　『グリーン・チツプス・ベルト』！

既に！　真菌はこの森全体に広がってんだ！　あとは、真菌が好む条件を満たすだけで！　テメエは即座に寄生される！」

「く……」

「菌糸が出たって事はよお、冬虫夏草にとって。テメエは最良物件に認定されたって事だぜええええ!?　そのまま絶命した後で、血を吸つ



「やるよ」

レンはスタンドを出現させて反撃に転じようとしたが、身体を蹴り上げられ、吹っ飛ばされる。

「うう……！」

そのまま樹に衝突すると、菌糸が幹にくっ付き。

レンの身体を固定すると同時に、冬虫夏草が全身を覆っていく。

「ア〜ハハハハハハ！ テメエの身体を奪ってんだぜえ!? スタンドだって、本来のスピードじゃあ動けねえんだよお！」

「……っ」

ギリギリまで保っていた意識が、鈍く。

白い靄に包まれて行く感覚。

このまま意識を失えば、死。

「テメエはよお。ただ自分が安心してたくて側にいるだけなんだぜええええ？ アリアちゃんも、テメエの事なんか側に置いときたくねえのさあ〜！ テメエは所詮、独りなんだよ！」

「アリア……様……」

瞼が、重い。

自分は今、生死の狭間にいる。

「もう完全に虫の息だが、このまま何もしねえで見てるのも退屈だからよお〜。せめて、テメエの顔をグチャグチャに潰してやるよ」  
ジェーンは自らの傷口を再生させながら、ニンマリと笑ってレンの正面に立った。

「食らえ！ 『グリーン・チップス・ベルト』、トドメをさせえええっ!!」

その両拳がレンを捉えようとした、その時。

突然真横の茂みが揺れ。

枝木を薙ぎ倒し、中から運転手が乗っていないトラックが飛び出して来た。

そして、レンに襲い掛かる寸前のジェーンを跳ね飛ばした。

「うげえっ!? 何iiiiiiiiっ!」

ジェーンは何度か地面の上を跳ね、転がった。

トラックはその場で停止。

すると荷台の扉が開き、降り立つ人影。

その人物は、器用に車椅子でウイリーしながら地面へと着地する。

「な……!?! 馬鹿な、どうやって!?!」

「——最初に車の中で、ルークさんとフェンネルさんにだけ冬虫夏草が生えた事と。貴女を追って、レンさんが森の中へと入った後、寄生された鳥の群れが海の方角へ飛んで行ったのを見て、確信しました」  
アリアは、レンを背中に庇いつつ、ジェーンを睨んだ。

彼女自身にも冬虫夏草は生えてきているが、まだレン程ではない。  
「この冬虫夏草は、体内のナトリウムに反応して攻撃が始まっている。そして寄生された生物は、よりナトリウムが豊富な場所に誘導されてしまうのだと」

「……っ!?!」

「地上の脊椎動物の体液のナトリウム濃度は約0.9パーセントですが、個人差は有ります。ほんのちよっぴりの差ですが。ルークさんは食事を取った後、フェンネルさんは、出発前にスナックを食べていた……普段よりも濃度が高くなっていた筈です。そして、此処は海沿いの道。車外へ出れば、潮風が吹き付けて身体の表面に大量のナトリウムが付着する……。急激に寄生が進んだのは、その為です」

「——へえ、賢いねえアリアちゃん」

「スタンドで樹を倒して風避けを作っただけで、二人共症状が軽くなりましたよ?。そして二人が、私を此処へ運んでくれたんです」

アリアは車椅子の車輪に手を掛けた。

「ルークさんの幽霊の車椅子と、フェンネルさんのスタンド能力。二人共、レンさんを助ける為に。自分の安全より、私を送り出す事を優先したんです」

「……ルーク……様。フェン……ネル……」

その、アリアの声を噛み締めるように、レンは手放し掛けた意識を取り戻した。

二人が。

自分達だって危険なのに。

それに。

それに、目の前にはアリアが居る。  
もう、生きる事を諦めていたのに。

こんな自分の、側に居る。

「フン、くだらねえよなあ？ どの道、テメエも始末するつもりだったんだ。ソイツみてえに、菌糸に飲まれる運命なんだよ。スタンドの能力が分かった所で、もうどうにもならねえ。汗、掻いてるよなあ？  
アリアちゃん、今」

「……。」

「そこにいる殺人鬼の為なんぞに、怒って、興奮して、可愛く掻いてるよなあ？」

直後、アリアの身体からも冬虫夏草が大量に生えて来る。

ジェーンが軽く舌舐りをした。

「その身体で！ 何処まで闘えるかなあ!？」

スタンドを繰り出し、ジェーン自身も距離を詰める。

『『シルバー・チャリオッツ』ッ！』

接近してきた所へ、アリアはスタンドで斬撃を放つ。

その場を動かないのは、レンを守る為でもあるが。

此処は整備されていない森の中だ。

車椅子での移動自体がそもそも困難な場所なのだ。

加えて、身体の反応は凄まじく鈍い。

真っ向からの近接戦闘で、『シルバー・チャリオッツ』が防戦一方である。

普段のスピードの半分以下の性能しか期待出来ない。

「動きがノロいよ！ アリアちゃんさあー！」

敵スタンドの打撃はアリアのスタンドの胴体を捉え、アリアへのダメージとなった。

が、アリアは車椅子を力強く押さえて踏み留まる。

「……アリア……様」

「大丈夫、です。レンさん……。必ず。必ず助けます、から……。どうか……。」

再び、レンの意識が遠退く。

目の前ではアリアが必死の攻防を繰り返して、闘っているのに。もう、殆ど感覚が無い。

アリアが吹き飛ばされ、自分の直ぐ側に転がっても、声さえ出ない。きつと、もう自分は死んでいるのだ。

いや。

あの時。

父親に首を絞められたあの時からもう、死んでいたんだ。ずつと、ずつと前から。

体も、心も。

薄れゆく意識の中で、レンはしかし。

あの日と同じように、手を伸ばしていた。

文字通り、無意識の行動だった。

すると、温かいモノを掴んだ。

うつすらと目を開くと、アリアが。

自分の手を握り締めてくれている。

傷だらけで、車椅子から投げ出されて尚。

それでも尚、手を伸ばして、握ってくれている。

「必ず、助けます！ だから……、だから、レンさん！ どうか……ど

うかももう一度だけ、人を信じて下さい！ 私……私は、レンさんの

……友達ですから！」

「……っ！」

もう、どうでも良い筈だった。

信じるのも、裏切られるのも。

なのに。

それなのに。

この手を離したくないのは何故だろう。

レンの心に、感覚が無かった筈の身体に、汲み上げてくるモノがあった。

——涙だ。

『ハーティ・レグナ』ツ！！



その拳による連打を凄まじい速さで叩き込む。

瞬く間に敵スタンドの全身を破壊し、本体であるジェーンごと、殴り飛ばした。

(バ……カ……な!? この、私が……)

地面へと無惨な姿で落下したジェーンは、意識を失った。  
そして。

ジェーンが再び意識を取り戻して起き上がると。

傷を治療して貰ったアリアが、車椅子に座った格好で。

レンと共に、ジェーンの前に笑みを浮かべて佇んでいた。

「行きますよ、ダメ押し」

「ひい……!?!」

『押羅ツ!』

拳打と刺突による超高速の連打撃。

その破壊力はジェーンを跳ね飛ばし、そのまま海へと落下させる。  
アリアとレンはクルリと海に背を向け、片手でハイタッチをした。



## 波紋疾走



「何とか、なつたみたいだな……」

身体の冬虫夏草が完全に消失したのを確認したルークは、立ち上がって背伸びをした。

フェンネルも立ち上がり、手持ちの携帯電話を操作する。

『かなりヤバめのスタンドだったねえ。お嬢が性質に気付かなかつたら、全滅してた。……かも』

「ああ、ヤバかったよ」

『ルークも、どさくさに紛れてお嬢の太ももやおっぱいガッツリ触ってたしね』

「し、仕方無いだろうっ！ 身体が勝手に動いてたんだ！」

半眼でニヤリとするフェンネルに、「誤解だ、不可抗力だ」と抗議するルーク。

携帯電話のメールやらメモ機能を使って会話するフェンネル独特のコミュニケーション手段にも、すっかり慣れてしまっていた。

フェンネルは画面も見ないで片手で更に文字を打ち込み、ルークへとメッセージを伝えてくる。

携帯電話が身体の一部として機能しているみたいだ。

『ま、それより今はお嬢とレンちゃんと合流しないとね。敵が一人とは限らんし、固まっていた方が絶対安全だわ』

確かに、と言い掛けたルークの携帯電話にメールが届く。

レンからだ。

『私とアリア様は無事です。ギリギリでしたが。敵は、傷を再生させていた事から、スピードワゴン財団の報告にあった、進化した吸血鬼

であると推察されます。フェンネルが居るならば心配は有りませんが、合流するまでお気を付け下さい』

あのジェーンとか名乗った女。

スタンド使いであると同時に吸血鬼だったようだ。

スピードワゴン財団の調査によれば。

石仮面と矢の力によって、新たな生物へと進化した吸血鬼が近年確認されているらしい。

矢の力は人からスタンド能力を引き出すが、死ぬ確率も高い。

もつとも、吸血鬼の方が種としての理を破る事になるので、更に死亡率は上がるようだが。

あの女も進化という生物上の修羅場を潜り抜けて来たという事である。

同じような奴等があと何体も存在するとしたら、ゾツとする。

そういえば、あの女はそもそも何故、自分を狙ってきたのだろうか。

厄介な能力を持っている、と言っていたが。

と、フェンネルが服の袖を引っ張ってくる。

彼女はアリア以上に小柄で線も細く、童顔な為、車の運転をさせていたら警察に職務質問されそうである。

そんな年齢不明な彼女は、自らの携帯電話の画面を見せてきた。

『何か奇妙だ』

自らの唇の前で指を一つ立て、万国共通の音を立てるなのサインをしてみせる。

『グリーン・チップス・ベルト』から解放された鳥達が山や森へと帰って行くし。

今の所、海沿いの道は平穏そのものである。

『何の音だろう』

そう訴えられても、ルークにはまだ何も聞こえない。

鍛えられたフェンネルの能力に関係があるのかも知れないな、とルークは思った。

なんせ、彼女はレンやミリイと違い、スピードワゴン財団が正式にアリアの元に派遣していたボディガードだ。



この見た目からは判断出来ないが、フェンネルはある一族の技を受け継ぐ武闘派である。

「音って、どういう音なんだ？ どっちの方向から聞こえる？」  
すると、フェンネルは下って来た坂の上の方向を指差した。

『あっちの方向だね。何かが、地面を転がって来ている。車とかじゃあない。もっと軽いモノだ。でも空き缶みたいな軽い音でもない』  
「どれどれ？」

ルークは幽霊の双眼鏡を懐から取り出し、坂の上を眺めた。  
特に変わった所は無いが。

『流石ルーク。そんな道具まで持っているなんてね。用意周到だ』

一回、フェンネルに袖を引っ張られ、ルークは双眼鏡から携帯電話の画面へと視線を戻す。

『それがあれば、屋敷の外からお嬢の生着替えや裸を覗く事も可能って事か。やるね』

「君の中で、俺は相当にヤバい人間になっているな」

『私には、そんな大胆な事は出来ないからね。盗撮ぐらいしかやっていない。結構良い身体してんだぜ、お嬢。あ。ルークは、さっきのもう知ってるか』

「今、俺の中で君が相当ヤバい人間になったよ」

フェンネルはルークに携帯電話を見せながらも、坂道の上を鋭く睨んだままだ。

内容と行動が噛み合わないにも程があるが、ルークは気を取り直して双眼鏡を顔に当て直す。

と、坂の頂きから、確かに何かが転がって来ている。

「何だ、アレ……？ 鉄の塊か？ あ……いや、アレはドラム缶だな」  
そう、ルークが発見したのは古びたドラム缶だった。

確かに、空き缶以上車以下の大きさである。

しかし、こんな坂道を真っ直ぐに転がり下りて来る事自体、中々に奇妙だ。

「何かの攻撃か？ この距離から、あんなに分かり易く？」

あの位置からなら、ここまで転がって来るのに更に五分は掛かりそ

うである。

まず、絶対に当たらない。

『まあでも、警戒しておいても良いかも知れない』

等と、画面を見る事無く指先の感覚だけで文書を作成するフェンネルが、ふとルークの方向を見ると。

既に。

ガードレールから男の上半身だけが出現している。

しかもその手刀がルークの首筋目掛けて伸びている。

(何iiiiiiiiiiii?)

フェンネルは戦慄を抱くも、身体は思考より速く動いた。

素早くルークに足払いを掛けて体勢を崩し、手刀の狙いを外す。

男の鋭利な指先は、ルークの肩口を浅く斬り裂いた。

その、間に。

「ゴオオオオオ……」

足払いを掛けた地に沈んだ体勢で。

フェンネルは深く呼吸をするが如く、独特の呼吸法を行う。

途端に彼女の身体から山吹色の光が柔らかく迸り、スパークした。

即座に。

男の突き出ている腕を、全身をバネのように撓らせて真下から片足で蹴り上げる。

オーバードライヴ  
波紋疾走!

フェンネルの靴底が直撃した瞬間、スタンガンの様な音を立てて光のエネルギーが男の腕を駆け抜けた。

その跳ね飛ばすような衝撃に男は上体を仰け反らせ、動きを止めたが。

自身の腕や手に何の損失も無い事を悟ると、フェンネルを一瞥し、鼻で笑った。

(……咄嗟に練ったとはいえ、私の波紋を受けてダメージ無しかよ。太陽を克服したってというのは、ホントつぼいね)

頬に一筋汗を掻きつつ、フェンネルは片手を真横へと伸ばした。

そこへ、さつき宙へと投げていた携帯電話が落下する。

片手でクルクルと回してから、器用に掴んだ。

「……今のは、波紋か？ 小娘？」

水辺から岸にでも上がるかのように、ガードレールからズルズルと這い出して来た男が、フェンネルを指差して訊ねる。

そんな事にいちいち答える必要の無いフェンネルは、片手で携帯を操作しつつ。

再び波紋の呼吸法を行った。

「今も昔も、波紋戦士というのは血の気が多くて鼻が利く。俺から血の臭いを猟犬のように嗅ぎ取るや、直ぐに波紋で攻撃か」

「……。」

波紋の呼吸法によって全身に山吹色の光を漲らせ、フェンネルは腰を落として構えた。

ついでに逆手に持った携帯電話の画面を男に向け、打ち込んでいた文字を見せる。

『どうやら昔。波紋戦士にボコられちゃったみたいだね、お前。さつき腕を心配してたからさあ〜。もしかして走馬灯とか見えちゃったりしたかよ』

さつき。

この男は、真つ先にルークを狙って奇襲を仕掛けてきた。

まず間違いなく。

ここで始末するつもりだ。

(……狙いはルークのスタンド能力っぽいね。マズイわ、これ。何とか私に注意を向けないと。奴は、私の攻撃を捌きながらルークを狙うつもりでいる。奴には、それが出来る……！)

ルークは仰向けに倒れ込み、起き上がる途中で隙だらけだ。

これを見逃すような甘い連中なら、こんな所でそもそも襲ってはこないだろう。

男は。

フェンネルの予想通りに、ルークに向かって一直線に走って来た。

ただ、狙いが非常に分かり易い事もあり、既にフェンネルは体勢低く回り込んでいる。

男と視線が交差した。

(コイツのスタンドってさあ……)

坂の上から転がって来ているドラム缶。

ガードレールから出現し、鋭い手刀でルークの肩を切り裂いて見せた。

その一連の動作から、フェネルは考察する。

瞬間。

正面から男が繰り出した手刀を臆する事無く。

自らの両手を交差する格好で、ガツチリ手背で挟んで受け止める。

予想通り、男の指先からはギミックナイフの様に刃物が飛び出していた。

そのまま男の腕を引いて接近と同時。

反身を捻り、軸足。

踏み込み。

下から突き上げるように肘で男の胴体を高速で穿つ。

雷撃を思わす波紋エネルギーが男の身体を貫き、衝撃波が背中で短く咲いた。

間髪入れず。

浮かんだ男の身体へと、渾身の力で蹴りの連打を叩き込む。

サンライトイエローオーバードライブ  
山吹色の波紋疾走!!

最も太陽光に近い波動を持つ、山吹色の波紋エネルギーが。

叩き込まれる度に各所で鳴動と共に弾け、周囲の大气すら劈く。

波紋によって己の肉体すら強化したフェネルの、人間の知覚範囲ギリギリの領域から繰り出される、凄まじいまでの連打撃である。

蹴り上げられた男は、殆ど錐揉み状態で落下してくる。

その落下地点をフェネルはピンポイントで狙った。

持っていた携帯電話を宙に放り投げて、腰を落として腕を引く。溜めた力を一気に炸裂させるように。

重ねた両掌を落下した男の背部へと撃ち込んだ。

ウェーブショック  
仙道波掌!!

轟音が唸る。

男の身体は真横へと弾き飛び、その先にあつた樹に激突して止まった。

繰り出したフェンネルの両手は、僅かに白煙なんて吹いている。余りの衝撃に彼女のフレアスカートは大きく捲れ上がり。

ストッキング越しに、丸みを帯びた純白の逆三角形が見えてしまつてはいるが、今はそれ所ではない。

ルークは立ち上がった。

「た、助かったよ」

フェンネルは落下してきた携帯電話をキャッチし、文書を作成する。

その間も、敵からは目を離さない。

『逃げる、ルーク！ 奴の狙いはお前を始末して、スタンド能力を使えなくする事だ！ 私が時間を稼ぐから、出来るだけ距離とって！』

「だ、駄目だ！ 今の内に君も来い！ 逃げるなら二人でだ！」

『いいから行けて！ 奴のスタンドがくるぜい！ 奴の能力は恐らく、金属と一体化出来る能力だね』

フェンネルが携帯を閉じ、直接ルークにハンドサインを送ったが。

その時、気が付いてしまった。

男の這い出して来たガードレールに無数に巻き付き、激突した樹の幹まで真っ直ぐに伸びた金属性のワイヤーロープが。

周囲に張り巡らされていた事に。

見れば、樹の幹に男の姿は無く。

代わりにワイヤーロープが巻き付いている。

（何……!?! 金属のワイヤーを！ 既に！ しまった。今度はこの中を！）

無数のワイヤーロープ。

その内の一本から、男は静かに頭と片腕だけを出現させ。

掌から出現させたナイフで、背後からルークの右足を切り裂いた。

「うあああああつ!?!」

鮮血と共に、ルークが地面に転がる。

駆け付けようとするフェンネルへ、ルークが苦悶の表情を浮かべな

がら叫んだ。

「う、後ろだフェンネルッ！」

「っ!」

間一髪。

フェンネルは身を屈めて男の水平蹴りをギリギリで避けた。

男の爪先からはアーミーナイフが飛び出しており、直撃していたら致命傷だっただろう。

（私を狙ってきた……！ 傷を負わせたルークは、後で始末するって事かい）

即座に。

ワイヤーロープの一つから男の腕だけが飛び出し、真上からフェンネルの首筋を狙った。

フェンネルは後転してどうにか避けたが、その避けた先に何故かわイヤロープが張られている。

（野郎……！ ワイヤー張りながら攻撃してやがんじえ！）

そこから繰り出される、無慈悲な蹴り。

パツと、フェンネルの腕から血が散った。

咄嗟に身体を捻って急所への攻撃を回避したフェンネルが、苦し紛れにその脚へと肘鉄を放つ。

だが、それ以上の滞在はせず、男の身体はワイヤーロープの中へと再び潜行し、フェンネルの攻撃は空振りした。

（クソ……、確かに私もそうするだろうぜ。ヤツはこの能力でドラム缶に潜んで移動し、ガードレールを通って堂々と私達に近付いて来た……！）

間髪入れず。

フェンネルの胴体目掛けて男の蹴りが飛んで来た。

これも驚異的な反応を見せたフェンネルが身を捻って直撃を免れたが、飛び出した刃が猛烈な勢いで肉を掠めて行く。

「……………」

瞬間。

今度は鉄骨が横薙ぎに襲った。

逃げ場は無い。

両腕で防御するも、小柄なフェネルの身体は容易く弾き飛ばされる。

彼女の身体はそのままガードレールを越えて、崖から海の方へと落下していった。

「フェネルっ！」

ルークの悲痛な叫びが、海沿いの道に木霊した。

崖上から落下し、海風と浮遊感に包まれて文字通り真つ逆さまに墜ちるフェネルは、しかし。

冷静だった。

「コオオオオオ……」

上下が反転した視界の中で波紋を練り上げ。

そのエネルギーを先ずは右手の平へと集束、岩肌へと手を近づけた。

くつつく波紋！

フェネルの右手全体が岩肌に吸い付くように張り付き、落下の勢いが弱まる。

そこで一旦波紋を解除し、体重移動で上下の逆転を元に戻すと、今度は静電気を帯びたビニールの如く両手と両爪先で岩肌へとくっ付いた。

(あつぶねえなあ)

取り敢えず危機を脱したフェネルは、安堵したのも束の間。

直ぐに崖を上り始める。

今、上ではルークが命を狙われている筈だ。

急がなくては。

消防隊が縄梯子を上るように。

ほぼ垂直の崖をあとという間に登り切って、フェネルはルークの元へと駆け出した。

敵は丁度、ワイヤーから這い出ており。

今まさに、うつ伏せに倒れるルークの頭を踏み砕こうとしていたのだ。

「流石に距離が遠過ぎる。」

敵はフェンネルに気が付いていながら、勝ち誇ったような余裕の笑みなんて見せ。

所詮人間なんて吸血鬼の足元にも及ばない下等生物だ、なんて言いたげな表情を浮かべてすらいる。

「もう遅い。このまま頭蓋骨を踏み砕いて、海にでもバラ蒔いてやる」男の靴底がルークの頭に暗い影を落とした。

しかし、その時。

——ピリリリリリリリ。

「っ!?!」

ピリリリリリリリ。

直前で男は足を止めた。

自分の持っていた携帯電話が、結構な音量で鳴り始めたのだ。

「……………!?!」

胸ポケットに入れておいたそれを引っ張り出し、画面を確認してみると。

『ファイル転送中……………63%』

仲間からの着信は無く、何処かへ携帯電話内のデータを転送している。

全く身に覚えが無い動作だ。

闘いの途中でボタンが偶然押されたのだろうか。

だが。

突如として非通知でメールが届き、しかも勝手に開く。

『お仲間のメールアドレスと電話番号は頂いてくぜい』



と、男の携帯電話の画面から。  
蜜蜂のような姿をした小型のスタンドが一匹、顔を覗かせた。

「何い……!? こ、このスタンドは……まさか」

男が驚愕し、フェンネルの方を振り返ると。

波紋の呼吸によって全身に波紋エネルギーを漲らせたフェンネルが、不敵な笑みを浮かべて拳法の型を取って身構えている。

今度はメモ機能が勝手に起動し、自動的に文字が打ち込まれていく。

『スタンド能力、ネオン・ウルペース。お前さんの携帯電話を私のスタンドの支配下に置いた。さっきのラッシュの時にな。この意味、分かるよなあ?』

「……く」

盗まれているのは仲間の情報だけなのだろうか。

例えば、携帯電話の位置情報等も同時に奪われているとすれば。

かなりマズイ。

直ぐに、携帯を破壊する考えが男の脳裏を過るも。

『おっと。携帯壊そうとか、そういうのは成立しないぜ。ルークのスタンド能力がある限りな。もう分かっただろう? お前が始末するべき本当の順番ってヤツが』

(携帯電話を破壊しても、この男のスタンド能力で幽霊の携帯電話として回収されてしまう……! 情報を盗んだであろう、波紋戦士の携帯電話を最優先で奪わなくては! しかし、破壊は出来ない。奴を始末し、確実に奪う必要がある! 何より、この女のスタンドは十分に危険だ)

男はルークから離れると、自身の携帯電話を懐へと仕舞う。

そしてフェンネルの企みに乗るカタチで、動揺を悟られぬよう、彼女と再び対峙した。

「理解出来ないな、貴様の行動は。どの道、二人共に始末するつもりなのだ。遅いか速いか、只のそれだけの事なのだ」

冷徹に掌のアーミーナイフを見せ付ける男へと、フェンネルは携帯電話の画面を翳す。

『理解出来ないのは、多分お前の方だろうさ。お嬢がいつも言っているけど、スタンド能力ってのはどんな能力でも、重要なのは使い方さ。強い弱い of 概念の話をしているんじゃない。現にお前は今の所、私に結構追い詰められているだろう?』

「……………」

男の額に青筋が浮かぶ。

こんな小手先の、何て事の無い能力。

それでも今、此方が最も嫌がる手段で行動を制限されている。

許しがたい屈辱感が男の身体を突き動かした。

猛禽類の如く鋭くなった両眼で小柄な少女の姿を捉えると、無数の刀剣を身体から生やし、一足で飛び掛かる。

——が、男の真横へと。

突如として猛スピードで走って来た無人のバスが衝突。

男の身体をフロントガラスに釘付けにした状態のまま走り去る。

「うぐう……………!? 何だ、こ、このバスは……………!?」

男の目の前で、バスのハンドルやシフトレバーが独りでに動き、走りしている。

「奴のスタンドか……………! 恐らくは、遠隔操作型の! こ、このスピードで。走らせているぞ」

男はフロントガラスを破壊し、バス内部へと転がり乗る。

運転手も乗客も居ない。

当然といえば当然だ。

「時間稼ぎか、無駄な事——」

言い掛けて、男は気が付く。

最奥の後部座席に脚を組んで堂々と腰掛けている、フェンネルの姿に。

『私を見て、時間稼ぎなんて推測してんのか？ 別に私は、次のバス停まで行く為に乗ってんじゃない。——お前をこの場で確実に始末する為に、煙草臭いバスに乗っているんだぜ？』

不敵に笑うフェンネルが、携帯電話の画面を見せてくる。

『そこん所、理解出来ているかな』

